
カンピオーネ!
受難の魔王たち
Campione VIII
丈月城
Illustration
シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

VIII　受難の魔王たち

丈月　城

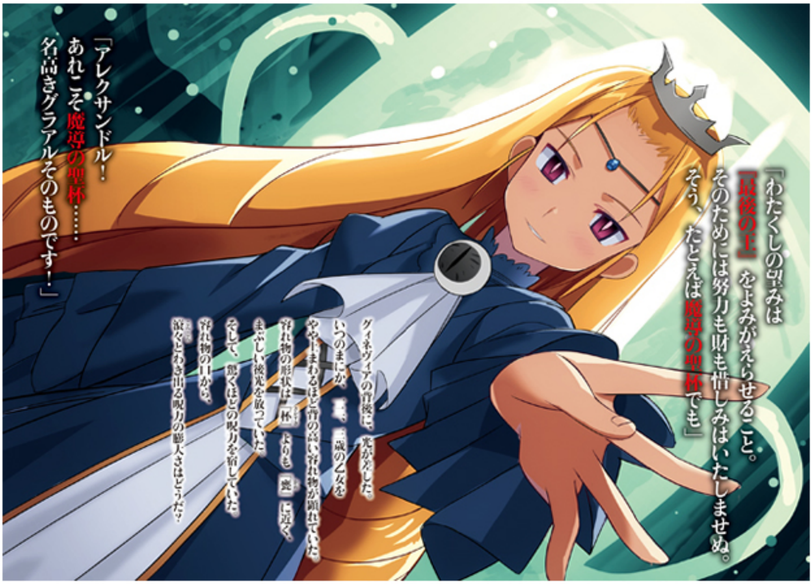
この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。



丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
受難の魔王たち
Campione
VIII


聖ラファエロ
アレグー
アリス
リリアナ
エリカ
さくら
冬姫


「わたくしの望みは
『最後の王』をよみがえらせること。
そのためには努力も財も惜しみはいたしませぬ。
そう、たとえば魔導の聖杯でも」
グィネヴィアの背後に、光が差した。
いつのまにか、一、二歳の乙女を
やや上まわるほど背の高い容れ物が顕れていた。
容れ物の形状は「杯」よりも「壺」に近く、
まぶしい後光を放っていた。
そして、驚くほどの呪力を宿していた。
容れ物の口から、
滾々とわき出る呪力の膨大さはどうだ？
「アレクサンドル！
あれこそ魔導の聖杯……
名高きグラアルそのものです！」


「わたしの王様は、本当にひどい人なんだから」
「昨夜のように、また悪ふざけをされるおつもりですか？」
「恵那だって王様のためにいろいろしてあげたいんだから」
「そ、その、ひとりで脱げますから……」

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

香こう月づきさくら

護堂のはとこ。

陸りく鷹よう化か

護堂の義姉・羅濠の直弟子。

沙さ耶やの宮みや馨かおる

正史編纂委員会東京分室室長。

アレクサンドル・ガスコイン

黒王子の異名を有する魔王。

アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール

グリニッジ賢人議会議長。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
受難の魔王たち
Campione VIII

第１話　謎の魔王カンピオーネを求めて

1

　九月も中旬にさしかかってきた頃。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうが日につ光こうにおもむき、斉せい天てん大たい聖せいと対決するよりも前の話である。

　この夜、草薙家の面々は家族水入らずで食卓を囲んでいた。護堂と妹の静しず花か、祖そ父ふ・一いち朗ろうの三人である。兄妹の母・草薙真ま世よだけがいない。

　とはいえ彼女が家にいることは滅めつ多たにないから、いつも通りでもあった。

　今こ宵よい、イタリアから来た金髪の悪魔はいない。意外なトラブルメーカーである銀髪の騎士もいない。家族水入らずだ。

　護堂は落ち着いた気分で箸はしを動かし、サンマの塩焼きを味わっていた。

「でも、何か忘れている気がするんだよなあ……」

「どうしたの、変な顔して？　あ、お兄ちゃんもおかわりする？」

　炊飯器から二杯目のご飯をよそいながら、静花が訊たずねてきた。

「じゃあ、もう一杯。……いやさ、そろそろイベントっぽい何かがあったと思うんだよ。それが何か思い出せなくて、もどかしい感じなんだ」

茶ちや碗わんを差し出しながら、護堂は言った。

大盛りのご飯が盛られて返ってくる。ちなみに静花は、自分にも同じ量をよそっている。

小こ柄がらでスリムなくせに、よく食べる妹なのだ。

——いくら食べても太らない。いくら飲んでもつぶれない。

草薙家の母が所有する身体的特とく徴ちようである。娘の方も同じ特質を備えているらしく、その片へん鱗りんをときどきかいま見せる。できれば『魔ま性しようの女』『天職・女王様』などの精神的特徴は継けい承しようしないで欲しいものだが……。

「護堂が忘れているのは、きっとさくらちゃんのことだろう」

不意に口をはさんだのは、祖父だった。

「あの子が大学に入って、そろそろ半年が過ぎる。ほら、最低六か月はうちに来ないって約束があったじゃないか」

「……ああ。そういえばあったなあ、そんな話」

香こう月づきさくら。草薙兄妹の『はとこ』に当たる少女。

明めい治じから昭しよう和わ初期にかけて激動の人生を送った人間が多いため、草薙家直系の生き残りは祖父くらいである（ブラジルとニューギニア諸島に生き残りがいるかも、という話はあるが）。

だが、分家の親類はそこそこいたりする。

そして、草薙一族は田舎いなかの大家族並みに結びつきが強い。普通なら遠い親しん戚せきで終わるはずのさくらとも、昔から仲がよかった。

「さくらちゃんかァ……。せっかくこっちに来たんだから、もっと遊びに来ればいいのに。香月のおじさん、何で半年はうちに来ちゃダメとか言ったんだろうね？」

「それくらい決めておかないと、上京三日目にはうちの居い候そうろうになっている子だからねえ」

　不思議そうな静花に、玄げん米まい茶ちやをすすりながら祖父が言う。

　そうかもしれない。はとこの性格を護堂は思い出した。

　がんばり屋ではあるが要領は悪く、引っ込み思案でさみしがり。困ったことがあると、親しい人間によく泣きつく。護堂や静花もよく面倒を見たものだ。おたがいの年齢を考えれば、面倒を見る側が明らかに逆だったが。

　ここでチャイムが鳴り、静花が「はあい」と腰を上げた。玄関を見にいったのだ。

「さくらちゃんひさしぶりィ！　入って入って。元気なさそうだけど、どうかしたの？」

「う、うん。あのね静花ちゃん、実は相談に乗ってもらいたいことがあって……」

　玄関から聞こえてくる声に、護堂は最年長者の顔をちらりと見た。

「春頃にふたりで話したじゃないか。半年が過ぎて九月になったら、さくらちゃんはこの家にすぐやってくるだろうって。予想通りだねえ」

　全てを見はるかす賢けん者じやのように、しみじみつぶやくじいちゃんだった。

「あのね。ゴドーくんに是ぜ非ひ、頼みたいことがあるのっ」

　草薙家の居間に入るなり、香月さくらは言った。



　テーブルにはサンマの塩焼きとスダチ、大根おろし、ゴーヤと大根とトマトのサラダ、なめこの味噌汁などが並んでいたが、昨日今日のつきあいではないので誰も気にしない。

　今年で一九歳。都内の名門女子大に通う一年生。

　だが、可愛かわいらしい童顔のせいで、中学生にまちがわれても不思議ではなかった。

「あたしじゃダメなの、さくらちゃん？」

「う、うん。なんとなく、こういうお願いは男の人の方がいいのかなって……」

　静花の問いに、さくらは心細そうに答えた。

　こういうときのはとこは、おびえた子犬めいた表情になる。

「俺で大丈夫なことなら、いくらでも話は聞くけど……じいちゃんでなくていいのか？」

　護堂は冷静に言った。

　どんな頼みか知らないが、力仕事以外で祖父より役に立てる自信はない。

　草薙一朗は博はく識しきで人づきあいの名人。よく相談事を持ちかけられる。『先生』だの『伯お父じ貴き』だのと呼ばれることさえあるのだ。

　そんな祖父は、やさしげにさくらへ微笑ほほえみかけた。

「さくらちゃんとしては、どちらにお願いしたいのかな？」

「えっと……手伝ってもらえるのなら、どちらでも本当にありがたいなって思うんだけど、どちらかと言えば、やっぱりその……」

　上うわ目め遣づかいで護堂を見つめるさくらは、お世せ辞じ抜きで可愛いかった。

　これを天然でなく計算でこなせるようになれば、彼女は魔性の女になれるだろう。

「なんだ。じゃあ決まりじゃない。お兄ちゃんはさくらちゃんの話を聞いてあげて。後かたづけはあたしがやっておくから」

　すかさず静花が言った。姉あね御ご肌はだの妹は、昔からさくらに甘いのだ。

　護堂の周囲にいる女性陣に手厳しい静花だが、万ま里り谷や祐ゆ理りには割と穏おだやかに接している。おそらく、あのお嬢さまの危なっかしさに保護欲を刺激されているのだろう。

「なら、護堂の部屋で話をしたらいい。あとでお茶を持っていくよ」

　さらに、抜け抜けと祖父が言う。

　あ、逃げたな。向こうの意図に護堂は気づいた。

　よく頼りにされる祖父だが、下町人情話のようにお節せつ介かいは焼かない。

　飄ひよう々ひようかつ恬てん淡たんと、人と向き合う性分なのだ。ちなみに独身時代の草薙一朗はモテまくるくせに、プライベートな領域には滅多に女性を入り込ませなかったという。

　男友達は呼びもしないのに、祖父の部屋に入りびたっていたらしいのに。

　エリカやリリアナの好き勝手な出入りを許している孫まごとは、役者がちがいすぎる。

　まあいいか。護堂は肩をすくめた。

　はとこが困っているのなら、手助けするのはやぶさかではない。祖父よりも若い自分が腰を上げるのも順番的には正しいだろう。

「わかった。俺なんかにたいしたことができるとは思わないけど、力を貸すよ」

　そう言った途端、頼りないはとこは目を輝かせた。

「ゴドーくんの部屋に入るのひさしぶり～。あんまり変わってないね」

「前に来たの、たしか半年前だろ？　模様替えもしてないんだから当たり前だよ」

　六畳じよう間まの自室で、さくらと向かい合う。

　護堂の部屋は、物がすくない。本棚とタンス、勉強机代わりの折りたたみ式テーブル、あとは小さなテレビとＤＶＤプレーヤーがある程度だ。

　あまり物を溜ため込まない性格なのと、その必要がないためだった。

　暇ひまな時間は釣りやアウトドア、スポーツに費ついやす。不定期にバイトすることもある。ゲームはしない。たまに将しよう棋ぎや囲い碁ごにつきあう程度。ＤＶＤやＣＤはレンタルで十分。

　本はまあまあ読む方だが、あまり買い込まない。

　もともと古書店を営いとなんでいた草薙家には、売り物だった書籍が大量に残っている。蔵書から読みたい本を適当に抜き出せば、それで事足りた。

「じゃあさくらさん、相談って何？」

「あ、あのね……それ、そろそろやめてもいいかなって思うのっ」

「それって？」

「だ、だから、あたしのことを『さくらさん』って呼ぶの。この際だから『さくら』とか呼び捨てでいいよ？　何なら、あだなとかでも」

　昔は『お姉ちゃん』と呼んでいたはずだが、何かの折に呼び方を変えたのだ。

　きっかけを思い出せない護堂は、軽い調子で言った。

「このままでいいよ、めんどくさい。……相談って、まさか今のじゃないよな？」

「ち、ちがうよおっ。これはちょっと気になっただけ！」

　顔を真っ赤にして、さくらが言い返す。だが、そこからつづかない。あの、その……とモゴモゴつぶやきながら、本題に入ろうとしない。話し下べ手たなのだ。

　仕方ない。世間話でリラックスしてもらおう。護堂は話題を変えた。

「こっちでの暮らしはどう？　もう慣れた？」

「……あんまり。人の多いところはどうも苦手で……」

　しょぼんとした声でさくらは言う。

　香月家のホームは宮みや城ぎである。東とう京きようへの進学を希望した娘に、さくらの父はひとつのルールを課した。東京の親戚に頼ることを半年間禁じると。

　草薙家に居候することも考えていた彼女は、愕がく然ぜんとしたようだ。

「そりゃね、せっかくひとり暮らしをするんだから、しばらく誰の力も借りないで、きちんと生活してみろっていうお父さんの言いつけはわかるけど……。こんな大きな街にひとりきりで、本当に心細かったんだから……」

「あー……まあ、これからはさびしくなったら、うちに来るといいよ」

　さくらと父の約束にひそむウソを知っていたので、護堂は気まずかった。

　春先に香月のおじさんと電話で話したときのことだ。

『要するに、玉たまの輿こし狙ねらいなんだ』

　予想外の単語に、護堂は『はい？』と訊きき返した。

『だから玉の輿。若い娘が都会で初めてのひとり暮らし……手っ取り早く心の隙すき間まを埋めるには、男がいちばんだろ？　うちのさくらは顔も性格も悪くないが、奥手すぎるからな。そろそろ男に

免めん疫えきをつけて、玉の輿に乗る準備をして欲しいのさ』

『普通、父親は娘に恋人ができるのを嫌がるものでは？』

『まあな。だが、これも父の愛ってヤツよ。さくらは護堂んところの母ちゃんとはちがう。自力でがっつり稼かせぐのは無理だ。だが、女の子には亭てい主しゆの稼ぎを当てにする奥の手がある。俺はあいつに幸せになってもらいてえんだよ！』

『ええと、幸せってお金だけで決まるものでもないような……』

『なに、世の中には金で買える幸せの方が多いもんさ』

　こんなことを言うおじさんだが、職業はおかたい警察官。

　東北有数の柔道家でもあり、指導者として青少年層の育成でも活躍している。

　上うわ辺べからは想像もつかないアウトローばかり。本家の跡あと取とりが言うのも何だが、これは草薙の血を引く者に顕けん著ちよな特とく徴ちようである。

『変な男にだまされたりしたら、どうするんですか？』

『そのときは俺たちの力でなかったことにすればいい……。おまえんところの母ちゃんやじいちゃん、その他の親類一同も力を貸してくれるだろうしな……』

　念のため確認したら、ククク と悪役のようにほくそ笑まれた。

　ないしょでフォローするのはやめておいた。隠し事が苦手なさくらは、まちがいなくボロを出す。ペナルティとして仕送りを止められたりするかもしれない。リスクが高すぎた。

「友達はできた？　もしかして、もう誰かとつきあってたりとか？」

　一応訊いてみる。さくらはたちまち顔を真っ赤にした。

「つ、つきあう⁉　いないよ、そんな人！　友達ならできたけど……あ、もちろん女の子だからね、ゴドーくんっ。誤解しないでね！」

「わかってるって。でも、ちゃんと友達作れたんだな。安心したよ」

　つい歳とし下したの子を誉ほめるように言ってしまった。

　するとさくらは「えへへ」とうれしそうに笑う。年齢不相応の幼さだ。

「それでね、新しいお友達にいろいろ教わったりして、あたしもすこし物知りになったんだ」

「へえ。どんなことに詳しくなったんだ？」

　歳上のはとこが喜んでいる。その表情はひどく愛らしい。

　微笑ほほえましく思った護堂だが、返ってきた答えに絶句してしまった。

「ええとね、それが実は相談したいことに関係するんだけど……。ゴドーくん、あたしが魔法を使えるようになったって言ったら、信じる？」

　しまった。護堂は後こう悔かいした。

　心に孤こ独どくを抱えた人間は、宗しゆう教きようやオカルトにはまりやすいという。そこに思い至らなかったとは失態もいいところだ。やはり放置するのはまずかったか……。

「バカなことを言うな、さくらさん。落ち着いて現実を見つめよう」

　とりあえず、真しん摯しな口調で訴うつたえた。

「人間にはできることと、できないことがある。魔法なんてものは、まちがいなくできないことのひとつだ。空から火のかたまりを落としたり、瀕ひん死しの重傷から半日で復活したり、でっかい怪かい獣じゆうを呼び出したりとか、人間には絶対できないことなんだよ！」

　心の棚たなに忌いまわしい記憶の数々を放り込みながら、言い切る。

　うん、まちがった発言はしていない。しかし、さくらは子供のように口をとがらせた。

「そんなことないもん。あたし、ちゃんと魔法を使えるようになったんだもん！」

「いや、そう言われてなあ……。実際にこの目で見ないと信じられないよ」

「もうっ。ゴドーくんの頭でっかちっ。いいよ、今は道具がなくて無理だから、明日あたしの部屋に来て。魔法を使うところ、見せてあげるから！」

　護堂はぎょっとした。まさか、本当に使えるのか？

　魔術とも神々とも関係ないはずの草薙一族が、ついにオカルトにまで目覚めてしまったのだろうか？　自分のことは完かん璧ぺきに棚上げして、護堂は不安を押し殺した。

2

　翌日の放課後、護堂は西にし日につ暮ぽ里りに向かった。

　地下鉄の駅から一〇分ほど歩いたところに、はとこの住むアパートはあるという。昨夜書いてもらった地図と住所を頼りに探し当てた。

　三階建て、オートロック付きの小こ綺ぎ麗れいなアパート。おそらく築一〇年以内。

　ここで携帯に着信があった。リリアナからの電話だった。

「はい、もしもし？」

『突然申し訳ありません。いつのまにか学校から帰られたようなので、すこし心配になったのです。あなたの声を聞きたかったとか、帰る前にお顔を見たかったとか、そのように不ふ埒らちな下心があったわけではありませんので誤解なきようっ』

　なぜか照れたような声で、リリアナは言った。

　彼女のことだから、護堂の警護でもするつもりだったのかもしれない。

「何も言わずに帰っちゃって悪い。今日は知り合いと逢あう約束があるんだ」

『知り合い……まさか女性ですか？』

「まあ、そうだけど。べつに変な用事じゃないから誤解するなよ」

　ミラノから来た銀髪の騎士は、草薙護堂が稀き代たいの女たらしだと思い込んでいる。

　はたして彼女は、謹きん厳げんそのものの声でこう答えた。

『あなたがそうおっしゃるのなら、きっと変な用事ではないのでしょう。ですが、お気をつけください。女遊びをするときはなるべく後あと腐くされのないよう、細さい心しんの注意を払って――』

「だから、そういうんじゃないってッ。もう切るからな！」

　電話を終えて、護堂はアパートに入っていった。

「――あ、いらっしゃ～い。すぐお茶とお菓子を用意するからねッ」

「いいって、そんなの。たいした客でもないんだし」

　角部屋の二〇一号室。そこがさくらの部屋だった。

　１Ｋの室内は掃除も行き届いているようで、きれいに片づいていた。

「でね、ゴドーくんっ。昨日のつづきなんだけど！」

　珍しく興奮気味にさくらが言った。

　部屋のまんなかに置かれた丸テーブルには、あやしげなグッズ類が載のっている。

　分厚い、革の装そう丁ていの洋書。長さ三〇センチほどの杖つ

え。通販で買えそうな水すい晶しよう球きゆう。タロットカード等……。どれも安っぽく、パチものくさい。

　しかし護堂の——カンピオーネの第六感は、これらから微び量りようの呪じゆ力りよくを感じ取った。

　格はえらく低そうだが、一応は本物のようだ。

「これから魔法を使ってみせるから、見ててね。えっと……」

　さくらが洋書をめくりだした。文章はアルファベットで綴つづられていたが、英語ではない。イタリア語をはじめとするラテン語系の言語でもないようだ。

「それって何語で書かれてるんだ？」

「よくわかんないんだけど、たしか中世くらいの高地ドイツ語……だったかな」

「さくらさん、そんなの読めるんだ⁉」

　護堂は驚いた。はとこにそんな語学の素そ養ようがあったとは。

「ううん、読めないよ。でも、大体の文はお友達に訳やくしてもらったから……」

「その友達って、同じ大学なのか？」

「うん。あたしとクラスがいっしょで、最初の授業のとき席が隣だったの」

　さくらが通うのは名門・秋あきノの水みず女子大の人文学部。

　そんなお嬢さま学校にエリカやリリアナの同類——魔術師がまぎれ込んでいるのか。それとも、全国に数十人いるという媛ひめ巫み女このひとりとか？

「あった。じゃ、やるから見ててね！」

　目当てのページを見つけたあと、さくらはマッチ棒をテーブルの上に置いた。

　そして、開いたままの洋書を眺ながめながら呪じゆ文もんを——

「魔法の神様、どうかあたしの魔法を成功させてください。よろしくお願いします♪」

　唱となえず、こんなことを言った。パンパンと柏かしわ手でまで打つ。

「ち、ちょっと待った！　さくらさん、何だよそれ！」

「何って魔法だよ。ええとね、本当に大切なのは呪文とかじゃなくて、そこに込めた魂たましいとか、それがどういう魔法なのかをきちんと理解しているか、なんだって」

　だから形式なんて気にしなくていいの。えへん。

　自慢そうなさくらを見ながら、護堂は思い出した。そういえば、エリカたちも魔術使用時の呪文（彼女たちは口こう訣けつとか言こと霊だまと呼ぶ）はかなり適当だ。

　とはいえ、こんなので本当に効くのか？　不安に思ったときだった。

　ぺきん。乾いた音を立てて、さっきのマッチ棒が折れた。

「ほら！　見た、ゴドーくんっ。魔法が成功したよ、すごいでしょうっ!?」

「……もしかして、手を使わないでマッチ棒を折る魔法？」

「マッチだけじゃないよっ。爪つま楊よう枝じとか、竹ひごとかにも使えるんだから！」

　さくらがあまりに得意そうだったので、護堂はコメントを差し控えた。スプーン曲げの超能力と今の魔術、どちらが実用的だろう？

　だがとにかく、さくらは魔術らしき隠し芸を披ひ露ろうしてみせた。

　お茶を淹いれるねと彼女がキッチンへ向かった隙すきに、護堂は例の洋書を手に取った。物は試ためし、マッチ棒の残りに『折れろ』と念じてみる。

　しかし、何も起こらない。失敗したかなと首をかしげた直後。

　べきべきっ。大きな音がした。窓の外で街路樹が倒れ込んでいく。さくらのアパートは通りに面しているのだが、道端に植えられた樹が一本、根本から折れたのだ。

　護堂はキッチンのさくらに視線を転じた。平和そうにお茶の準備をしている。

　気づいていない。すばやく魔ま導どう書しよをテーブルに戻す。

「それでね、ゴドーくん。魔法のことを信じてもらえたところで、改めて相談なんだけど」

　ふたつ湯ゆ呑のみを載せたおぼんと共に、さくらが戻ってきた。

「そういえば、そんな話だったっけ」

　緑茶の湯呑みを受け取りながら、護堂は自じ己こ嫌けん悪おに陥おちいった。

　マッチを折るつもりで自然破壊をしてしまうとは……。己おのれの呪力の強さと魔道のセンスのなさが呪のろわしい。魔術の類たぐいは覚えない方がいいなと、改めて痛感した。

「あたしも最近知ったんだけど……東京には恐怖の大魔王がいるらしいの！」

「……大魔王？」

　何だろう、その聞き覚えがあるフレーズは。

　不安を押し殺しながら、緑茶をすする。落ち着け。カンピオーネのことなど、はとこが知るはずはない。ましてや草薙護堂がその当人などと知るはずは——。

「ほら、春くらいから首都高の道路が落っこちちゃったり、東京タワーが火事になったりしたでしょう？　そういう怖い事件は全部、その大魔王の仕し業わざなんだって！」

　何だろう、その聞き覚えがある事件の数々は。

　落ち着け。今の俺に必要なのは平常心。何なに物ものにも揺るがない氷の心だ。

「ゴドーくん、あたしといっしょに大魔王さんを探して！　これ以上ひどいことはしないでくださいってお願いするのっ。手伝ってもらえる……？」

　クールに振る舞おうとしていた護堂だが、失敗に終わった。

　緑茶を半分ほど飲み干したところで、むせてしまった。恐怖の大魔王を探す？　世界に七人しかいない魔王本人が？　悪い冗談もいいところだ。

　その後、地下鉄で表おもて参さん道どうへ。時刻は午後六時。

　初秋の太陽が、青あお山やま通りの洒落しやれた街並をオレンジ色に染めている。

「それで、さくらさんはどうしてその……恐怖の大魔王なんかに会いたいんだ？」

　隣を歩くはとこに、護堂は訊たずねた。

　彼女とその友人がよく利用する『魔法のお店』が表参道にあるらしい。そこの店主が事情通だから、話を聞きに行こうと提案されたのだ。

「えっとね、その大魔王の人って、ものすご～くＨで女の子が好きらしいの」

「そんなことはない！　変なうわさを鵜う呑のみにするな！」

　思わず怒ど鳴なってしまった。さくらが「ひゃあっ」と驚き、おびえた表情になる。

「ど、どうしたのゴドーくん？　怖い声出したりしてっ？」

「わ、悪い。ちょっと自分のことを言われたような気がして、文句を言いたくなったんだ」

「ふふふっ。真ま面じ目めなゴドーくんが、そんなＨになるわけないよ。わかってるよ～」

　苦しい言い訳にも、さくらはおっとりと笑ってくれた。親しくなった人間については全面的に信頼し、疑うことを知らないのだ。

「そ、そうだよな。変なこと言ってゴメン」

　純真なはとこをあざむく行為に、良心の呵か責しやくを感じる護堂だった。

「でね、あたしの新しいお友達なんだけど、昔は天てん皇のう陛へい下かにもお仕つかえした、古～い魔法使いのお家柄なんだって」

　最近、似たような一族の話を聞いたような……。

　すこし前に知り合った清せい秋しゆう院いん恵え那なのプロフィールを、護堂は思い出した。

「同じようなお役目のおうちが他にもあるらしいの。そしたら最近、そのうちの女の子が大魔王の人に見み初そめられて、愛人さんにさせられたんだって！　しかも無理矢理！」

「いいかげんなこと言うな！　向こうから勝手にやってきたんだ！」

　また怒鳴ってしまった。

『ふえェェ……』と泣きだしそうなさくらに、護堂はあやまった。

「たびたびゴメン。なんとなく大声を出したい気分になったんだ。気にしないでくれ」

「う、うん。それで、あたしのお友達が心配してるの。自分も力ずくで愛人にさせられるんじゃないかって。——だから、これ以上ひどいことをしないでってお願いしに行きたいの。一生懸けん命めいお願いすれば、きっとわかってくれるよねっ⁉」

　護堂は知り合いの顔を思い浮かべた。

　デヤンスタール・ヴォバンは一いつ顧こだにせず無視しそうだ。

　サルバトーレ・ドニのアホは、何でそんなお願いをされるのか理解できなさそうだ。

　しかし、草薙護堂は良識ある男だと自じ負ふしている。さくらの目的はすでに達成されたと言ってもいい。だから、早く家に帰って欲しいのだが……。

　そんな願いなど知らぬはとこは、細い路地に入っていった。

「ほら、ここだよ。——ごめんくださ～い」

　小さな一軒家を改装したらしい店。そのドアを開け、さくらは挨あい拶さつした。

　手作り感あふれる店構え。輸入雑貨の店という感じだ。ドアにかけられたプレートには『胡こ月げつ堂どう』と小さく記しるされていた。

　さくらのあとにつづいて、護堂も店に入る。店内は雑然としていた。

　中国・東南アジア・インド・モンゴル・チベット・ポリネシアなどを巡めぐって仕入れたような品々が並んでいる。小物、陶器、衣服、家具、貴金属類、織物、民芸品などなど……。

　それらの一部は、微弱ながら呪力を秘めていた。

　値札を見たら、意外と安い。百円台から千円台、高くても二、三万前後。それ以上の高額商品はショーケースやレジの内側に置いているようだ。

　護堂は店主らしき女性に注目した。結構若い。なぜか和服姿で、メガネをかけている。

「あらお客さん、いらっしゃいー。今日は何をお探しで～？」

　常連客に対する口ぶりで、女店主はさくらに話しかけた。

「あ、今日はお買い物じゃなくて、ちょっとお訊きしたいことがあって来たんです」

「そうなんですか、残念ですねー。ま、でも、最近よくご利用いただいてますし、世間話程度の内容ならゼロ円のスマイルといっしょにサービスしますよー」

　やはり、この女性が事情通だという店主のようだ。

　エリカやリリアナ、祐理や恵那のような媛巫女たち。彼女たちはその分野の最先端を行く者特有の、エリートめいた空気をまとっている。

　だが、この雑貨屋の主人にそれはない。

　代わりに雑草の大らかさ、エリートでないがゆえの親しみやすさを感じる。

「き、今日お訊きしたいのは、この東京にいるっていう大魔王さんについてなんですがっ」

「大魔王、はて？　……ああ、カンピオーネのことですか～」

「かんぴ何ですか!?」

「カンピオーネ。イタリア語ですよー。英語で言えばチャンピオン。この人たちの存在を初めて論文にまとめた魔術師がイタリア人で、以来なんとなくそう呼ぶようになったんです～」

　そうだったのか。護堂はひそかにうなずいた。

「ま、この程度なら顧客サービスにしてあげましょうかね～。あの人たちは世界に七人しかおりません。まずアメリカにいるジョン・プルートー・スミスさんです。この方は悪の秘密結社と戦う仮面のヒーローなんですよー。変身までしちゃいます」

「か、仮面!?　変身!?」

「お隣の中ちゆう国ごくには武ぶ林りんと魔教の頂点に立つ羅ら濠ごう教きよう主しゆ。アラブだかエジプトのどこかには洞どう窟くつの女王、永遠の美少女アイーシャ夫人。東とう欧おうには嵐を呼ぶ男ヴォバン侯こう爵しやく。イギリスには電でん光こう石せつ火かの貴公子、黒王子ブラックプリンスアレクさん。そしてイタリアにはこの世に斬きれないものはないサルバトーレ卿きようがいて、カンピオーネとして君くん臨りんしているんですよー」

　これで六人。まずい。この流れだと七人目についての話になる。

　護堂の心配など知らない女店主は、さらにつづけた。

「で、我が日本に最後のひとりがいるわけです。……最近まで謎なぞに包まれていたんですが、ようやくいろいろ情報が出てきました～」

「た、たしかすっごくＨな人なんですよねっ!?」

「らしいですねー。黒髪や茶髪の日本人だけでなく、金髪や銀髪の美少女まで手込めにしてるそうですから～。相当な色好みですよー」

「外国の女の子までっ!?」

「しかも、意外に若いらしいんです。もしかしたら二〇歳未満ってうわさも～」

「じゃあ未成年なんですかあっ。ううっ、そんなひどい人がいたなんて！」

　女性ふたりが盛り上がっている。くそ、好き放題言いやがって。

　眉まゆをひそめながら、護堂は成り行きを見守った。この女店主がもし、草薙護堂の名前を知っていたら……。

「そ、そのＨな魔王さんのお名前とか教えていただけませんか。あたし、その人に会ってお願いしなきゃいけないことがあるんですっ」

「名前ですか……。最近は個人情報の保護とか、結構やかましいんですよねー」

　げ。女店主の回答に護堂は焦あせった。

　まるで、知っているけど迂う闊かつに話せないという口ぶりではないか！

「これね、業界でもほとんど知られてないんですよー。とある組織が情報統制を敷いてましてねー。でも、わたしくらいになると例外になりまして……」

「ご存じでしたら、ぜひ教えてくださいっ。お願いしますっ」

　勿もつ体たいぶる女店主に、さくらが頭を下げている。

まずい。向こうはまんざらでもない顔だ。どうにかして口止めしないと！

護堂はあるアイデアを思いついた。学校から直接さくらの部屋に向かったので制服は着たまま、通学用のカバンも持ったままだ。

カバンのなかには、都合よくアレも入っている……！

学生証を取り出すと、さくらの背後に回った。女店主にだけ見えるように『草薙護堂』の名前と顔写真を高々と掲かかげる。

女店主はたちまち愕がく然ぜんとした。まるでヒグマに出会ったときの顔だ。

護堂は唇くちびるに人差し指を当て、『ご内密にお願いします』と念を送る。すると向こうは、コクコク勢いよくうなずいた。

「あ、あのー……どうかなさったんですか？」

「いえ何でもないですーところですいません東京のカンピオーネさんのお名前なんですがーごめんなさい実は知らないんですー本当にごめんなさいもう訊かないでくださいー」

心配そうなさくらに、早口で訴える女店主。

脅きよう迫はくしたつもりはなかったのだが……。申し訳なく思う護堂だった。

「えーっ。ついさっき知ってるって言ったじゃないですかあっ」

この豹ひよう変へんに納得いかないのか、さくらがしつこく食い下がる。

新たな客が入ってきたのは、このときだった。

護堂は驚いた。知っている顔だ。くたびれた背広を着た、二〇代後半の青年である。

彼の名は甘あま粕かす冬とう馬ま。正せい史し編へん纂さん委員会の謎めいたエージェント。

「おや、お取り込み中ですか。……おやおや、これはこれは」

　店主に声をかけながら、甘粕はこちらを見て微笑した。だが、話しかけてはこない。状況がわかるまで不用意な発言はしないつもりなのだろう。

「あー甘粕さん、ちょうどよかった～」

　ホッとした顔で女店主が言った。

「お客さん、例の件についてはこの人に訊くといいですよー。この甘粕さんはそういうことの専門家なんです。私なんかより、よっぽど詳しいんですからー！」

「え、本当ですかっ？　すごーい」

「そういうことって、どういうことなんでしょうねェ……？」

　いきなり無茶振りする女店主、あっさり乗せられるさくら、話についていけないだろうに落ち着き払っている甘粕。そして護堂はため息をついた。

3

「するとお嬢さんは、大魔王カンピオーネと話をしたい……そう考えているのですね？」

　近くの喫茶店に場所を移した護ご堂どう、さくら、甘あま粕かす。

　窓まど際ぎわのテーブルに陣じん取どり、さくらがかいつまんで事情を語る。

　甘粕の生あたたかな目つきは『草くさ薙なぎさんも大変ですなァ』と無言で語っていた。さくらは護堂のことを「付き添いの、親しん戚せきの男の子」と紹介したのだ。

「はいっ。あたしのお友達がその人に無理矢理ひどいことをさせられるんじゃないかって心配なんですっ。彼女も最近、すごく不安がってますし……」

「お嬢さんの学校、秋あきノの水みずでしたっけ？　話の出所は連れん城じようのお嬢さまですか……」

　さくらの自己紹介と今の話だけで、甘粕は情報漏ろう洩えい者しやの見当をつけたようだ。

　大当たりだったのだろう。さくらが目を丸くしている。

　それにしても、一般人にカンピオーネの名前が知られるとは……。正史編纂委員会の情報統制とやらも、意外とザルではないのか。

　少量の非難を込めてエージェントを見つめたら、にんまり微笑ほほえみ返された。

「ま、お嬢さん方のご心配もわかります。あの大魔王殿は稀き代たいの女たらしで遊び人、はっきり言って女の敵もいいところですからネ！」

　そのままニコニコと甘粕は言い切る。どう見ても遊ぶ気まんまんだ！

「いや、そういう評判を流すのはどうでしょう。その人もきっと、あることないこと好き勝手にうわさされて困っているはずです」

　自みずからを弁護すべく、護堂は訴うつたえた。すると甘粕は人の悪い顔で、

「おや、まるであの御お方かたをご存じのようにおっしゃいますな」

「あ、会ったことはありませんが、なんとなくそう思ったんです！　俺にはわかりますっ。その人は多分、平和に暮らしたいだけなんだ。なのに非常識な女好きみたいに言われて迷惑しているにちがいないんだッ。こんなうわさ話はやめるべきです！」

「どうしたの、ゴドーくん。さっきから様子が変だよ……？」

　ここぞとばかりに言い立てると、さくらが心配そうに見つめてきた。

　だが、敢あえて無視して護堂は言った。

「さくらさんもこんなことはもうやめよう。さくらさんが伝えたいことは、この甘粕さんがきっとその人に伝えてくれるはずだから、わざわざ探偵の真ま似ね事ごとをしなくても――」

「私があの方に伝言ですか？　畏おそれ多いですねェ」

　畏れ多いが聞いて呆あきれる、のんきな口ぶりだった。

「そこを何とか。甘粕さんだけが頼りなんですから」

「天下の大魔王さまに諫かん言げんする勇気なんて、私にはとてもありませんよ。それに、いろいろと仕事も抱え込んでいますし……」

「ちょっと会って話するだけでいいんです。それで向こうもわかってくれますよ」

「無理じゃないですかね。向こうは何せ、どこぞの大企業の創立者と張り合えるくらいの艶えん福ぷく家かです。聞き入れちゃくれませんって」

「そんなのは信しん憑ぴよう性せいのないうわさ話ですっ。気にする必要はありません！」

「ははは。その人にまつわるうわさや評判が、本人も気づいてない真実を言い当てていることって多いじゃないですか」

　のれんに腕押しという感じで、懇こん願がんは受け流される。

　くそ。この人がまさか、こんなふざけた性格だったとは。舌打ちしながら、護堂がさらに引き下がろうと決意したとき。

「ところで、あちらの方はお知り合いですか？　チラチラこっちを見ていますよ」

　不意に甘粕が言って、店内の隅すみへ視線を投げかけた。

　さくらといっしょにそちらを見て、護堂は驚いた。向こうには、きれいな銀髪をポニーテールにまとめた白人少女が腰かけていた。

　わざとらしいサングラスとマスクは、変装のつもりかもしれない。

「……何やってんだよ、リリアナ」

　歩み寄って声をかけると、銀髪の女騎士はびくりと肩を震ふるわせた。

「ひ、人ちがいでしょう。わたしはあなたのことなど何も存じません」

　顔を背そむけようとする。護堂はつっこむのをやめて、無言でマスクを引っぺがした。

「……言い訳があるなら、一応聞こうか」

「言い訳などとは心外なっ。わ、わたしはそう、お独ひとりで行動するあなたが危険なことに巻き込まれてはいけないと思って、護衛するために来たのです。……決して、あなたがわたしたちに隠れて逢あおうとする女の顔を見てやろうとか、そういう浅ましい心こころ根ねがあったわけではありませんッ。誤解なさらないでください！」

　ゴニョゴニョ言いながら、リリアナはサングラスを取った。

　あからさまにうろたえている。まあいいか。護堂は頭をかいた。これも、この娘なりに考えての行動なのだろう。

「わかったよ。とにかくさ、俺たちの席に来なよ」

　四人がけの席なので、リリアナがすわるスペースは余っている。気づいた以上、彼女をひとりだけ除のけ者にするつもりはない。

「よろしいのですか？」

「当たり前だろう。まあ、リリアナの方がイヤじゃなかったら、だけど」

「も、もちろん、わたしに異論はありませんっ」

　犬だったら尻尾しっぽをぶんぶん振り回しそうな勢いで、リリアナは立ち上がった。表情こそ生き真ま面じ目めなままだったが、やけにうれしそうだ。

　だが、護堂たちの席にやってくるなり、リリアナはつぶやいた。

「それにしても、どうしてあなたが同席しているんだ、甘粕冬馬？」

「只ただの偶然ですよ、偶然」

　甘粕の返答に眉まゆをひそめながら、銀髪の騎士は腰を下ろす。

　先に事情を説明しておけばよかったかと、護堂は後悔した。あからさまに一般人のさくらがいれば、リリアナも迂う闊かつなことを言わないとは思うが……。

「こちらの外国の方とお知り合いなんですか？　あれ？　でもゴドーくんのお知り合いでもあるんだよね？」

「ええ。偶然にも私の知人と草薙さんはお知り合いだったようですね」

「そっかあ。偶然ってあるものなんですねー」

　甘粕の回答では、リリアナを見つけたときの発言とつじつまが合わない。

　しかし、さくらは矛む盾じゆんに気づくことなく、偶然の大安売りにうなずいている。まぶしいほどの純真さであった。

「それでこの人はゴドーくんとどういう関係なの？　も、もしかして彼女さんとかっ？」

「リリアナが彼女？　どうしてそうなるんだよ。只の友達だよ」

　さくらの問いかけに護堂は苦笑した。なあ、とリリアナにも言う。

　彼女はライバルのエリカとはちがう。変に話をこじらせたりはしないはずだ。

「そのとおりです。わたしはリリアナ・クラニチャール。草薙護堂と人生を共にする、いわば騎士のようなもの。言うなれば終しゆう生せいの伴はん侶りよだとお考えください」

　謹きん厳げんな口調でリリアナが自己紹介した。

……本人に悪気はないのだろうが、いろいろと誤解を生む表現だ。

ここは『こいつ日本語が下へ手たで、ときどき変なことを言うんだ。気にしないで』で押し切ろうか。発音がネイティブ同然だ等、ツッコミどころいっぱいの言い訳だが――

「わあ、そうなんですかあ。つまりゴドーくんの大親友ってことですよねえ」

しかし、おっとりとした笑顔で、さくらは言った。

「一生いっしょにいるくらいのお友達なら、そうですよねっ。ゴドーくんのこと、よろしくお願いしますね。……でも安心した、彼女さんじゃなくて。うんうん、ゴドーくんに恋人さんとかいるはずないもんね。そうだよねえ」

わずかな邪じや念ねんすらない、汚けがれなき笑顔。

はとこの度を超した純真さと信じやすさに、護堂は感謝した。何かとトラブルの種になることも多いが、この心こころ映ばえのよさはすばらしい美び徳とくだろう。

天使のごとき笑顔に気け圧おされたのか、珍しくリリアナが「はあ」と恐きよう縮しゆくした。

「……草薙護堂、この女性とあなたの関係は？　やはり愛人、それとも隠し妻……？」

「『やはり』のあとに入る単語がおかしい。そこに何で『友人』とか『親戚』って入らないんだよ？　さくらさんは俺のはとこで、姉さんみたいなものだよ」

こそっと訊たずねるリリアナに、護堂は苦い口調で答えた。

「やだ、ゴドーくん。昔、姉さんじゃないって言ってたじゃない？」

「え、どういうことだよ？」

不意にさくらが言ったので、首をかしげた。

「ほら、ゴドーくんが小学三年生のとき。急にあたしを『お姉ちゃん』って呼ぶのやめたでしょう？　どうしてって訊くと、大人になったら、あたしをお嫁さんにするから『お姉ちゃん』じゃダメだって。覚えてない？」

「……あー。そういえば、そんなこともあったような」

　若わか気げの至いたりに分類されるであろう、幼年時代の記憶。

　大昔、たしかにそんな会話を交わした気がする。以来、草薙護堂は香こう月づきさくらを『お姉ちゃん』と呼ばなくなったのだ。思い返せば『あの頃は若かったなァ』と感じ入るようなエピソードだ。いや、今も十分若いのだが。

「それでね、昨日も言ったけどっ。ゴドーくん、そろそろあたしのことを呼び捨てにする気はない？　あたしたち、そういうふうにしてもいい時期だと思うのっ」

「でも、そんなことする理由ないだろ。めんどくさいし、このままでいいって」

「もう。ゴドーくんったら、ずっとそんな調子なんだからあっ」

　ふと気づけば、甘粕とリリアナが感心したような目でこちらを眺めていた。

「なるほど。なかなか興味深いお話ですねェ」

「やはり栴せん檀だんは双ふた葉ばより芳かんばし……。そういうことだったか……」

　などと、ふたりそろってうなずいている。

　どういう意味だと訊ねようとしたら、甘粕の携帯が着メロを奏かなでた。

「上司からの連絡のようです。そろそろ仕事に戻らないといけませんな」

　携帯の画面を眺めながら、正せい史し編へん纂さん委員会のエージェントは言う。

「名なごり残惜おしいですが、私はこの辺で失礼しますよ。その前にいいですか、お嬢さん？」

　席を立ちながら、甘粕はさくらに呼びかけた。

「さっきのお話……恐怖の大魔王カンピオーネ殿に会わせてくれというお願いですが、残念ながらかなえることはできません。お許しください」

「で、でも、あたしどうしても——」

「今のあなたでは、魔法使いとしてのレベルが足りないのです。いいですか、古こ今こん東とう西ざいあらゆるＲＰＧにおいて、レベル１や２で大魔王と遭そう遇ぐうしたりはできません。どんなにすくなく見積もっても、やはり20か30程度にまで上げる必要があるでしょう」

　子供だましもいいところの、甘粕のダメ出し。

　しかし、さくらは『そうだったんだあ』という顔でコクコクうなずいた。

　この程度の詭き弁べんで十分と見切った側を誉ほめるべきか、こんな理屈にだまされてしまう側を危あやぶむべきか。ふたりを眺めながら護堂は不安になった。

　こういう話の流れになったら、次にさくらが言いそうなことは——。

「じ、じゃあ、どうすれば大魔王の人と会えるくらいの魔法使いになれるんでしょう⁉」

　やはりこれか。すでに予測済みだったのか、甘粕はにこりと微笑する。

　年長者の包ほう容よう力りよくに満ちあふれる笑顔。ただしパチものの。

　幸福の壺つぼを売りつける占い師、高額リトグラフの六〇回分割ローンをすばやく金利計算する販売員にも似た雰ふん囲い気きが、ぷんぷんと漂ただよう。

「ご安心ください。『偶然』の導みちびきによって、すばらしいコーチがすでに現れています。そこのリリアナさんは、私が知るなかでも特にすぐれた魔女。彼女の指導を受ければ、必ずや劇的なレベルアップが果たせるでしょう。ご健けん闘とうをお祈りします」

……丸投げだった。さっき甘粕がやられたのと同じ手だ。

事情が呑のみ込めず、「えっ、わたし？」と自分を指さすリリアナに、さくらは「うわー、すごい人なんだあ」と憧どう憬けいのまなざしを向ける。

その隙すきに甘粕は、自分の飲んだコーヒー代をテーブルに置く。

直後、背広姿のエージェントは喫茶店の出口前に立っていた。まるで瞬間移動だ。

謎なぞめいた動きを見せた彼は、会え釈しやくをして出ていく。

そして残された護堂とリリアナは、どうかあたしに魔法を教えてくださいと頼み込むさくらをふたりでなだめる羽は目めになったのである。

その夜の草薙家。自室にいる護堂の携帯電話が鳴り出した。

着信表示は見慣れない電話番号。だが、確信と共に通話ボタンを押す。

『や、昼間はどうも。あのあと、どうなりましたかね？』

やはり甘粕の声だった。護堂はうなずきながら答える。

「あの場は何とか収まりましたけど……」

護堂はとにかく落ち着けと、興奮するさくらをなだめつづけた。

この件は自分がどうにかするから、今日は家に帰れと言い聞かせて、一応の決着を見たのである。問題を棚たな上あげしただけとも言う。

『じゃあ一件落着じゃないですか。あの信じやすい娘さんをウソ八百で丸め込むくらい、かんたんでしょう？　あ、あの娘さんのお友達には、私の方で指導しておきました。彼女の口から草薙さんの名前が明かされる可能性はゼロです。ご安心ください』

「……指導？」

『ええ。蛇じやの道はなんとやら、穏おん便びんながらも効果的な手段を使わせてもらいました』

　ふくみのある口調だった。深く突っ込むべきかどうか。

　悩む護堂に、甘粕は軽い調子で言う。

『でも、いっそ名乗り出るのもいいんじゃないですかね？　うわさの大魔王ってのは俺のことだって潔いさぎよく。いろんな手間が省はぶけて、楽でいいですよ』

「そんな真ま似ねできますか！　大体、何であんなことを言われるのか訳わけがわかりません！　みんなで人のことを、ひどい女好きみたいに言いやがって……！」

　この愚ぐ痴ちに、甘粕は『うわはははっ』と失礼な笑い声をあげた。

『こりゃ失礼しました。ですがねェ、全すべて身から出たサビかと。ねえ草薙さん、さっきの喫茶店で、どうしてリリアナさんを私たちの席に呼んだんですか？　邪じや魔まになるのはわかってるんだから、追い払ってもいいじゃないですか』

「そういうわけにはいかないでしょう。俺たちだけ盛り上がって、あいつひとり除け者にするなんて……何というか、そういうのは気に入らないんですよ」

『じゃあ、ご親戚のお嬢さんのことは？　たしかに純真で愛らしい、保護欲を刺激される女性だとは思いますがね。――ぶっちゃけ、十数年の長きにわたって世話をするのはかなり面倒くさくなかったですか。私なら、適当な言い訳を作って見捨てているでしょうね』

「うーん、面倒くさいってのはたしかにそうですけど」

護堂は頭をかきながら言った。

結構ひどいことを甘粕は口にしたが、決してまちがってはいない。

「だからって見捨てるほどイヤな相手でもないですからね。俺はあの人が結構好きですし。切せつ羽ぱ詰つまって頼ってくるなら、できる限りのことはしてあげようって思いますし」

『そうやって甘やかしながら現在に至る、と。こうしてフラグは立っていくわけですな』

訳のわからないことを甘粕は言った。

『もし私どもの力がご入り用でしたら、ごーいつ報ぽうください。微力を尽くしましょう』

「そのときはさっきみたいにふざけないで、本当に力を貸してくれるんでしょうね？」

『…………当たり前じゃないですか。私を信じてくださいよ』

すこし間を空けてからの返答には、まったく信しん憑ぴよう性せいがなかった。

『ま、でも、この程度で気に病やむ必要はないですよ。ごまかしは利きく範囲ですし』

「ごまかし？」

『そうです。媛ひめ巫み女この方々には、人の記憶を改かい竄ざんできる能力者もいらっしゃいます。そこまでの威い力りよくはなくとも、催眠の呪術である程度は記憶をいじれますし。ほら、さっき言った蛇じやの道はなんとやら、です』

倫理的にはグレーゾーンに入るであろう、甘粕の発言だった。

無茶なことを言う人だ。護堂は呆あきれた。

呆れながらも、そういう手があったのかと感心した。考えてみれば、首都高をぶち割ったとかサン・ピエトロ大聖堂を粉ふん砕さいしたとかではないのだ。魔術でフォロー可能というのなら、頼りに

させてもらうのも選せん択たく肢しのひとつだろう。

――清せい濁だくあわせ呑のむ。

周囲にあやしい親戚知人が多いため、護堂が自然と身につけた気質である。

正義や正論では、時として解決できない問題もある。そういうときには、非常時にふさわしい行動で事に当たるべきなのだ――。

安心した護堂は、安らかな気持ちで甘粕との電話を終えた。

これが平和とも平凡とも程ほど遠とおい考え方だとは露つゆとも気づかぬまま、寝る準備をはじめる護堂であった。

第２話　謎の魔王カンピオーネを求めて・完結篇

1

　一〇月上旬の三連休、草くさ薙なぎ護ご堂どうは思いがけず日につ光こうにおもむいた。

　かの地での死闘を終えて帰京してから、もう一週間以上。若き魔王の身辺には、とある変化が生じていた。

　いつものように、朝早いうちに起床し、身だしなみを整える。

　窓から外を眺めれば、爽さわやかな秋晴れだった。

　今日もいい日になりそうだ。満足感を覚えながら、護堂は玄関で靴をはき——

「お兄ちゃん、今日も早いんだ。……やっぱり、あの人と待ち合わせ？」

　うしろから声をかけられた。

「今さらだけど、お兄ちゃんのマメさにはほんと、感心しちゃう。おじいちゃんの薫くん陶とうを受けて、順調に成長中ってことなんだね」

　かわいらしい声なのに、妙な凄すごみがある。

　振り向けば、妹の静しず花かが冷笑を浮かべながら立っていた。

「……前から何度も言ってるけど、おまえは勘かんちがいしている。変な邪じや推すいはするな」

「だったら、勘ちがいされないように行動してくれる？　大体さ、エリカさんが寝坊するからって毎朝迎えに行くなんて変ッ。絶対におかしい。しかも、最近では家の前で堂々と待ち合わせ——ううん、逢あい引びきまでしちゃって！」

　決めつけられて、護堂は閉へい口こうした。

　死んだおばあちゃんに申し訳ないと思わないのか云うんぬん。

　騒いでいる静花から逃げるため、そそくさと家を出る。……似たようなやりとりを、五月頃にもした気がする。しかし、その頃はまだ彼女と出会っていなかった。

「おはようございます、草薙護堂」

　凛りんとした、眠気など微み塵じんも漂ただよわせない声で挨あい拶さつされた。

　彼女——リリアナ・クラニチャールはいつもどおり銀の妖よう精せいにも似た可か憐れんさと、騎士の称しよう号ごうにふさわしい高こう潔けつさでまぶしいばかりだった。

　リリアナは護堂よりも早く起床し、自宅前で待たい機きしていたのだ。

「おはよう。あいかわらず早いな」

「当たり前です。第一の家か臣しんである者が、主あるじよりも遅くに目覚めるなどあってはならないこと。わたしをエリカといっしょにしないでください」

　挨拶を交わしてから、肩を並べて歩き出す。

　自じ堕だ落らくな旧友をこきおろすリリアナは、やや硬かための表情だった。

「そもそも、王であるあなたが毎日起こしに行くなど、本ほん末まつ転てん倒とうもいいところです。まったくエリカときたら、いつもいつも自分のペースで行動して……」

「まあ、そう言うなよ。俺が勝手にやってることだし」

　この銀髪の騎士は、子供の頃から『紅き悪魔デイアヴオロ・ロッソ』に振り回されてきたという。

　だいぶ鬱うつ憤ぷんも溜たまっているはずだ。やや剣けん呑のんな口調になるのも無理はないだろう。

「それにしてもあいつ、よく夜よ更ふかしをしているよな。いつも何やってんだ？」

「あれでエリカは、必要だと判断したことには極きわめて勤きん勉べんですから……」

　ため息交じりにリリアナが、意外な答えを口にする。

「武芸や魔術の研究はもちろんですが、人脈作りや地道な根回し、さまざまな案件の企画・立案・実施などに精を出しているのでしょう」

　なるほど。護堂はうなずいた。

　リリアナはエリカを敬遠しながらも、その才覚はきちんと認めているわけだ。

　ふたりのつきあいは長く深く、余人にはうかがい知れない多くの綾あやがあるのだろう。それが何だかんだで、彼女たちを息の合うコンビにしているのかもしれない。

「——あら。おはようございます、いつも早いわね」

　いきなり声をかけられた。

　早朝の根ね津づ三丁目商店街には、ほとんど人がいない。

　数少ない例外である護堂とリリアナに、もうひとり通りがかった例外の老婦人が話しかけてきた。和服を着ていて、見るからに上品そうだった。

「おはようございます」ときっちり頭を下げる護堂、およびリリアナ。

　礼儀正しい挨あい拶さつに、老婦人はやわらかく微笑んだ。

「最近は女の子もいっしょなのね。だんだんおじいさんに似てらっしゃったこと」

　……朝の挨拶ではなく、女連れであることを目撃して微笑したようだ。

　この老婦人、四年前に引っ越してきた華道の先生である。

　祖父と昔いろいろあったらしく、引っ越し直後に商店街で偶然出会ったふたりは「おや」「まあ」と嘆たん声せいをもらし、意味ありげに微笑み合い、なつかしそうに久きゆう闊かつを叙じよしたものだ。居合わせた護堂が孫まごと聞いて、老婦人は目を細めたりもした。

　爾じ来らい、道で護堂と出会うと、気品ある言葉遣づかいで何くれと話しかけてくれる。

　ちなみに彼女は、この年齢まで独身を貫つらぬいてきたらしい。

「ええと、こっちにいるのは友達の女の子で、最近迎えに来てくれるようになったんです」

「はい。わたしと彼は莫ばく逆ぎやくの間柄といいますか、終生運命を共にすると誓い合った関係といいますか、ともかくそういう常ならぬ情愛と、忠ちゆう誠せいの絆きずなで結ばれた関係なのです」

　護堂の紹介に、リリアナが合わせる。

　かなり大おお仰ぎような表現だが、仕方ない。何だかんだで類るい似じの約束をしたのは事実である。

　斉せい天てん大たい聖せいとの戦いを終えたあと。

　一方的に勝利宣言したリリアナは、護堂のうしろに影のごとく付き従うようになった。

　そして、他の少女たちに通告した。我こそが草薙護堂第一の騎士

であり、侍じ従じゅうの長たる者である。これより王の私事を取り仕切り、女にょ人にんの出入りを管理するのはリリアナ・クラニチャールの役目。しかと心得よ、と。

　これを聞いて、エリカと恵え那なは口をそろえて反発し、祐ゆ理りは憂ゆう鬱うつそうに瞳ひとみを曇くもらせた。

　しかし、護堂とリリアナが交わした約束を聞くや、少女たちは一斉にひかりを見た。一二歳の媛ひめ巫み女こ見習いは朗ほがらかに笑い、「私としては、異存はありません。よろしくお願いしますね、リリアナ姉さま」と、如じよオさいなくリリアナ支持を表明した。

　かくしてエリカは呆あきれ、恵那は口をとがらせた。祐理は憂うれいの影をいっそう濃くした。

　しかし、銀の騎士の言い分を全員が認めてしまったのである。尚なお、護堂の「この賭かけがどうしてリリアナの勝ちになるのか、全然わからない」という主張は一いつ蹴しゅうされた。

　そして時は流れ——。

　初めは侍従長（！）の急な出現に辟へき易えきしていた護堂も、数日で慣れた。

　これは二学期の当初と異ことなり、リリアナが勢い余って空から回まわりしなくなったことも影響したのだろう。細かいところまで気を遣つかい、しかも出しゃばりすぎない側近の存在を、草薙護堂はなし崩くずしで受うけ容いれつつあった。

　そんな時期の朝に、件くだんの老婦人と遭そう遇ぐうしたのである。

　リリアナの『運命を共にする』宣言にも、まあ斉天大聖との戦いで似たようなことを約束したしなァと護堂自身は諦てい念ねんに達していたのだが。

　しかし、普通の人が聞いたら奇妙に思うのではないか。

　ふと思い浮かんだ懸け念ねんに反して、老婦人は淡い微笑を浮かべてみせた。

「……まあ。うふふ、なつかしいわね。私も昔、一朗さんと同じような約束をしたことがあったわ。あれはもう何年前だったかしら」

　この老婦人と祖父の間で、本当に昔、何があったのだろう？

　疑問ではあったが、追及するのはやめておこう。ちょっと世間話をしてから老婦人と別れ、護堂の影を踏まぬようについてくるリリアナを従したがえ、また歩き出した。

　そこで携帯電話にメールの着信があった。

　歩きながら見る。幼なじみの徳とく永なが明あ日す香かからだった。

『なに朝っぱらから女連れなのよ！　朝からサカるな！』

　怒りの顔文字と共に、いわれのない悪態がつづられていた。

　明日香は、根津三丁目商店街にある寿す司し屋やの娘だ。店てん舗ぽ兼けん住居の窓から商店街を眺ながめて、護堂とリリアナを発見したにちがいない。

　あいつも静花といっしょで、理り不ふ尽じんに怒りっぽいよなあ……。

　長年の疑問に首をかしげながら、護堂は携帯をしまった。そのうちリリアナやエリカたちと引き合わせるのも悪くないだろう。誤解はそのときに解けばいいか。

「どうかなさいましたか、草薙護堂？」

「たいしたことじゃない。どうも俺の周りにはあれこれ勝手なことを言うヤツが多いけど、結局は自分がちがうってわかっていれば、何を言われても気にする必要はないよなって。……なんとなく、そう思ったんだ」

　己おのれの往ゆく道は己で決めればいい。

　その道の厳きびしさも愉たのしさも、自分と、そして付き従ってくれる仲間たちがわかっているのなら、傍はたからどう言われたっていいじゃないか。

　思いついたまま述じゆつ懐かいを口にしたら、リリアナは大きくうなずいた。

「それこそまさに、王の仰おおせ。頼もしい限りです、草薙護堂」

　阿あ諛ゆ追つい従しようなどではなく、心からの賛同を口にする忠実な騎士と共に、主である護堂はエリカ・ブランデッリのマンションへと向かった。

　というわけで、到着したエリカの部屋。

　高層マンション一〇階の一室で、女主人と専属メイドは暮らしている。

　しかし、いつものように敷居をまたいだ護堂とリリアナは、この部屋とは縁もゆかりもないはずの少女に出迎えられた。

「おはようございます、草薙さま。リリアナさまもおひさしぶりですね。よろしければ、おふたりともエスプレッソをいかがですか？」

　と、リビングのテーブルに陣取り、珈コー琲ヒーの芳ほう香こうただようカップを口に運んでいる。

　まちがいなくカレン・ヤンクロフスキ。

　リリアナのもとでメイドとして働く、魔術結社《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》の魔女見習いだった。

「ひさしぶり……といっても、今朝も家を出る前まではいっしょだっただろう？　カレン、いつのまにエリカの家なんかに上がり込んだんだ？」

「それはもう、リリアナさまが草薙さまと合流なさっている間に」

　銀髪の女主人に訊かれて、ローティーンのメイド少女はしれっと答えた。

　メイド服ではなく私服を着ている。プライベートということか。

「すこし前は草薙さまの過去を洗ってみてはどうかと進言したり、実際の調査に当たってみたりと、いろいろ忙しかったのですが……。リリアナさまも最近ずいぶんとしっかりなさってきたおかげで、今はぶっちゃけ暇ひまなのです」

　カレンはさらりと重要な告白をした。

　あれか。この間、賭けのきっかけになった情報か。護堂は思い出した。

　ちらっとリリアナを見たら、ちょっと顔を引きつらせていた。なるほど、彼女にしては妙なところに目をつけたと思ったものだが、カレンの入れ知恵だったのだ。

「今日はメイドの仕事もお休みをいただきましたので、たまにはお友達のアンナさんを訪ねてみようと思い立ったのです。……あ、草薙さまとリリアナさまの蜜みつ月げつぶりをどんな感じか見てやろうなんて、のぞき根性は一切ありません。あしからず」

　魂こん胆たんを白状された気もしたが、護堂は指摘しないことにした。

　もうひとりのメイドが奥からやってきたからだ。

「申し訳ございません。護堂さんたちがいらしたので、寝室のエリカさまをのぞいてみたのですが……。やはりまだ、ご就しゅう寝しん中ちゅうです」

　アリアンナ・ハヤマ・アリアルディ、通称アンナがすまなそうに言った。

「まあ、いつもどおりですね。ところで、カレンとは前から仲がよかったんですか？」

「はい。縁あって、おつきあいをさせていただいております。カレンちゃんってば私よりもだいぶ歳とし下したなのに、すごくしっかりしているんですよ」

　護堂の問いに、朗ほがらかな笑顔で答えてくれる。

　あいかわらずの晴せい朗ろうさと天てん真しん爛らん漫まんさ。これこそがアリアンナ嬢を特とく徴ちょうづける、最大の個性であ

ろう。煮込み料理や危険な運転技術の存在を敢あえて忘れるならば。

「じゃあ、俺が起こしに行ってきます。かまいませんか？」

「はい、もちろん。エリカさまのこと、よろしくお願いしますね」

　毎日の恒例行事とはいえ、やはり家か人じんの許しなく寝室に入るのはよくない。

　良識人の矜きよう恃じに従ってアンナに許しを請こい、了承を得た直後。

「いえ、草薙護堂。ここはわたしにおまかせを。あんな悪魔のような女とはいえ、女性の寝室に男性が足を踏み入れるものではありません。こういうときのために、わたしがおそばに控えていることをお忘れなきよう」

　リリアナから待ったをかけられて、護堂はハッとした。

　そうだ。ずっと状況に流されるまま毎朝ベッドまで行っていたが、やはり不適切な行動だったのだ。今の直ちよく言げんで改めて認識した。

「そうか……！　じゃあ、行ってきてくれるか、リリアナ⁉」

「もちろんです。我わが一いち命めいに代えても、必ずや勅ちよく命めいを果たしてみせましょう！」

　魔王退治を命じる王様と、小こ遣づかい程度の金銭とひきかえに応じる勇者さながらの会話。

　ともあれリリアナは、護堂の命を受けてエリカの寝室へ旅立った。

　やはり彼女とは倫りん理り観や正義感の点で、かなり意見が合う。やりやすい。

　ナポリでペルセウスと戦ったときから感じていたことだ。リリアナ・クラニチャールは例の空回りさえなければ、草薙護堂と抜きん出た相性を有する少女なのだ。

——待つこと暫しばし。

やがて、エリカの寝室から声が聞こえてきた。

「リリィ!?　護堂の代わりに起こしに来るだなんて、僭せん越えつもいいところよ！　身みの程ほどをわきまえなさい！　わたしと護堂の甘いひとときを邪じゃ魔まするることは、許さないわ！」

「あなたの方こそ、身の程をわきまえろ！　毎朝、主にベッドまで来させる騎士なんて聞いたこともない！　それでも栄誉ある大騎士、テンプル騎士の末まつ裔えいか!?」

「わたしはいいの、護堂の愛人だもの！　あなたこそ、変な口出ししないで！」

「ふんっ。リリアナ・クラニチャールは草薙護堂の第一の騎士であり、侍じ従じゅうの長たる者。愛人といえども不ふ埒らちな振る舞いが目立つ女は、掣せい肘ちゅうできる職権の所有者だ。ゆえに、この口出しは極めて正当なもの。四しの五ごの言わないでもらおうか」

「まあ、第一の騎士で侍従長？　そこにもうひとつ、第三の愛人と付け加えてはいかが？」

「な、何ッ!?」

「いい、リリィ？　中国では古来、宦かん官がんが皇帝の房ぼう事じを取り仕切ってきたわ。彼らがそれを許されたのは、皇帝の後宮ハレムにいながら『女』ではない存在だったからよ。なのにあなたは、護堂の女であるくせに他の娘たちを管理しようだなんて虫がよすぎるわ」

「い、いや、それはあくまで歴史上の類例であって……」

「ええ。歴史がその存在の合理性を実証しているの。護堂がバカな賭けをしたツケとして、リリィが彼のプライベートを仕切るのは認めてあげてもいいわ。でも、愛人関係を掌しょう握あくする権利は却きゃっ下かだわ。もしそうしたいのなら、あなたは彼の女であることを諦あきらめるべきよ。ちがう？」

「う……いや、それはその、何というか、うぐぐぐっ」

　相手の言い分を一部認めて、しかし、それより先は一歩も譲らない。

　交渉事の基本にして王道である。朝に弱い低血圧のくせに、起床後すぐにリリアナを丸め込むエリカの才覚は、やはりすばらしい。

　護堂がうなずく横で、アリアンナが「あらまあ」と騎士たちの論戦に驚いている。

　そしてカレンは「やっぱり日光では、ずいぶんとお愉たのしみだったようですね」と、小悪魔の表情でほくそ笑えんでいたが、わざと聞き流した。

　ともあれ、今日もにぎやかな朝だった。

　草薙護堂の日常は、いつもこんな感じで騒がしくはじまるのだ。

2

　かくして護ご堂どうは、エリカ、リリアナと共に学校へ向かった。

　通い慣れてひさしい通学路を、三人で連れ立って歩く。金髪と銀髪の美少女ふたりをひきつれて進む男子学生の姿はだいぶ目立つらしく、よく通行人の注視を集める。だが、この手の洗礼にも慣れてしまった。

　草くさ薙なぎ護堂は、自分でも呆あきれるほど順応性に富とむ人間なのだ。

　何しろ一週間かそこらで、カンピオーネの不自然すぎる体質にも慣れたほどである。

「ま、リリィの侍じ従じゆう長ちよう就しゆう任にんについては、いろいろ細部に口出ししたいところはあるけど」

　不ふ機き嫌げんな口調でエリカがつぶやく。

「だんだん悪くないアイデアだと思うようになってきたわ。いつまでもわたしが護堂のそばに張りついていたら、草薙護堂の『円卓』を大きくすることは難しいもの」

「……俺の円卓、だって？」

「そうよ。知ってるでしょう、アーサー王と円卓の騎士たちの伝説を」

　イングランド伝説の王。その麾き下かに馳はせ参じるため、各地から集つどった勇ゆう猛もうな騎士たち。

　彼らが座した丸形の大テーブルが円卓。これを『発見』したと偽いつわって製作させ、ウィンチェスター城に飾ったのは一三世紀のイングランド王エドワード一世だったか……。

「この半年で、草薙護堂の名前は世界中の魔術師・呪じゅ術じゅつ師しの知るところとなったわ。そろそろ次の段階に進んでもいい時期よ」

　歴史上の雑学を思い出した護堂に、エリカはさらに言った。

　それを受けて、リリアナが口をはさんでくる。

「つまり、わたしやエリカ、万ま里り谷や祐ゆ理りや清せい秋しゅう院いん恵え那なを引き連れて、草薙護堂は独自のグループか結社を築くべきだというのだな？」

「ええ。護堂の力と権けん威いが高まるほど、取り入ろうとする者も現れる。不必要に畏おそれ、過か敏びんに反応する者も出てくるわ。わたしの《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》、リリィの《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の幹部にも、どうにかして護堂の力を利用したがる輩やからが出てくるでしょう」

「そうした混乱を避さけるために、草薙護堂の旗はたをかかげて配下を統合し、わたしたちも今までの所属結社から距離を取るべきだというわけだな」

　エリカの発言に、リリアナがテンポよく相づちを打つ。

　この辺り、やはり紅と青の騎士たちはいいコンビなのだと思わされる。

「でもさ、俺がずっと平和に暮らしていくつもりなら、そこまでする必要はないだろ？」

「護堂、口先だけで平和主義者ぶろうとしても、説得力はかけらも生まれないわよ」

「自みずからのご気性と本質から目をそむけようとする……。その悪あく癖へきは、草薙護堂の欠点だと指摘しなければなりません。実現の見込みがない仮定は無意味です」

　ダメ出しのタイミングまで、ばっちり息が合っていた。

　くそ、血に飢うえた獣けものみたいに言いやがって。歯は噛がみする護堂をよそにエリカは続ける。

「じゃあ、ここで質問。来きたるべき時に備えて各方面に根回しし、今のまま護堂と共にいようとする娘たちの古巣と折せつ衝しょうし、規律と覇は気きにあふれる組織を構築できる人材はエリカ・ブランデッリ以外にいないと思うのだけど、いかが？」

　揺ゆるぎない自負をこめての問いかけだった。

　もちろん、護堂もリリアナも否定する言葉を持ちはしない。

「で、わたしが才覚を存分に振るおうとしたら、やっぱり頻ひん繁ぱんにあちこち飛び回らないといけないわ。そうである以上、護衛としても執しつ事じとしても優秀なリリィが護堂の脇わきを固めるのは悪くない配置でしょうね」

　なるほど、そういう意図があったのか。護堂はうなずいた。

「じゃあ護堂、そういう方向で進めてもかまわないかしら？」

「おまえにまかせておけば悪いようにはならないと思うから、べつにかまわないけど――。でも、サルバトーレ・ドニなんかも徒と党とうを組んでないだろ？」

　南なん欧おうの魔術結社を束たばねる『盟めい主しゅ』だという、若きカンピオーネ。

　その役割は、たとえばサッカーなどの代表監督の在あり方かたに近いのだという。

　配下となる結社を持たない。私的なスタッフを数名抱えている程度。しかし、有事のときはめぼしい魔術師や騎士に声をかけて召集し、所属組織に関係なく従じゆう属ぞくさせる。

　普段は、支配も統とう率そつもしない。欧州の魔術界に軽やかに君臨する『剣の王』——。

　あの男のようにはいかないのだろうか？

　己おのれを慕したう者たちを従え、徒党を組む。その大おお仰ぎようさが、護堂にはすこし気に入らなかった。

「あの方の真ま似ねをするのは難しいでしょうね。あれは、サルバトーレ卿きようがどんな個人にも陣営にも肩入れしない、感情移入もしない方だからこそ得られた立ち位置よ。でも、護堂にはそんなこと無理でしょう？」

　エリカに言われて、護堂は納得した。

　たしかに。自分の性格上、『誰の味方もするな』というのは不可能だ。今までそうだったように、これからもきっと行きずりで出会った誰かと親しくなり、仲間となり、協力し合いながら事に当たっていくに決まっているのだから！

　ひととおり授業を受け、放課後になった。いろいろ忙しいらしいエリカは、先に教室を出ていった。一方、護堂は携帯電話に届いたメールを眺めて、考え込んでいた。

　——内容は、以下のとおりである。

　From：香月さくら　Title：『ゴドーくん、てつだって！』。

　本文：おねがいっ！　いつか話した大魔王さんのことで、またお手伝いして欲しいことがあるのっ。力を貸してくれないかな？

「……何ていうか、揉もめごとの匂においがぷんぷんするな」

　カンピオーネ特有の直感ではなく、今までの経験則から容易に察せられた。

　はとこ・香月さくらと共に魔王カンピオーネを求めて出歩いたのは、一ひと月つきほど前。甘あま粕かすからのバトンをリリアナが受け取る羽目になり、どうしたものかと護堂は考え——

『リリアナは急にミラノへ戻ることになった……って設定で、かまわないか』

　と、大おお雑ざつ把ぱに結論を出した。

　その旨むねを伝えると、純真なはとこは素直に信じ込んだ。以後、たまにさくらと会っても、リリアナの問題は再燃することなく現在に至っていたのだが。

「どうかしましたか、草薙護堂？」

「いや、実はさ」

　机にリリアナが近づいてきたので、かんたんに事情を説明した。

　当事者のひとりでもあり、さくらの人となりも知る銀髪の侍従長は軽く眉まゆをひそめ、

「……揉めごとの匂いがぷんぷんと漂ただよいますね」

　同じ感想を口にした。まあ、妥だ当とうな推測だろう。

「そういうことだから、俺はちょっとさくらさんの様子を見に行ってくる。今日はここで別れよう。リリアナは日本にいないことになってるから、ついてくるのはまずいだろ」

　どうせ厄やつ介かい事ごとになるのなら、皿ごと毒まで喰ってやるか。

　そう決めた護堂が提案すると、リリアナはすこし考え込んでから言った。

「いえ。でしたら、このような策を用いてはいかがでしょう」

　騎士の語る計画に護堂はうなずき、即座にその案を採用した。

　約一時間後、護堂は秋あきノの水みず女子大までやってきた。

　文ぶん京きよう区くにある有名なお嬢さま学校である。高校一年生の男子としては、近づくだけでもちょっと気き後おくれのする場所だった。

　学校近くのファーストフード店に入る。待ち合わせ相手はすぐに見つけられた。

　彼女のいるテーブルへ、護堂は足早に向かった。

「あ、ゴドーくん！　こっちだよ、ひさしぶりィ！」

　ぶんぶん手を振りながら、さくらが声をかけてきた。

　かわいらしい童顔と小こ柄がらな体つきのせいで、中学生にまちがえられることもある。

　しかし、隣にいる女の子はさらに小柄で幼い顔つきだった。

　……小学五、六年生だろうか？　秀しゆう麗れいな顔立ちで、芸能人と名乗っても通用するだろう。天然パーマらしい巻き毛のロングヘアに、ひらひらしたワンピース。お人形さんのように可か憐れんな、やたらと目立つ少女だった。

「あ、護堂くんにも紹介しておくね。こちら、連れん城じよう冬ふゆ姫ひめちゃんっ。東京で初めてできた、あたしのお友達なのっ」

　紹介された見た目小学生の女の子は、フンと鼻息を荒くした。

　そして、じろじろと護堂をぶしつけに眺めて、険けんのある口調で言った。

「私たちのために奉ほう仕しさせようって親戚の子供は、そいつなの？　生意気そうなヤツね」

　連城冬姫の物言いは、妙に攻撃的だった。

　その視線は厳しく鋭く、なぜか護堂の頭とう頂ちよう近辺をにらみつけている。



「えーと……俺、そんなに生意気そうかな？」

「当たり前でしょ！　私やさくらよりも歳とし下したのくせに、どうしてそんなに背が高いのよ！　まさか、私の首を疲れさせるつもりじゃないでしょうね!?」

　思い切り、八つ当たりじみた文句を叩たたきつけられた。

　連城冬姫なる少女、背の低さにコンプレックスがあるようだ。そして護堂は、一六歳ながら一八〇センチ近い長身。それらが今の理り不ふ尽じんな発言を生んだのか。

　いや待て。もうひとつ重要発言があった。『私やさくらよりも歳下』？

「もしかして、さくらさんに魔法のことを教えた同じ学年の友達って……」

「あ、わかった？　そうなの。冬姫ちゃんがあたしの魔法の先生なの。とーっても物知りで、いつもいろんなことを教えてくれるんだよ！」

　驚きと共に冬姫を見つめる。さくらも童顔だが上には上がいる。

　そういえば、隣のクラスの宮みや間まさんも幼い容姿の持ち主だった。しかし、冬姫嬢は同い歳どころか歳上なわけで……。ここで護堂は、はたと気づいた。

　彼女の姓は『連城』。この名の意味するところは、やはり——。

「ちょっと!?　人のことジッと見て、どういうつもり!?」

　いきなり冬姫になじられた。

　お人形さんのような彼女の顔を、護堂はついじっくりと見つめてしまったのだ。

「あああ、あんたもしかして不ふ埒らちなことを考えてるんじゃないでしょうねっ!?　私の背が低いとか、チビとか、ちんちくりんとか！」

「落ち着いて、冬姫ちゃん！　ゴドーくんは背が高いけど、決して冬姫ちゃんをバカにしてるわけじゃないんだよっ」

　騒ぐ冬姫とさくらを無視して、護堂は核心に踏み入ることにした。

「それよりさくらさん、俺に手伝って欲しいことって何なんだ？」

「あ、そうだった。えっとね、実はこの冬姫ちゃんが恐怖の大魔王さんの名前をついに教えてくれたの。今まではあたしを巻き込まないようにって、気を遣つかってくれてたんだけど」

　護堂は警戒心を強めた。まさかバレたのか。

　純真すぎるはとこは、ついに草薙護堂の秘密を知ったのか⁉

「一週間くらい前から、日につ光こうの東とう照しよう宮ぐうが修復工事をはじめたってニュースがあるでしょ？　あそこを壊したのも大魔王さんの仕し業わざらしくて、冬姫ちゃんはすごく怖くなったんだって。自分もその人にひどいことされるんじゃないかって――」

「でも、あの悪あく行ぎよう三ざん昧まいの大魔王にいっしょに会いに行こうって、さくらが言ってくれたの」

　さくらに寄り添われながら、冬姫は決然と顔を引き締めた。

　護堂はさらに緊張した。彼女が『連城家』とやらの一員なら、絶対に知っているはず。まさか言うのか？　真のカンピオーネを前にして、その名を唱となえるつもりなのか⁉

「だから、私決めたわ。もう逃げるのはやめて、何かされる前に一言だけでも文句を言おうって。憎につくき女の敵――『くささぎごろー』に楯たて突ついてやろうって！」

　くささぎごろー……？

　護堂はガクッと脱力した。誰だ、そいつは。

「でね、ゴドーくんっ。冬姫ちゃんはくささぎさんと仲のいい人たちについても調べたんだって。これからその人たちのところを回って、居場所を教えてもらおうねって決めてるんだけど……いっしょ

に行ってもらえないかな？」

　あの無自覚な上うわ目め遣づかいで、さくらが頼んでくる。

　毒喰らわば皿までと決めていたが、これも毒と皿の一部だろうか……？

　脱力しながら護堂はコクリとうなずき、さくら＆冬姫との同行を受けいれた。

　ファーストフード店特有の、ゴミ類の後始末。

　ふたりの女子大生がトレイを持って片づけに行ったところで、護堂の耳元でリリアナ・クラニチャールの声がささやいた。

『何なのでしょうね、あの連城という少女は？　沙さ耶やの宮みや・清せい秋しゆう院いん・九く法ほう塚づか・連れん城じよう——いわゆる四家の一角、正せい史し編へん纂さん委員会とも関係の深い一族の者と思われますが』

「だよなァ、やっぱり」

　護堂は小声でささやき返した。

　リリアナが使っているのは『隠れ身』の魔術である。

　以前、七なな雄お神じん社じやの境けい内だいで透明人間のごとく姿を隠した術だ。その恩恵によって、リリアナはこっそり護堂のうしろについてきたのだ。

「でも、俺の名前をあんなふうに覚えているのは変だな……。そういえば、甘粕さんが記憶をいじる術でごまかした、みたいに言ってたけど。そのせいか？」

　さくらと共に青あお山やまへ行った日の夜、甘粕冬馬と電話で話をした。

　あのとき、彼は催さい眠みんの術を使えば……と言っていたが。

『本当ですか？　だとしたら心配ですね。魔術の心得がある人間に

その種の術を使っても、ちょっとしたきっかけで記憶を取り戻したりするのです』

「え!?」

　それが事実なら、ちっともごまかしが利きく範囲ではない。

『甘粕冬馬に事情確認をした方がよさそうですね。あと、正史編纂委員会――できれば沙耶宮馨かおるにも。わたしはこの場を離れ、彼らを訪ねてみます。かまいませんか？』

「ああ、頼む。俺もあの人たちの様子を見てみるよ」

　リリアナの気配が遠ざかっていくのを、護堂は感じた。

　そして、片づけを終えたさくらと冬姫がこちらに戻ってくる。ふたりともやる気十分、という充実した顔であった。

3

　冬ふゆ姫ひめに先導されて、護ご堂どうとさくらは秋あき葉は原ばらにやってきた。

　近年では電気街であることよりも、オタクの街である側面がクローズアップされる。冬姫が入っていったのは、メインストリートである中ちゆう央おう通どおりから外れた辺りだった。

　護堂たちの目の前には、雑居ビルがある。

　入居しているテナントの看板が目に飛び込んできた。

『メイドカフェ CurePure』『純メイド喫茶・茶々』『メイド飲ヤム茶チャ房・國こく士し無む双そう』『メイドリラクゼーション・ゴートゥヘブン』『メイド派遣業・プルサーマル』……。

　どうも、メイドをコンセプトとする店と会社だけが入居しているらしい。

　護堂は名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎら、三人のクラス

メイトを思い出した。連中、今度の学園祭で『スク水メイド喫茶』をクラスでやろうと訴えて、女子全員の猛反発を受けたっけなァと。

「何でこんなところに来たのか、教えてもらえませんか？」

「ここにね、大魔王カンピオーネの弟で子しってヤツが出入りしてるらしいのよ！」

　護堂が訊たずねると、冬姫は語気強く答えた。

　弟子を持った覚えなどないのだが、どういうことだ？

「ま、魔王さんのお弟子さんって、やっぱり魔法使いの人なのかなっ!?」

「そうじゃないって聞いているわ。何でもそいつは、たった三歳のときに拳けん法ぽうだかカンフーの型をカンピオーネの前でみごとに披ひ露ろうしたら『この者まさしく奇き童どう、鳳ほう雛すうの類たぐいなり』とか言われて、お弟子に取り立てられたらしいの」

　さくらと冬姫のやりとりを聞きながら、護堂は思った。

　そういう勿もつ体たいぶった文句を口にしそうな女性には、心当たりがあると。

　ってことは、もしかしてあいつか？　あの偏へん屈くつな女嫌いがメイド喫茶の常連客になるなどありえないだろうに……と、思案にふけっていた間に。

　ひとりの少年が目の前を通りすぎ、雑居ビルに入っていこうとした。

　護堂はまじまじと彼の横顔を見つめた。やはり知り合いだ。端正な美少年の顔立ちに、狷けん介かいさと不ふ遜そんさの陰が色濃く落ちている。

「……叔お父じ上うえじゃないですか。何でこんなところにいらっしゃるんです？」

　こちらの視線に気づくなり、少年は驚きの表情で言った。

草薙護堂を『叔父』と呼ぶのは、世界に彼しかいない。その名も陸りく鷹よう化か。香ホン港コン陸りく家けの若わか頭がしらにして、魔教教主・羅ら翠すい蓮れんの直じき弟で子しであった。

「僕が日本の、それも秋葉原にいるのは単純にビジネスです」

陸鷹化は、冷たいウーロン茶を口に運びながら言った。

突然の再会のあと、彼は護堂一行をメイド飲茶房『國士無双』に案内してくれた。そのまま卓のひとつを占せん拠きよして、話をはじめたのだ。

尚なお、席に着いた面々の前には、メイドさんが飲み物を給仕してくれた。

「我が香港陸家は、日本での拠点を新しん宿じゆくと池いけ袋ぶくろに持っているのですがね。ここらで再開発のさかんな秋葉原にも進出してやろうと、このビルを用意したんです」

「……もしかして、ここのメイド何とかって全部、鷹化のところが経営してるのか？」

「はい。日本常駐の舎しや弟ていたちにまかせたら、このようになりました。僕としては激安ＰＣパーツショップや同人誌ショップなんかも入れた方が集客力が上がると意見したのですが、どうしてもメイドテーマパークを創つくりたいと舎弟連中が盛り上がっていたので、ま、一回程度なら試ためしてみてもいいぞと許可しまして」

ヤクザ組織の若頭というより、ベンチャー企業の重役じみた口調であった。

こいつのところは、こんな商売やっていたのだなァ。それに、どこの国にも三バカのような連中はいるらしい……。

陸鷹化の説明に護堂が感じ入ると、さくらが口をはさんできた。

「ね、ねえゴドーくん。この子、ゴドーくんをおじさんって呼んでるけど、もしかして一族の人なのかなっ？　お正月とかで会ったことないけど……」

草薙一族には年のはじめに一堂に会し、旧交を温める習慣がある。

本家はもちろん全国から分家の人々も集まってくるので、親しん類るい縁えん者じやの顔と名前はここで大体覚えられるのだ。

「いろいろデリケートな成り行きがあるんだ。察してよ、さくらさん」

「……あっ。そうか、おじいちゃんとか真ま世よおばさんとか弦げん蔵ぞうおじさんとか、ゴドーくんのところはいろいろあるもんね！　うん、わかったよ！」

護堂のいいかげんな言い訳に、さくらはうなずいた。

こういうとき、祖父や両親の破は天てん荒こうさがありがたい。一方、今のやりとりを聞いた陸鷹化は、さくらに対して初めて笑顔を向けた。

「なんだ、叔父上のご親族でしたか。これは失礼しました。――おい誰か、こっちの卓に何か食い物も持ってきてくれ！」

女である冬姫とさくらをずっと無視していたのだが、ウソのように愛あい想そよくなった。

奥から、メイドさんが点心を載のせたトレイと共にやってくる。

小シヨヨウ籠ロン包ポウ、蝦エビ餃ギヨウ子ザ、焼シユウ売マイ、ミニサイズの豚ぶたまんにカスタード餡あんの桃もも饅まん頭じゆうなど。

形も彩いろどりもきれいな品々が卓に並べられた。試しに護堂も蝦餃子をつまむ。美う味まい。エビのプリプリがたまらない。メイドの衣装に反して、本格的な中華の味だった。

「ゴドーくん、この子とってもいい子だねェ！」

絶品の点心を振る舞われて、さくらは感かん極きわまった声で言った。

だが一方で、冬姫はずっと陸鷹化をとげとげしくにらみつけていた。

「そんなことよりあんた、くささぎごろーの居場所を教えなさい！　あんたがカンピオーネの弟子だってことは調べがついてるんだからね！」

「…………は？」

　冬姫の高たか飛び車しやな物言いに、陸鷹化はすっと目を細めた。

　殺気の影がほんのすこしだけチラつくのを、護堂は見逃さなかった。

「姐ねえさん、あんた今、変なことを言ったな。僕が誰の何だって？　それに、ずいぶんと生意気な口を利きいたじゃないか。叔父上の連れだ。一回だけなら見逃すぜ。だから、二度目はそれなりの覚悟を決めて言いな」

「……ひゃっ！」

　むしろ静かな口調での通告に、首をすくめる冬姫。

　護堂がさりげなく目配せすると、陸鷹化の目から凄すごみがうすれた。

「……まあ、ここまでにしましょうか。僕は野や暮ぼ用ようがあるので、失礼させていただきます。叔父上、今度ひとつ相談させてください。叔父上の非ひ凡ぼんなご見けん識しきをお借りしたい案件があるんですよ。ではごゆっくり」

　陸鷹化は席を立ち、護堂に対して抱ほう拳けん礼れいをしてから去っていった。

　その後、ぶるぶる震える冬姫が持ち直すのを待って、一行は店を出た。

　雑居ビルの外に出ると、小柄で高飛車な娘はようやく口を開いた。

「お、思ったよりも手て強ごわいヤツだったわねっ。ここは後まわしにして、次に行きましょう」

「冬姫ちゃん、大丈夫？　しっかりして！」

　新方針を打ち出した冬姫に、さくらが励ましの言葉をかける。

「あ、当たり前じゃないッ。私はこれでも由ゆい緒しよある連城家の跡取りなのよ！　あんな香港のヤクザに負けるものですか！」

　香港陸家は侠きよう客かく（中国のヤクザ者）を束ねる、無法者の一門なのだという。

　その事情を知っているのだとうかがわせる、冬姫の言葉。そういえば彼女は、さくらに古いドイツ語を教示したのだったか。

　この知識、やはり四家の一員と見るべきか――。

　護堂の品定めなど知るよしもない冬姫の先導で、一行は虎とらノ門もんへ向かった。

　やってきたのは、駅から程ほど近ちかい神社。

　七なな雄お神社といい、境けい内だいまで行くには三〇〇段もの石段を登る必要がある。護堂の顔なじみが巫み女こを務める場所だ。――やっぱり、俺の情報を一応は調べてあるんだなァ。

　うなずく護堂の隣で、冬姫がさくらに説明する。

「ここにはね、くささぎごろーの慰なぐさみ者ものにされた巫女がふたりもいるの。しかも、このふたりは姉妹で、妹の方は小学生なのよ！　信じられる!?」

「ふえっ!?　たた、爛ただれてるよ、そんなの！　人としてダメダメだよぉッ」

　コメントはすまい。余計な感情も抱くまい。

　必死に己をマインドコントロールする護堂であった。

　人の皮をかぶった悪あつ鬼き羅ら刹せつへの文句を言いながら、女子大生ふたりは境内に入っていく。護堂はそのあとを無言で追いかけた。

　途中で神職を見つけると、冬姫は何度か声をかけようとした。

しかし、彼らは会え釈しやくをするなり足早に立ち去る。冬姫が呼び止めても止まらない。

「れれれれれ、連城の娘が来たってのに、ここの連中は何て失礼なの!?」

冬姫が怒っている。しかし、筋ちがいの怒りだろう。

神職たちは、護堂の姿を見て逃げただけなのだから……。実はこれ、いつもどおりの対応である。護堂自身が呼び止めない限り、彼らは決して近づいてはこまい。

そうこうするうちに、一行は七雄神社の拝はい殿でん前にやってきた。

玉たま砂じや利りを敷しきつめた境内。

たたずむ巫女装しよう束ぞくの少女ふたり。もちろん万里谷姉妹しまいだ。

「あ、お兄さま。いらっしゃいませっ。今日はどのようなご用事ですか？」

「まあ、いらっしゃるのでしたら、報しらせてくださればよかったのに……。今、お茶のご用意をいたしますね」

万里谷ひかりが朗ほがらかに、まぶしい笑顔を振り向けてくれる。

万里谷祐理が淑しとやかに、上品な微笑で歓迎してくれる。

姉妹それぞれの表現で、彼女たちは護堂への好意を示していた。ありがたい話だ。

妹のひかりは『いずれわたしもお兄さまのおそばに参りますので、そのときは分わけ隔へだてなく可愛かわいがってくださいね』と、最近よく口にする。

変な言い方だが、彼女なりになついてくれているのだろう。

そういう訴えを聞くと姉の方は困り顔になるが、いつも変わらず美しく、やさしい。斉せい天てん大たい聖せいとの戦いを経へてか

ら、護堂は祐理との間に奇妙なほど強固な絆きずなを感じる。

　空気がしっくりくるというか、肌がなじむというか。

　多くを語り合わなくとも、同じ空間にいるだけで漠ばく然ぜんと満たされていくような——。そんな感覚だった。

　が、それはそれとして、今の懸けん案あんは同行者二名の方である。

「あれっ？　またゴドーくんのお友達なんだ。何だか偶然が続くねー」

「あ、ああ。こういう、友達とよく会う日もあるんだな。俺もびっくりしたよ」

　さくらの指摘に、護堂は苦しい言い訳を返す。

　無む垢くなはとこは「うんうん。きっと普段の行いがいいから、神様がご褒ほう美びをくれたんだねっ」と無む邪じゃ気きに笑った。すばらしい心の美しさだ。

　対して連城冬姫は、そろそろ護堂へ不ふ審しんそうな視線を投げかけてきた。

「あー……今日は、特に用事はないんだ。この人たちがここに用があるっていうから、付き添いで来ただけで。何か、探している人がいるらしいんだよ」

　護堂の説明に、万里谷姉妹は「はあ」とうなずく。

　すると気を取り直したのか、冬姫が鋭い声こわ音ねで言い放った。

「あんたたちが万里谷家の姉妹ね？　私は連城冬姫。知ってるでしょう、連城家の跡取り娘で、あんたたち媛ひめ巫み女この上に立つ者よ。いいこと、私はあの人でなしの魔王カンピオーネ、くさなぎごろーと会わなきゃいけないの。すぐにここへ呼び出しなさい！」

　あいかわらず、無意味にえらそうな物言いだ。

　しかし、万里谷姉妹に感かん銘めいを受けた様子はない。ただ不思議そうに首をかしげ、珍獣を見る目つきで冬姫を眺め、ついで護堂をちらっと見ただけだった。

　たしかに、カンピオーネその人がそばにいるのに、この発言はない。

　姉妹も困惑するはずだ。護堂は難しい顔を作り、首をふるふると横に振ってみせた。

　すると、即座にひかりが答えた。

「えーと……すいません、そういうことは禁止されているんです」

　さすが小学六年生ながら、感心するほど気が利きく少女だ。察してくれた。

　助かった……と護堂が思ったとき、ひかりはさらに発言した。

「それにすいません。連城の御家は後継ぎとなる方を定めていないはずでは……。以前、清秋院の恵那お姉さまがおっしゃっていました」

　何？　じゃあ、冬姫は連城家ゆかりの呪じゅ術じゅつ師しじゃないのか……？

　驚く護堂。一方、冬姫は「むぎぎぎっ」と唇くちびるをとがらせ、

「そ、そんなことないもんっ。連城の家は私が次期当主になるんだもん！　何さ、ちょっとばかり助平なカンピオーネに可愛がられてるからって、人のことバカにしてっ。いいこと、連城は四家の一、あんたたち程度にバカにされるような家格じゃ——」

　口早に言いつのる。しかし、それが尻しりすぼみになっていく。

　冬姫はやけにビクついた表情で、罵ば声せいを呑のみ込んだ。

　犬がしっぽを丸めるのにも似た情けなさ。だが、怖がっているのは彼女だけではない。万里谷ひかりも、隣にいる姉を怖そうに見ていた。



「連城の後こう継けい人にん――と、おっしゃいましたか」

　万里谷祐理は静かに、怜れい悧りそのものの美び貌ぼうでささやいた。

「ならば、四家の血を引く識者と見こんでお話しいたしましょう。今あなたが不ふ敬けいを働いたのは、我が国でも古くより羅ら刹せつの君きみと呼び習わし、畏い敬けいを捧ささげてきた魔王の裔すえである御方です。相応の礼をもって接するのが作法であり、しきたり。それを遵じゆん守しゆできぬ者に、四家たるの資格などあろうはずもございません。恥をお知りなさい！」

　一いつ喝かつする祐理の美しさ、迫力たるや夜や叉しや女めさながら。

　護堂も思わず首をすくめた。さくらだけが「？」と首をかしげ、きょとんとしていた。こうなった祐理の気勢にも動じないとは、みごとに空気を読んでない。

「さらに言えば、我ら媛ひめの名を継つぐ巫女に敬意を払えぬことも、四家にあるまじき不心得。お下がりなさい。あなたは七雄の神しん域いきを踏む資格なき御方です」

　ぴしゃりと宣告する。

　さすがは媛巫女。ただのお嬢さまにはない威厳と気高さの持ち主だ。

　いつのまにか、冬姫は涙目になっていた。あれだけ高飛車なくせに、とことん度胸はないらしい。護堂は助け船を出すことにした。

「連れが変なこと頼んで、悪かったな。あとであやまりに来るから、今日はこの辺で。ほら、さくらさん。友達を連れて早く出よう。じゃあ、またあとでな！」

　無理矢理まとめるような、退去の挨あい拶さつ。

　はとこの肩を叩たたいて、冬姫を連れ出せと指示。

　彼女らを連れて、護堂は万里谷姉妹の前から立ち去っていった。あとで謝罪と事情説明のメールでも送っておこう……。

「冬姫ちゃん、さっきみたいな口の利き方したら、みんな怒っちゃうのも仕方ないよ～。もっとおだやかにしなくちゃ」

「わ、わかってるわよっ。で、でも、さっきのはあの巫女があんまり失礼だからっ」

　護堂、さくら、冬姫の一行は電車で移動中だった。

　今度の行き先は、青あお山やまだという。

「どうしてそこに行くのか、教えてもらえますか？」

「うぐっ。青山通りの近くには、昔から民間の呪術使いたちが多いの。最近、あの辺りにくささぎごろーの側近で愛人だっていう悪い魔女が徘はい徊かいしてるって聞いたわ。ひっく。その女を捕まえて、今度こそ魔王の居場所を聞き出さなきゃ」

　護堂の質問に、冬姫は鼻をすすりながら答えた。

　まだ気を抜くと、涙が出てしまうらしい。どうやら彼女、かなりのヘタレだったようだ。その横で、護堂は思った。やはり二度あることは三度になるだろうかと……。

　青山通りから、すこし外れた細い裏通り。

　露ろ店てんや小さな商店が並んでいる。一月前、護堂もさくらといっしょに訪ねた辺りだ。

　その一角にある呪具商店『胡こ月げつ堂どう』が、冬姫の目的地だった。ここの女主人は、青山界かい隈わいでは顔役のような存在なのだと教えられた。

　店の前までやってくると、護堂はドアに耳を押しつけた。

　なかの物音を聞き取ろうとする。そのあやしい仕草に冬姫とさくらは驚いたようだが、彼女たちも同じように耳を当てた。

　聞こえてきたのは、ふたりの女性が会話する声だった。

『つまり、あたしに委員会の動向を探れとおっしゃるんですかー』

『人聞きの悪い言い方はしないでくださる？　わたしが期待しているのは、そんな大それた情報じゃないわ。たとえば、ごくプライベートな話でもいいの。沙さ耶やの宮みや馨かおるさんが先週どんなガールフレンドとデートしたとか、甘あま粕かすさんには実は妻さい子しがいるとか。その程度の情報でもいいから、何か新情報が入ったら教えてくれというだけで』

『謝礼までいただくのに、そんなのでいいんですかー？　あたしは楽で助かりますがー』

『こう言ったら悪いけど、あなたくらいの力で委員会幹部を出し抜くのは無理よ。もっと上級の実力者でも難しいでしょうし……。わたしが知りたいのは、あの人たちの趣味や性格。敵となるにせよ味方になるにせよ、その手のことを知っておいて損はないはずよ』

　あやしい密談の真っ最中だったようだ。

　朝、彼女が語った『円卓』の計画。その設計図には、やはり正せい史し編へん纂さん委員会との関係を再構築することもふくまれているのだろう。

　彼らとどうなるにせよ、攻略に役立ちそうな情報は集めておくということか。

　護堂は感心した。やはりリリアナの言ったとおり、自分が必要だと断じた事柄にはすばらしく勤きん勉べんな少女なのだ。

　そして連城冬姫は、ドアの前で大きく深呼吸していた。

　決意の表情。ノブに手をかけ、勢いよくバンッとドアを開け放つ。

「ついに見つけたわよ、魔王くささぎごろーに仕つかえるイタリアの魔女！　『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』とか呼ばれていい気になってるようだけど、この私が来たからにはもうおしまいねっ。おとなしくカンピオーネの居場所を教えなさいっ！」

　一気に言い切った冬姫へ、店内にいた『胡月堂』の女店主、そしてエリカ・ブランデッリが好奇の視線を注ぐ。

　ミラノ生まれの金髪美少女は面白そうに微笑した。

「……護堂、ほんの数時間しか離れていなかったのに、ずいぶん個性的な人材を見つけてきたようね。これは一体、どういう趣向なの？　カンピオーネである草薙護堂と共にいながら、わたしに居場所を教えろと言わせるだなんて」

　この訴えは、もちろん冬姫とさくらの聞くところとなった。

4

「ん、今のどういう意味——？」

　小首をかしげるさくら。どう言いつくろおうかと護ご堂どうが考え込んだ、そのとき。

　ぱたり。はとこがいきなり膝ひざをつき、前のめりに倒れ込んだ。

　あわてて駆け寄ると、「ふみゅ～」と平和な寝息を立てて眠り込んでいた。

「どうやら、いい場面に間に合ったようですね」

　うしろから声がした。このハスキーな美声は、知り合いのものだ。

　振り向くと沙さ耶やの宮みや馨かおるが立っていた。数時間前に別れたリリアナもいっしょだった。

「状況がこれ以上混乱するのも面倒ですし、香こう月づきさくらはわたしが魔術で眠らせました」

　近づいてきたリリアナが報告する。

「冬ふゆ姫ひめ、これから君の問題行動に対するお説教と、処分についての話をはじめようか」

「ひゃっ……かかか、勘かん弁べんして馨！　これからは絶対にいい子にするから！」

「だめだめ。その言葉に何度ごまかされたことか。さ、護堂さん、それに他のみなさんもごいっしょにどうぞ」

　馨はさわやかな笑顔で語り、冬ふゆ姫ひめは怯おびえきった様子で身をすくませる。

　リリアナは面倒そうにため息をつき、護堂とエリカはきょとんと顔を見合わせた。

　眠っているさくらを『胡こ月げつ堂どう』の店主にまかせて、みんなで外へ出る。

　この辺りは車の往おう来らいもすくない。端っこの方なら、集団でたむろしても大丈夫だ。護堂、エリカ、リリアナ、そして冬姫らの中心に馨は立ち、話しだした。

「我が家に訪ねてきたリリアナさんから、事情はうかがいました。……この冬姫ですが、ご想像されたとおり連れん城じよう家の長女です。本来なら恵え那なやぼく、九く法ほう塚づかの幹みき彦ひこさんのように次期当主となるべく、正せい史し編へん纂さん委員会で働いたりするところなのですが」

　護堂たちも知る重要人物たちの名前が出る。

　そういえば、九法塚幹彦氏は魔女アーシェラの操あやつり人形にされたことで心身共に激しく衰すい弱じやくし、委員会傘さん下かの病院で療養中だという。

「残念ながら、冬姫は体に呪じゆ力りよくを溜ため込めない特異体質なんです。術らしい術はほとんど使えません。媛ひめ巫み女ことして抜ばつ擢てきされることも、もちろんありませんでした」

　護堂はサルバトーレ・ドニの過去を思い出した。

　あの男もカンピオーネとなる前は、同じ体質だったらしい。

「まあ、四家の頭領がすぐれた術師である必要もなし。そこで割り切って、単なる組織の長になるべく専せん心しんしてくれればよかったのですが。冬姫は背の低さと術を使えないことに強いコンプレックスを持っていまして……。そのせいで周囲と人間関係がうま

くいかず、なかなか現場に出せないまま今に至ったわけです」

　才がないものの冬姫は研けん鑽さんに励み、呪術に関係する知識はたっぷり身につけたらしい。

　しかし、彼女が求めるのは『実践』のための技術。なかなか気の毒な話だと、護堂は同情してしまった。

「ま、護堂さんの情報をあちらで眠るご親しん戚せきにバラしたりと、問題行動も多い娘です。一〇〇％同情はできませんが」

「草くさ薙なぎ護堂の名前をあやまって記憶させたのは、やはり甘あま粕かす冬とう馬まだったそうです」

　肩をすくめる馨の横で、リリアナが補足した。

「連城冬姫が普通の呪じゅ術じゅつ師しなら、記憶を取り戻す可能性はかなり高かったでしょう。しかし素人しろうと同然の者なら、さほどでもありません。彼の処置は適切だったわけです」

　そしてリリアナと沙耶宮馨は、暴走する冬姫を直接取り押さえることにした——。

　事情を聞いて、エリカがうなずいた。

「……興味深い出来事がいろいろあったようね。それで馨さん、このお騒がせな娘をどう処分なさる気？　無む罪ざい放ほう免めんとするわけにはいかないでしょう？」

「そうですねー。精神操作の霊れい力りょくを使う媛巫女に頼んで、記憶喪そう失しつにでもするか……」

　馨が剣けん呑のんなことをつぶやくと、冬姫は身をすくませた。

「そこまでするのはかわいそうだから、一〇年ほど尼あま寺でらに放り込んで精神修養と反省に明け暮れさせるか……。そんなところかな」

「かかかか馨！　わわ私たち、幼なじみじゃない!?　見捨てる気!?」

「組織の責任者としては、個人的な友情よりも規律の維い持じを考

えなくちゃいけないのさ。君だけを甘やかすのは示しがつかないからねー」

　ここで馨は、ちらりと護堂の方を見た。意味ありげな視線だった。

「俺の方はたいして迷惑だったわけじゃないし、今回は大目に見てあげてもいいんじゃないでしょうか。俺の――カンピオーネのことを教えた相手もさくらさんだけですし」

　笑い話程度のお騒がせ事件。しかし、あっさり赦しや免めんしては再犯があるかもしれない。

　なんとなく馨の思おも惑わくを察した気がして、護堂は口を出した。

「身内の俺が言うのもアレですけど、魔王がどうとかいう情報を知ったからって、さくらさんに何か大それた真ま似ねができると思いませんし」

「かく王はのたまいけり……と。でしたら、特別に恩おん赦しやといきましょうか」

　うやうやしく馨は頭こうべを垂たれ、それから冬姫に向き直った。

「そういう次第だから、我らが王の御ご仁じん慈じに深く感謝することだね。二度目はないよ。護堂さんのすさまじさは冬姫もいろいろ聞いてるだろう？」

「ど、どういうこと？　何で素しろ人うとの子供の言うとおりにしてんのよ、馨!?」

「そりゃあ護堂さん――草薙護堂氏こそ、我われらがカンピオーネその人だからさ。甘粕さんのかけた『狂くるわし』の術、まだ解けてないのかい？」

「ひ――――!?　そそそ、そうだったの!?」

　卒そつ倒とうせんばかりに冬姫は驚き、へたり込む。腰が抜けたのだ。

　しかし、それでも護堂を見上げて、どもりながら何かを言おうとする。

「あああ、あの、あたしもわざとやったわけじゃないんだけど、ややや
っぱり体たい罰ばつとか、おしおきとか、そういうひどいことされちゃったりするのかしら？　もももちろん連城の娘として、処分には毅き然ぜんと従うつもりなのですけど、いい痛いのとか怖いのとかはちょっと——！」

「もういいですよ。たいしたことにはなっちゃいませんし」

　ろれつが回ってないし、言葉遣づかいもめちゃくちゃだった。それでも冬姫の謝意らしきものは伝わってくる。

　護堂が鷹おう揚ようにうなずくと、馨も苦笑した。

「ま、落としどころとしてはこんなところですかね。護堂さん——それにリリアナさんやエリカさんにも、ご迷惑をおかけしました。ご協力に感謝いたします」

「どういたしまして。わたしとしても、馨さんが洒落しやれのわかる人だと知ることができて、有意義なひとときだったわ」

　邸てい宅たくの女主人のごとく応こたえたのは、もちろんエリカだった。

　ほとんど何もしてないくせに、態度が大きい。いつのまにか場の主役になりおおせる特技を、存分に見せつけている。

「どういう間柄になるにせよ、洒落しやれっ気けのない人とはあまり愉たのしいおつきあいにはならないもの。馨さんや甘粕さんとなら、すくなくとも退屈させられることはないでしょうね」

「どういたしまして。……あ、そうだ護堂さん」

　馨は最後に、ニヤッと笑って訊たずねてきた。

「いっそ冬姫も愛人軍団に仲間入りさせますか？　ついでみたいなものですし」

「どんなついでですかッ。また変なうわさになるから、そういう冗談はやめてください！」

数日後の草薙家。

夕食に招待した香こう月づきさくらと共に、護堂と静しず花かは食卓を囲んでいた。

ちなみに祖父は、用事があるということで不在である。厨ちゆう房ぼうの主がいないため、兄妹とはとこの三人でドライカレーとサラダ、各種野菜のオーブン焼きなどを作った。

「あれからねー、冬姫ちゃんもすっかり落ち着いてるよー」

さくらは満面の笑顔で、友人の近況を報告する。

辛からいものが苦手な彼女のために、今夜のカレーはだいぶ甘口だ。

「幼なじみのえらい人がいろいろ相談に乗ってくれて、いろいろ面倒見てくれたんだって。だから、もうゴドーくんにお手伝いを頼まなくても大丈夫らしいの」

「そうか。それはよかったよ」

おざなりな返答をして、カレーを口に運ぶ。

あのあと護堂はひとりで『胡こ月げつ堂どう』に戻り、はとこを起こしたのだ。

冬姫は家族に呼び出されたので先に帰ったと説明した。『あたし、どうして寝ちゃったのかな？』と不思議そうなさくらは『貧血でも起こしたんだよ』で、かんたんにごまかした。

尚なお、眠る間ま際ぎわのエリカの発言については、

『あの女の子、ゴドーくんが何とかだって言ってなかったっけ？』

『いいや。聞きまちがいだと思う』

と決めつけたら、さくらも素直に信じ込んだ。

傍そばで『胡月堂』の女店主も真っ青な顔で聞いていたが、もちろん草薙護堂のすることに口をはさんだりはしなかった。

「ふうん。お兄ちゃんもすこしはさくらちゃんの役に立ったようね」

　静花がえらそうにコメントすると、さくらは満面の笑顔でうなずいた。

「うんっ。やっぱりゴドーくんは頼りになるよね。……あ、そうそう。それで冬姫ちゃん、最近は眉み間けんにしわ寄せて、よく考え事をしてるんだけど」

　イヤな予感を覚えながら、護堂はドライカレーを味わった。

　甘い。やはり、自分の分だけでも香こう辛しん料りようで辛さを増しておくべきだったか。

「冬姫ちゃんね、『やっぱり私も女としての魅み力りよくを最大限に使って、上を目指すべきかもしれないわ。利用できるものは何でも利用しなきゃ……』だって。で、これをゴドーくんに渡してって頼まれたんだ」

　と、さくらは一通の手紙を取り出した。

「なんかね、冬姫ちゃんはゴドーくんとまず文通からはじめて、親密な関係になりたいんだって。で、ゆくゆくは自分のことを幼なじみのえらい人よりも上の地位に取り立てて欲しいとか言ってたよ。よく意味はわかんなかったけど」

　さくらは友の発言の意味を、本当に理解してないのだろう。

　のんきに笑いながら手紙を差し出している。護堂にはその笑顔があまりにまぶしく、そして隣で目の端はしを吊つり上げる静花がとにかく邪じや魔まくさかった。

「どういうこと、お兄ちゃん!?　さくらちゃんの相談事に乗ってたはずなのに、何でそんな話になってんのッ!?　詳しく事情を説明しなさいよっ」

　もちろん護堂には、妹の要請に応じるつもりなどない。

　さあどういう意味だろうなとおざなりにつぶやいて、無心にカレーを咀そ嚼しやくする。

　そして思った。祖父は都合の悪いことをすっとぼけるのが異様に上う手まいのだが、きっとこういう体験を数多く重ねて培つちかった技術なのだろうなと――。

第３話　騎士たちと剣の試練

1

　その人間は、驚くべきしぶとさで彼への反抗を続けていた。

　彼はダーナ神しん族ぞくの盟めい主しゆにして、不敗の剣を振るう者。

　王であり戦士でもある、強きよう壮そうな神。その彼に立ち向かうのは、信じがたいことに英雄でもなく、魔術師でさえない金髪の人間だった。

　だが、この人間が振るう長槍は、すばらしい冴さえを見せる。

　人の子が身につける武ぶ技ぎとしては、かなりの出で来き映ばえだと賞賛できるだろう。

「もうやめよ、定じよう命みようのさだめに縛しばられし者よ。いかに奮戦しようとも、余よの勝利を侵おかすことはかなわぬ。そなたを常とこ世よに連れ込んだ聖ゲオルギウスは、すでに滅めつした。その槍のみ遺のこして逝いったのだ。あやつに殉じゆん死しするにしても、もっと穏やかな死は選べよう」

　突き、薙なぎ、払う。

　人間の槍さばきは変へん幻げん自じ在ざい。ひとつとして凡ぼん庸ような攻撃はない。

　しかし彼は、それらをいちいち気にしてはいなかった。ただ剣と腕が反射的に動くのにまかせ、全てを易やす々やすと防ぐ。

悲しい哉かな、人の子よ。そなたが敵としたのは無敵不敗の神なのだ。

おそらく人間は、身につけた全ての技を繰くりだし終えてしまったのだろう。

次第に技ぎ巧こうを捨てていった。シンプルに槍で突く。一直線に突く。彼の——神の肉体めがけて、鋼はがねの穂ほ先さきを無心に突き出す。

これを幾度も、愚ぐ直ちよくに繰り返す。無心に。無念無想。何も念じず何も思わず。

あるいは、無想の境地こそが技芸の道において最も困難な奥おう義ぎであると、実戦のなかで気づいたのかもしれない。

もしそうなら、この人間が持つ天てん賦ぷの才たるや、どれほど巨大なものか。

みごと。彼は微笑した。

人間の繰りだした槍が、彼の握る不敗の剣を弾はじき飛ばした。

剣は高々と宙を舞い、人間の足下に落ちた。しかし、この偉い業ぎようを助けたゲオルギウスの槍は、粉々に砕くだけ散った。朽くち果てる前に人間の戦士を助け、彼の剣を弾いたのはさすがと誉ほめたたえるべきか。

「主であるゲオルギウスが滅ほろび、限界に達していたのだな。ならば人の子よ、これでもうそなたの希望は失うせてしまった」

「……いいや。これからだ。これでようやく、本当の戦いができる」

金髪の人間は、足下に刺さった剣へ手をのばした。

輝く光の剣——。

トゥアハ・デ・ダナーンの王が操るべき常世の鋼を掴つかみ、奪い取った。

「槍も悪くはないけど、やっぱり僕はこっちがいい。こっちでなく

ちゃァ、本当の本気で完全燃焼なんかできっこない。あなたの剣、悪いけど使わせてもらうよ」

　最さい期ごの最期まで戦うのをやめず、勝利を希求する。

　その意気や良し。すばらしい放ほう胆たんさだ。あるいは、ただの阿あ呆ほうかもしれないが。

　実際、死すべき人間にはあの剣を使いこなせまい。その秘めたる神力はおろか、単なる刃物としても御ぎよすことはできないはず。鋼の棍こん棒ぼうくらいにはなるだろうが……。

　彼は新たな剣を手元に呼び、無造作にかまえた。

　輝ける剣ほどではないが、業わざ物ものだ。この鋼を以もつて、神へ挑いどんだ愚ぐ者しやに華々しい死を授さずけてやろう。それが愚かな勇士に対する、せめてもの手た向むけ——。

　神と神殺しならざる者が切り結び、生死を分かつ。

　長い長い決闘の果て、ついに勝者は決し、閉幕となる。今回の挿そう話わは、そのあとに起きる物語である。

2

　六月。初夏のさわやかな陽気のなか、トスカーナの丘きゆう陵りようをドライブ。

「なかなか悪くない趣向だと思うわ。相乗りしているのがあなたでなければ、だけど」

　古都フィレンツェの南側に位置するローマ門。

　ここから車をしばらく走らせると、田園の景色が見えてくる。

　起き伏ふくに富んだ丘陵と緑は、トスカーナ地方独特の風景だ。夏の炎えん暑しよに至る前の季節なら、車の窓を全開にして空気ま

で楽しめる。

「ねえジェンナーロ。あなたがもうすこし気の利きく人だったら、今頃きっと素敵な時間を過ごしていたでしょうね……」

「う・る・せ・えッ！　いちいちイヤミな小娘だな、てめえは！」

　優美なるエリカ・ブランデッリに吠ほえたのは、運転中の粗そ野やな男だった。

　ジェンナーロ・ガンツ。

　魔術結社《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》に所属する大騎士である。

　口元にたっぷりとひげをたくわえた面相は貫かん禄ろく十分で、とても一九歳には見えない。二〇代後半でも通用する。背は小柄だが、体つきはとても逞たくましい。頭にバンダナを巻けば、映画のスクリーンから飛び出てきた海かい賊ぞくさながらだ。

「大先輩のパオロから『姪めいを送ってやってくれ』って言われたら、断るわけにはいかねえだろ！　よっしゃ俺にまかせとけってなるもんだ！」

「そこで上う手まく断れないから、気が利かないのよ。ほんと、呆あきれてしまうわ」

　一九歳のガンツに対して、エリカは一二歳。

　しかし、おとなびた美び貌ぼうとメリハリのあるスタイル、身にまとう貴婦人の雰ふん囲い気きがもう二歳ほど年かさに見せていた。

「わたしはあなたとドライブなんかしたくない。あなたもわたしを敬遠したい。ほら、おたがいの利害は一致するでしょう？　なのに、ふたつ返事で叔お父じさまの言うとおりにするだなんて……。よかったら今度、社交術の基礎をレッスンしてあげましょうか？」

「ざけんなッ。おまえみたいなややこしい口の利き方なんざ、死んでも覚えねえ！」

　エリカは助手席ではなく、後部座席にひとりですわっている。

もちろん、ガンツの隣を避けたかったからだ。

ふたりは同じ《赤銅黒十字》に所属する魔術師で、しかも『騎士』である。

イタリアやスペインなど南欧における魔術師の世界では、騎士といえば『テンプル騎士』を意味する。もちろん、歴史上に実在した真のテンプル騎士団――『キリストとソロモン神殿の貧しき戦友たち』は一四世紀の初めに壊かい滅めつしている。

しかし、わずかではあったが彼らの生き残りはいた。

彼らが身につけた魔術と武術の継承者もいた。彼らの資産を受け継ぐ者もいた。

そうした人々が、やがて『騎士』を名乗るようになった。ただの魔術師ではない。武ぶ芸げいに長たけ、気け高だかき騎士道精神を学んだ栄誉ある異能者なのだ。

（もっとも、本来のテンプル騎士はイエス・キリストの修しゆう道どう士し――つまり僧そう侶りよでもあったのだが、こちらの側面は徐々にうすれていった。その代わりに、エリカのような女性でも騎士になれるようになった。かつてのテンプル騎士団は女によ人にん禁きん制せいだったのだ）

エリカもガンツも、共に騎士道を志こころざす同志。

しかし、もともとの相性の悪さはいかんともしがたい。

ガンツはイタリア半島の最南端レッジョ・カラブリア県で生まれ、粗そにして野やだが卑ひではない快男児。エリカは北の大都市ミラノで生まれ育った、洗練された美少女にして名門ブランデッリ家の姫（先祖には魔王カンピオーネさえいる）。

育った境遇がちがいすぎる。

しかも、ふたりはいずれ『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』の座を巡って競い合う、最も身近なライバルなのだ。これは《赤銅黒十字》の筆頭騎士を示す称号である。

　彼らが所属する《赤銅黒十字》は世界有数の魔術結社。

　構成員はイタリア人ばかりではない。

　特に幹部クラスの人材は、諸外国からスカウトした者が多い。しかし、結社の総そう帥すいや『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』はイタリア人から選ばれるのが通例だった。そして、いずれ幹部となるはずの若き逸いつ材ざいのなかで、イタリア人の騎士はガンツとエリカのふたりだけだった。

　これが、彼らを何となく疎そ遠えんにさせている理由である。

　エリカの叔父にして、当代の『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』パオロ・ブランデッリ。

　彼がガンツに姪めいの世話を頼むのは、きっと若き幹部候補たちの仲を取り持つ……という気き遣づかいがあるのだろう。

　——ともあれ、ガンツの運転するスポーツカーはトスカーナの田園を走る。

　彼らの目的地は、フィレンツェから二〇分ほどで到着する農村だった。

　中世から存続しているのであろう、古めかしい修道院。城じよう塞さい造づくりと呼ばれる、石の壁で四方を取り囲んだ堅けん牢ろうな建物。

　その近くでガンツは車を止め、エリカは旅行鞄かばんといっしょに降りた。

「帰りの足は適当に確保するから、待っててくれる必要はないわ。ごきげんよう、ジェンナーロ。楽しい旅ではなかったけれど、あなたの労力には感謝しないといけないわね」

「礼を言うなら、もっと素直に言いやがれ！　じゃあなっ」

　あわただしくガンツの車が走り去っていく。

　エリカは修道院へ歩きだした。

　一二歳ながら卓たく越えつした技ぎ倆りようを認められ、正式に

『騎士』として叙じょ勲くんされたのは二週間前。彼女のような新米は、ある祝福をここで授かるのが通例だ。

　……ということはもしかしたら、あの娘もいるかもしれない。

　ほぼ同時期に、あちらも魔術結社《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》より叙じょ勲くんされたと聞いている。

「なんて思っていたら、予感的中ね」

　修道院の中庭に、顔見知りの少女がたたずんでいた。



　きれいな銀髪をストレートにのばしている。繊せん細さいな美び貌ぼう、ほっそりした華きや奢しやな肢し体たいとあいまって、現世にやってきた月の精にも似た容姿だ。しかし、彼女の横顔はきりりと引き締まり、幼いながらも毅き然ぜんたる騎士の誇りで輝いている——。

　年齢もエリカと同じ一二歳。

　共にミラノを本拠地とする、名門魔術結社の神しん童どう。

　もう十年来のつきあいとなるリリアナ・クラニチャールその人だった。

「ごきげんよう、リリィ。わたしたちってやっぱり、運命的な絆きずなで結ばれているようね」

「……なれなれしく愛称で呼ぶのは、やめてもらおうか。それに、ここで会うのは偶然ではなく、むしろ必然だ。あなたも『剣』を授かりにきたのだろう？」

　年齢と性別にそぐわない、堅苦しい口の利き方。

　これもリリアナの個性だと、エリカは微笑して受うけ容いれた。

　容姿といい知性といい申し分のない素そ養ようを持ちながら、銀髪の幼なじみには貴婦人たらんという意志が決定的に欠けている。彼女はよき騎士、よき妻、よき母にはなれても、宮廷の花となりサロンの女主人となることは決してあるまい。

「ええ。まさにあなたの言うとおりよ、リリィ」

「くっ……言ったそばから、いけしゃあしゃあとなれなれしく」

　己おのれの流儀を変えないエリカも、渋じゆう面めんを作るリリアナも、目的は同じだ。

　イタリア北部で叙勲を受けた新米の騎士は、このサン・ジラルディーノ修道院で愛用の剣を贈ってもらうのが慣ならいなのだ（もっとも、名門の七結社に属する騎士のみだが）。

　騎士が持つべきとされる武具は特殊だ。

錬れん金きん術じゆつによって錬成された鋼はがねを名工が鍛きたえ、研とぎ澄すまし、そのあとでふたたび錬金術によって刃を強化された——そういう刀剣や槍やりこそが尊とうとばれる。

この修道院は古来、若き騎士に然しかるべき刃をあたえ、祝福を授ける聖域であった。

メディチ家がフィレンツェで絶頂期を迎えたルネッサンスの頃には、すでにこの事業をはじめていたらしい。

「本日はわざわざお招きいただきましたこと、厚く御礼申し上げますわ。エリカ・ブランデッリ、図ずう々ずうしくも参上いたしました」

近づいてくる修道士に気づき、エリカは優ゆう雅がに一礼した。

今日は騎士として訪れたわけだが、武ぶ骨こつな所しよ作さは見せられない。

エリカ・ブランデッリは強く猛たけ々だけしいだけでなく、優美でエスプリに満ちていて、常に一座の主役であるべきなのだ。

「クラニチャール家の長女、リリアナと申します。宜よろしくお願いいたします」

対してリリアナは、愛あい想そにも自己主張にも欠ける挨あい拶さつをした。

魔女の素養を持つ騎士という、エリカを凌しのぐ潜在能力の持ち主ながら、彼女はどこまでも一いつ介かいの武人たらんと振る舞う。

「ミラノにふたりの神童ありという風ふう聞ぶんは、かねてより耳にしておりました」

修道士の黒こく衣いをまとった壮年の男が、対照的な二少女の挨拶へ冷静に答える。

ゆったりとした衣装の上からでもわかる、鍛きたえ抜いた肉体だ。

こちらへ近づいてきたときの足取り、身のこなしからは並々なら

ぬ武芸のたしなみも見て取れた。さすが『剣』の修道院を預かる者ということか――。

「名家のご息女ふたりが衆にすぐれ、才気に富とむのはよろこばしき話。当院はお二方の叙勲を祝い、栄誉ある騎士道の道連れとしてふさわしき武具を進呈いたしましょう。いずれ、我らが先せん達だつたる聖ラファエロの事じ績せきに倣ならわれんことを――」

「は。その御言葉に添そえるよう、精しよう進じんを重ねます」

　修道士の恭うやうやしい言葉に、リリアナは頭こうべを垂たれる。

　まじめな彼女らしい返答だ。しかし生き真ま面じ目めの美徳と縁のうすいエリカは、もっと興きよう趣しゆに富とんだことを言ってみたい。

「わたしどものような未熟者に対して、ありがたき仰おおせ。感動いたしましたわ。……ところで聖ラファエロの事績に倣いとおっしゃいましたが、よろしければ、まずこの『剣の祝福』において倣わせていただくのも一興かと存じます」

「ほう？」

　修道士は、初めて感情を見せた。今の恭しい大たい言げんに、微苦笑をこぼしたのだ。

　そして、隣のリリアナは柳りゆう眉びをひそめた。

「待てエリカ、何か恥知らずなことを言うつもりだな⁉」

「まあリリィ、それは悪意に富んだ邪じや推すいだわ。いい、修道士さまはわたしたちに『聖ラファエロを範はんにせよ』とおっしゃったのよ？　偉大な女剣士、『聖なる杯さかずきの騎士の位階』を授かり、最高位のテンプル騎士となった彼女に倣えと」

　エリカたち《赤銅黒十字》の筆頭騎士を示す称しよう号ごうが『紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソ』。

『聖ラファエロ』も同種の称号だ。

　フィレンツェの結社《百ゆ合りの都》で、最も武勇すぐれる騎士

に贈られる。しかも当代の聖ラファエロは女性であり、現役を退しりぞいてひさしいとはいえ、いまだに欧州最高と評される剣士でもあった。

「聖ラファエロはその剣技のみごとさゆえに、普通は一振りのみ授かる『剣』を特別に二振りも賜たまわったというのが、この修道院の伝説だとうかがっておりますわ」

「左さ様よう。『獅し子しと匠たくみの双剣』ですな」

　なめらかなエリカの語りに、修道士の微苦笑がより大きくなる。

　ついでにリリアナも完全な怒り顔になり、憤ふん然ぜんとにらみつけている。

「ならばエリカ卿きよう。聖ラファエロの故事に倣い、あなたにも二振りの剣を授けよと？」

「バカなッ。かの偉大な騎士殿に己をなぞらえるなど、不ふ敬けいもいいところだ！」

「――いいえ。いくら何でも、それは分不相応というもの」

　彼らの反応が、エリカの美び貌ぼうに悪魔的な微笑を浮かべさせる。

　人の意表を突き、誰もが予想しなかったことを成してこそエリカ・ブランデッリなのだ。

「数年前、引退を決めた聖ラファエロは、賜たまわった双剣と共に当院を訪ね、こうおっしゃったと聞きます。『この双剣は老いた我と共にあるよりも、若き騎士の冒険を助けるさだめこそがふさわしい』と」

　そして、名高き二振りの魔剣を返還したとも。

「そうと知る以上、エリカ・ブランデッリは盟友リリアナ・クラニチャールと共に、双剣の新たな担にない手てとして名乗りをあげたく存じます」

　華麗な言い回しで、要望を訴える。

老ろう齢れいの聖ラファエロは、だいぶ前から表舞台に出なくなっていた。

（たしかイタリア最高の魔女、ルクレチア・ゾラなどと同世代だったはずだ）

彼女の『引退』にまつわる余よ話わ。いつか欧州各地の上位魔術師についての情報を集めたとき、聞きおよんだ話だった。

「聖ラファエロと同じく二振りも剣をいただくのでは、リリアナ卿のおっしゃるとおり僭せん越えつが過ぎましょう。しかし、偉大な先せん達だつの遺のこせし双剣を一振りずついただくのであれば、我らの分を超えることもございませんわ。どうぞ御一考を」

どうせ剣を授かるのなら、よい品が欲しい。

最初からエリカは、この申し出をするつもりだった。片棒をかつがせようかと考えていたリリアナが居合わせたのも、ちょうどよかった。

ちなみに銀髪の旧友にしてライバルは、渋面のままだった。

エリカの計画に乗るのは癪しやくだが、聖ラファエロの双剣は激しく魅み惑わく的——そんなことで悩んでいるのだろう。

「なるほど、エリカ卿のご要望は承うけたまわりました」

修道士の苦笑は、完全な笑いになっていた。さあ、どうなる？

名高い『獅子と匠の双剣』がふたたび世に出たとはいまだ聞かない。すでに新たな使い手に贈られていて——という可能性は低いはずだが。

「ですが、実はあなたもご存じでない条件がございます。あの御方は、フィレンツェの近くに隠いん棲せいされましてな。そこで当院は提案いたしました。——双剣を今ひとたびだけ、お預けしたい。そして、新たな担い手たらんと欲する者を聖ラファエロ自みずからが検分され、御おん身みの伝説を継ぐに足る者ならば進呈されてはいかがか、と……」

なるほど。かの聖騎士と直に対面し、器量を認めさせればいいのか。

　エリカが不ふ遜そんにうなずく横で、やにわにリリアナが勢い込んだ。

「何てことだ……聖ラファエロに直接お会いできるうえに、あの方の魔剣を受け継ぐチャンスまでいただけるなんて——。ぐずぐずするなエリカ、早く行くぞ！」

「どうしたのリリィ、いきなり張り切りだして？」

　予想外に興奮している旧友に、エリカは鼻はな白じろんだ。

「わたしはかねてより聖ラファエロを尊敬し、あの方と同じ道を歩みたいと望んでいたんだ。あなたの奸かん計けいに乗せられるのは気にくわないが、この際かまわないッ。すぐ会いに行こう！」

「…………まあ、そうだったの」

　思わず引いてしまうほど、リリアナは熱心だった。

　銀髪の旧友は、おおむねエリカの計算どおりに判断し、行動する。

　そのため割とかんたんに出し抜けるのだが、たまにこちらの思惑を超える。そういうときのリリアナは、エリカでも容易には攻略できない。単純なようでいて完全に読み切れない、意外と難なん儀ぎな娘だった。

「それで修道士殿。聖ラファエロはどちらにお住まいなのですか？」

「さて……？　実は、私どもも存じ上げません」

　リリアナの性急な問いに、修道士はいたずらっぽく答えた。

「その程度のことは、自みずから調べ上げてみせろと聖ラファエロはお考えのようで、私どもにもご隠居先については教えてくださらなかったのです」

「あら……意外と面倒なことをおっしゃる方なのですわね」

　思わぬ足あし枷かせに、エリカは挑戦的に微笑した。

　フィレンツェ近郊の田園地帯には、さまざまな村や街が点在する。そのどこかに住む、顔も本名も知らない女性を捜し出す。
ちょっと厄やつ介かいな作業だ。

　だが望むところだった。その程度の面倒、いくらでも越えてみせる。

「わたしたち以外に、双剣を授かろうとした者はいなかったのですか？」

　リリアナがふたたび修道士に訊たずねた。

「何人かはおりました。しかし、そのほとんどが聖ラファエロを捜し出すところで上う手まくいかず、諦あきらめてしまいましたが」

「ほとんど……ということは、例外もいたのですね？」

「ええ。ひとり、とんでもない阿あ呆ほうがおりまして。そやつは双剣の継承を望んだのではなく、単に聖ラファエロにお会いしたかっただけなのですが」

　修道士は初めて謹きん厳げんな物言いを崩し、『阿呆』などと言った。

「剣術の方は、実に巧たくみでした。ええ、あれほど器用な使い手はまったく見たことがないというほどに。ですが、魔術の方がまったくダメで。あまりに実力が不足していたため、最初から継承者候補とも見なされなかったのです」

　なるほど。エリカはうなずいた。

　とにかく、見つけ出すことに成功した者はいるのだ。

　ならば、自分にも必ずできる。口元が自然と華やかな形に歪ゆがんだ。

　貴婦人の微笑でも、人を陥おとしいれる悪魔の笑みでもない。言うなれば雌め獅じ子しの笑顔。困難と冒険に挑いどむ、美しき女騎士にふさわしい表情だった。

　――ここで、思わぬ闖ちん入にゅう者しゃが現れた。

　修道院の門をくぐり、ひとりの青年が入ってきたのだ。

　ボサボサに乱れた金髪。顔立ちは整っており、なかなかのハンサム。しかし、おそろしく憔しよう悴すいしており覇は気きに欠ける。体つきはすらりとしていたが、かなり鍛きたえ込んでいる模様。

　歳とし頃ごろは二〇前後。ジェンナーロ・ガンツと同世代だろう。

　半袖のＴシャツに綿のパンツというラフな格好は、あちこちほつれている。文字通りにボロボロの状態だった。

　こんな青年が、力ない足取りでよろよろ歩いてくる。

「あの男は……なんて偶然だ。まさか、一年ぶりにやってくるとは」

　ぼそっとつぶやいて、修道士は青年に寄っていく。

　その様子にリリアナが訊ねた。

「彼はこちらの関係者なのですか？　修道士の方には見えませんが」

「いいえ。ですが、今の話と関係のある者です。例のとんでもない阿呆ですよ。何しろヤツは近隣の人里を次々と歩きまわって、見かけた女性全て――少女から老ろう婆ばまで見み境さかいなく木の枝で斬きりかかったのです。一七〇人目でとうとう剣を避けられ、それが聖ラファエロだった……という見つけ方をした、ど阿呆ですから！」

　まあ、打ち込みは全部寸すん止どめで、怪け我が人にんを出さなかったことだけは賞しよう賛さんに値あたいしますが。

　と、修道士は嘆たん声せいを付け加える。

　リリアナは「ハァ？」と呆あきれ顔になり、エリカもバカな男だと思った。よく暴ぼう漢かんとして警察に捕まらなかったものだ……。

　しかし、その手があったかと意表を突かれたのも事実だ。

彼女でさえ——否いな、才さい気き煥かん発ぱつなエリカだからこそ、こんなバカげた発想には至らない。

「おい、どうした!?　一体、何があったんだ!?」

修道士に呼びかけられても、青年は答えなかった。

代わりにバタンと前のめりに倒れる。気を失ったようだ。あわてて修道士は駆け寄り、青年の体のあちこちにふれて診断をはじめた。

怪我か、それとも病気か？　しかし、どちらでもなかった。

青年の腹から『グウゥゥゥゥッ』と大きな音がしたからだ。倒れるほどの空腹だったのか。

「あいかわらず人騒がせな……。ん？　何だ、この傷きず跡あとは？」

腹の音に呆れて修道士はつぶやき、すぐに目を瞠みはった。

視線の先には、診断のために服を脱がせた上半身がある。青年の右腕と肩の境目には、赤黒く大きな傷跡があった。

まるで付け根から断たれた右腕を、溶接して接つぎ直したような——。

おそろしく異様で、禍まが々まがしく、そして、どこか神こう々ごうしくも見える不思議な傷跡だった。

3

「いやー、すっかりごちそうなっちゃって、本当にありがたいなァ」

がつがつと飲み、かつ喰くらいながら、青年は脳天気な声で言った。

修道院の簡素な厨ちゅう房ぼう。作業用テーブルの大皿に、トス

カーナ地方独特の硬いパンがどかんと盛ってある。

　あとはこの村で醸じよう造ぞうされたのだろう、ラベルなしの壜びんに入った赤ワイン。

　どちらも修道士が提供してくれたものだ。

「で、ありがたいついでに言わせてもらうと、ここに肉や野菜が加わると申し分のない昼食になるのかな。今の僕に必要なのは、炭水化物だけじゃないはずだから……」

「残念ながら、今日はちょうど食材を使い切っていてな」

　答える修道士は、エリカたちに対するものとは異なる、ぞんざいな口調であった。

「おまけに買い出しにも行ってないのだ。諦あきらめろ。……それよりおぬし、今までどこで何をしておった？　一年前、聖ラファエロを見つけ出したあと、しばらくあの方の弟で子しのようなことをやっておったくせに、一ひと月つきほどで姿を消しおって」

「ははあ……なるほど、僕はそんなことをこの辺でしてたのか」

「あいかわらずまじめな話のできない男だな！　もっと真剣に答えろ！」

　とぼけた様子の青年に、修道士は呆あきれているようだ。

　しかし、当の彼はまったく感かん銘めいを受けなかったようで、平然とナプキンで口をぬぐう。

「僕は僕なりに真剣なんだけどなァ。ま、それはそれとして、そろそろ行かなくちゃ」

「何だと？」

「今の僕が最優先にすべきなのは、体調を速すみやかに回復させることだから。いろいろなご親切には、いずれたっぷり感謝の意を表明させていただくとして……。もっと食糧の充実したところに行かないと」

　青年は立ち上がり、早足で厨房の外へ歩きだした。

「じゃあ、僕はこの辺で。ごきげんよう！」

　青年の歩みは、そよ風のように軽やかだった。

　呼び止められても、きっと足を止めないだろう。静観していたエリカとリリアナは、すばやく目配せを交わした。

「修道士さま、わたしたちもひとまず失礼いたします」

「いずれ聖ラファエロのお許しを得て、双剣と共に帰って参りますわ。そのときにはどうぞ、わたしどものために祝福をお授けくださいませ」

　ふたりの新米騎士は同時に席を立ち、それぞれの挨あい拶さつを口にした。

　リリアナは律りち儀ぎに堅苦しく、エリカは華やかに貴婦人らしく。壮年の修道士は、健闘を祈ると言わんばかりに苦笑した。

「いくさ場では拙せつ速そくが巧こう遅ちに勝まさるもの。幸運を逃すまいと迅じん速そくに動く意気、良しと言えましょう。ですが、あの男は阿呆がいきすぎたせいで、極きわめつけの大物でもある輩やからです。振りまわされぬようにお気をつけあれ！」

　その言葉に見送られて、ふたりは修道院から駆け出していった。

「ねえ待って！　あなた、一体どちらへ行くつもりなの!?」

　エリカは、先を行く青年に呼びかけた。

　農村の田いなか舎道みちを軽快に歩いていた彼は、金髪を揺らして振り返る。

「えーと……ごめん、君たちはどこのどなただい？」

「わたしは《青せい銅どう黒くろ十じゅう字じ》の騎士リリアナ・クラニチャール。こちらは《赤しやく銅どう黒くろ十じゅう字じ》のエリカ・ブランデッリだ」

「ふうん。どこかで会った気もするけど、勘かんちがいかな」

　リリアナの名乗りに対して、青年は首をかしげながら言った。

「ど、どこかでも何も」

「さっき修道院で会ったばかりよ。わたしたち、修道士さまのそばにずっといたもの」

「ああッ。それで見覚えがあったのか！」

　青年は飄ひょう々ひょうとしているが、ふざけているようには見えなかった。

　まさか本当に、数分前に見たばかりの顔を覚えてないのだろうか？

「悪いね。僕は人の名前や顔を覚えるのが苦手な方――だと思うんだ。そんな感じの記憶があるような、ないような」

「自分のことを他ひ人と事ごとのように言うのは、いかがなものかと思うのだが……」

「まあまあ。人間、意外と自分については客観的に見られないものさ。だから、そういう訓練を積んでおくのも悪くないものだよ」

「だとしても、たかだか五分前の記憶があやふやなのは、問題があるだろう！」

　青年の不ふ真ま面じ目めさに、まじめなリリアナが怒っている。

　だが、こんな会話ばかりでは先に進めない。

「あなた、もっといろいろ食べたいとおっしゃってたけど、具体的にはどちらへ？」

「うん。そこを今、考えていたんだけどね」

　出しゃばって質問したエリカに、空腹を訴えていた青年は言った。

「実は僕、すごく貧乏みたいなんだ。ポケットを全部調べても、あまりお金が出てこない」

「まあ、そうかもしれないとは思っていた」

　相手の格好を眺めて、リリアナはうなずいた。

　彼はＴシャツと綿パンのみで、着きの身み着きのまま。バッグのひとつも持ってない。そもそも十分な現金があれば、ここまで飢うえないはずだ。

「だから、文もん無なしでも腹を満たせる完かん璧ぺきなプランを考えてみた。いいかい、まずこの辺りをぶらついて、地元住民を見つけるんだ。そこで僕は、彼ないし彼女の名前を呼ぶ」

「……この辺りに知り合いは多いのか？」

　目の前の青年、結構なダメ人間なのでは？

　明らかにそう疑っている目で、リリアナは相づちを打った。

「いいや、全然。でもいいんだ。フランチェスコでもジョアンナでも、適当な名前を呼べばいい。昔からの知り合いと勘ちがいした……ということにして。きっかけを作って話しかけたら、そのまま仲良くなる。会話は大いに盛り上がる。時間も経たつ。喉のども渇かわくし腹も減る。で、僕はおもむろに彼ないし彼女の家に上がり込み、食事をごちそうになればいい！」

　完璧な計画だろう？　と、青年はおめでたく締めくくる。

　エリカはこほんと咳せき払ばらいして、申し出た。

「だったら、もっと手っ取り早い方法があるわ。もしよかったら、あなたにはわたしたちといっしょに近くの食堂へ入る——そういう選せん択たく肢しもあるのだけど」

　というわけで、三人は村の食堂に腰を落ち着けた。

　注文して待つことしばし。トマトソースのパスタ、キノコとチーズのピッツァ、ウサギ肉と牛肉のフライ、牛モツの煮込み、大盛りサラダ、赤・白・ロゼのワインひとそろい、炭酸入りミネラルウォーターなどがテーブルに並ぶ。

　それらの料理は、ほとんど金髪の青年がたいらげた。

　倒れるほどの空腹で苦しんだ人間は、消化のいいメニューで胃をいたわるものだ。

　しかし、青年はチーズも肉も揚げ物もアルコールも、分わけ隔へだてせずガツガツ喰らい、グビグビ飲んだ。よほど胃腸が強きよう靭じんらしい。修道院の厨房で、石のように硬いパン（普通、ソースや肉汁につける）を平然とたいらげていた時点で明らかではあったが。

「うんうん。これでこそ生きてるって感じだねェ！」

　と、青年は笑って言い切る。

　人なつっこい陽気な笑顔が、どこか怪物めいて見えるから不思議だ。

「ところで、あなたの名前を教えていただけないか？」

　リリアナが訊たずねたのは、彼がひとしきり食べ終えた頃だった。

「……名前？」

「ああ。聖ラファエロの薫くん陶とうを受けていたのなら、あなたもやはり騎士なのだろう？　そして、こちらが本題なのだが、あの方の——あなたの師し匠しよう殿の居場所を教えて欲しい」

「師匠？　居場所？」

「そうだ。わたしたちは是ぜ非ひ、聖ラファエロにお会いしたいんだ！」

　熱っぽくリリアナが訴える。さて、どんな答えが返されるものか？

　傍はたで聞いていたエリカは、皮肉っぽく肩をすくめた。

「聖ラファ……なんとなく聞き覚えのある名前だなあ。その人、僕の師匠って本当？　で、僕の名前か。名前……名前ねえ」

　青年は素すっ頓とん狂きようなことを言い出した。眉み間けんにしわを寄せ、考え込んでいる。

「そろそろふざけるのはやめて欲しいぞ。まさか己の名まで忘れたわけでもないだろう!?」

「いや。どうも、そのまさかみたいなんだ」

　リリアナの追及に、青年はまじめくさった顔をしてみせた。

「僕、記憶喪そう失しつっぽいんだよね。自分の名前も、今まで何をしていたのかも、さっぱり思い出せない。どうしたものかなァ？　この辺で何かやることがあったって、ぼんやりと覚えてはいるんだけどね」

　結局、青年にたっぷりおごっただけで、食堂での面談はお開きになった。

「ありがとう、君たち！　神様の御ご加か護ごが君らの上にあるといいね！」

　いけしゃあしゃあと、青年は去っていく。

　一二歳の少女たちにおごられて、まったく悪びれない。

　あの修道士が『阿呆』と繰りかえし、『大物でもある』と評すのも、わかる気がする。よほど図太い性格なのだろう。

「……エリカ。あなたにしてはずいぶんと無口だったが、どういうつもりなんだ？」

　食堂の前から、スキップするような足取りで青年が去っていく。

　それを見送ってから、リリアナが訊ねてきた。

「あらリリィ、お見通しだったの？」

「当たり前だ。あなたが何の思惑もなしに、釣つった魚を放流するはずない。さっきはほとんど黙ったまま、あの男が食べ終わるのを見ていただけだったろう？」

　旧友の指摘に、エリカは微笑した。

　さすがは我がライバル。何だかんだで、こちらの思惑を見切って

いたか。

「ねえ。わたしが途中で席を立ったの、覚えてる？」

「ああ。まさかあのとき、何か悪さのタネを仕込んでいたのか？」

　青年が一心不乱に食事しているとき、エリカは適当に口実を作って席を離れたのだ。

「結果だけを言うなら、ノーよ。あのときはこっそり離れたところから、あの食いしん坊さんに『眠り粉』の魔術をかけてみたの」

　これは、名前どおり対象者を眠らせてしまう術である。

　さまざまに応用の利きく便利な魔術だが、無警戒な者にしか効果を発揮しない。普通は眠気が襲ってきても、ハッと我われに返る。

　しかし、あんな調子で暴飲暴食している最中なら、問題ないはずなのだ。

「あれだけ無防備なら、かんたんに眠らせられるはずでしょう？　意識を奪ってから催眠術でも使って、情報を聞き出せばいいと思って。かなり癖くせのある性格のようだから、まともに交渉するより手っ取り早いはずだし」

「あいかわらず油断も隙すきもない女だな。だが、その目もく論ろ見みは失敗した」

「ええ。どうやったのかは不明だけど、彼はわたしの術を完璧にはじいてくれたわ」

「対抗魔術でも使ったのか、それとも結界で護身したのか……どちらだ？」

「それも不明。でも、修道士さまが『まったくダメ』と言い切るほど、魔術の素養はないはずなのよね、彼。なのに、エリカ・ブランデッリの術が効きかない……」

「まさか、あのバカげた態度が全て芝居だとでも？」

「だとしたら、彼は本当に曲くせ者ものよ。そうは見えないから困るのだけど」

弱じやつ冠かん一二歳とはいえ、エリカは人を見る目には自信があった。

だが、あの青年に対しては、その自信がぐらぐら揺らいでしまう。数多くの騎士を見てきたはずの修道士に『阿呆』呼ばわりされる男。エリカ自身にも、とても『爪つめを隠している能ある鷹たか』とは思えない男。

しかし、彼はみごとエリカ・ブランデッリの思おも惑わくをぶち壊してくれた。

「それでエリカ、具体的にはどうやって彼から情報を引き出す？」

「こういうときこそ、あなたの出番よ、リリィ。一ひと月つきくらい前に『魔女の目』の術を覚えたって言ってたじゃない？」

「もしかして、『魔女の目』であの男を追いかけろというのか？」

もちろん。うなずくエリカを見て、リリアナは天を仰あおいだ。

「せっかくの千せん里り眼がんを、下品な尾行のために使えと？」

「視覚を出張させて、遠方を偵察する術は他にもあるけど……魔女たちの目にかなうものはないわ。ここはしっかり利用させてもらわないとね」

魔女の資質を持つ者にしか使えない『魔女術』。

遠方に己の視覚を出張させ、自在に動かす『魔女の目』もそうだ。他の魔術大系にも同種の術はある。だが、『魔女の目』ほど速く動く千里眼はない。この術が、意外にも尾行に役立つゆえんであった。

エリカが食堂から借りてきた大皿に、水を張る。

この食堂兼居酒屋の軒のき先さきには、外で食事を楽しむためのテーブルと席もある。

そこにふたりは陣取った。さっきの大皿を置き、リリアナがテーブルに着き、『魔女の目』を飛ばすために目をつぶる。

程ほどなく大皿の水に、あの青年が映し出された。

リリアナが『魔女の目』で視みたものを念写したのだ。

例の青年は、広場で暇ひまそうなおじさんと意気投合していた。初対面だ思われるのに、青年とおじさんはもう肩を抱き合い、数年来の親友のように盛り上がっている。

青年がおじさんの耳元に何か吹き込み、拝おがみ倒す。おじさんはすぐに笑いだし、ついてこいと身振りで指示。

ふたりはそのまま車に乗り、いずこかへ向けて走り出した。

「リリィ。どこまで行くのか、彼が降りるところを確認して！」

魔女の千里眼『魔女の目』は、自動車のスピードに追いつくこともできる。

それを見こんでの指示であった。

「わかった。だが、わたしたちはどうやってそこまで？」

「安心しなさい。このエリカ・ブランデッリに、あの人がしたのと同じ真ま似ねができないわけがないでしょう？」

自負心を込めて、エリカは言い切った。

4

サン・ジミニャーノの街は中世の街並みをそのまま継けい承しょうしており、世界遺産でもある。

街のあちこちに中世の塔とうが建っている。その数は全部で一四。

フィレンツェからも近く、車で一時間もかからない距離だ。かつては花の都フィレンツェと永遠の都ローマを結ぶ要よう衝しょうとして栄えていた。

　今日では歴史的建造物を活いかして、観光名所となっている。

　そして、自じ称しよう記き憶おく喪そう失しつの青年がヒッチハイクで連れてきてもらった街でもあった。

「さあリリィ、あの人のところに行きましょう。まだ見失ってはないわよね？」

「ああ、大丈夫だ。……あの男、いきなり塔に登っていったぞ。観光で来たわけでもないだろうに、何をするつもりなんだ？」

　街の入り口でもあるサン・ジョヴァンニ門。

　一三世紀に造られた、由ゆい緒しよある建築物だ。その前で騎士たちはささやき合った。

　尚なお、リリアナはさっきの村から、ずっと目をつぶったままだ。『魔女の目』を使うときは、本来の目を閉ざさなくてはならないのだ。

　この状態の旧友をエスコートしながら、エリカは要領よく立ち回った。

　村で見つけた暇ひまそうなおじさんに頼み込んで、車を出してもらう。

（イタリアの田舎いなかには、この種のおじさんが不思議と多い。イタリア人であれ外国からの観光客であれ、若い女性を見つけると義務のようにナンパする。真まっ昼ぴる間まから仕事はどうした等のツッコミは、彼らには通用しない）

　車中ではおじさんと社交的に語らい、短い道中に彩いろどりを添そえる。

　目をつぶったまま無言を通すリリアナは『体調がすぐれず、気分が悪いのだ』と説明。

　こうしてエリカたちは、上う手まいこと青年を追いかけてきたのだが。

「――何だ!?　あの男、一体何をした!?」

いきなりリリアナが叫び、ずっと閉ざしていた目を見開いた。

「どうしたの、リリィ？　異常事態のようね」

「ああ。あの男、のんきに塔のてっぺんにまで登って、まわりをきょろきょろ見回していたんだが……いきなり『魔女の目』が破られた」

「対抗魔術？　それとも妖精博士フエアリードクターの使う『幸運の加護』とか？」

「勘かんで言わせてもらえば、そのどちらでもないな。おそらく魔術ではない……妖精や魔神の類たぐいが使う、呪じゆ力りよくか霊力のような感触だった。あの男が最後に、右手を軽く振ったようにも見えたんだが――」

リリアナの説明に、エリカは目を丸くした。

ど阿呆呼ばわりされる青年は、やはり切り札を隠していたのだ。

「気になる話だけど、今はあの人を見失わないことが優先事項ね。リリィ、彼の居場所へ急ぎましょう！　場所はわかる？」

「ああ、あっちの広場の方だ。ついてこい！」

ふたたび『魔女の目』を使っても、同じことになっては仕方ない。

リリアナが先に走り出し、エリカもすぐ後ろを追走する。

丘の上に造られたサン・ジミニャーノの街は、中心地に向かうほど標高が高くなり、坂道を駆け上がることになる。

それでもふたりは息ひとつ切らさず、道行く人たちを軽かろやかにかわしながら駆けた。

やってきたのはドゥオモ――大聖堂のある広場だった。

一定規模以上のイタリアの街なら、必ず有する荘そう厳ごんな聖せい域いきだ。

たいてい街の中心となり、重要な施設も近くに並び立つ。外国人

向けの観光資源にもなってくれる。サン・ジミニャーノでもドゥオモ広場には、市庁舎でもあり美術館でもある中世の建築物があった。

　また、街のシンボルともいえる塔が七つも。

　これらに登ってサン・ジミニャーノ近隣を見下ろすのは、定番の観光コースだ。

　そうした塔のひとつから、ちょうど例の青年が出てくるところだった。エリカとリリアナはうなずき合ってから、彼に近づいた。

「ずいぶんとつれない真似をなさるのね！　記憶の方は取り戻せたのかしら!?」

「……ああ、さっきの。何とかいう女の子たち」

　大声で呼び止めたエリカに、青年は平然と顔を向けた。

　ここまで人の名前に頓とん着ちやくしないとは驚きだ。

　エリカもリリアナも、ずいぶんと印象的な美少女のはず。すぐに顔と名前を覚える人間の方が、そうでない者より遥はるかに多いのだが――。

「記憶喪失さんに質問させていただこうかしら。わたしたちを聖ラファエロに会わせたくないようだけど、なぜ？　あなたに何か都合が悪いことでも？　……もしかして、わたしたちにあの双剣を授からせたくないの？」

　挑いどみかかるように問いかけた。

　さっきの食堂では、エリカもリリアナも自分たちの目的を口にしなかった。

　しかし、あの修道院に居合わせた若き騎士が聖ラファエロとの面会を望むのだ。その弟で子しともなれば、おのずと理由は察しがつくはず。

　だから彼は愚おろか者のふりをして、手がかりをあたえまいとしたのか――。

「あなたのおかしな言動に説得力のある理由を求めるなら、それがいちばん妥だ当とうよね？」

　本当は、聖ラファエロの居所まで泳がせるつもりだったのだが。

　だが、相手に魔術が通じないのなら方針変更だ。

　そういう相手ならば、真っ向勝負に限る。エリカはオさい知ちに長たけた少女だが、最終的にはやはり正面突破を好む武人の魂たましいの所有者なのだ。

　しかし、この真っ向勝負は、劇的な結末には至らなかった。

「いやいや。勘ちがいしているようだけど、僕は本当に聖なんとかって人のことは覚えてないんだ。……あ、いや待てよ。その名前を聞くと、なぜか馬のしっぽを思い出すな」

　と、青年は思案顔で言った。馬のしっぽ？

　ふざけた韜とう晦かいにエリカが眉まゆをひそめると、リリアナが口をはさむ。

「じゃあ、あなたはなぜこの街に来たんだ？　記憶を失っているのだろう？」

「うん。でも、なぜか塔がたくさんある街で、会いたい人に会える気がしたんだよね。さっきの村で知り合ったおじさんに、そういう場所を知らないかって聞いたら、この街に連れてきてもらえて——」

　青年は、中世の景観を遺のこす街並みをなつかしげに見まわした。

「で、たしかに見覚えがある感じなんだ。試ためしに高いところに登ってみたら、ちょっと気になるところも見つけられたし」

　今まで巧たくみにとぼけてきた彼が、いきなり重要そうな発言をする。

　その都合のよさに、エリカは身がまえた。何かの罠わなか？　自分とリリアナをあやまった方向に誘導するつもりか？

「ねえ君たち、よかったら僕といっしょにそこへ行ってみないかい？　僕が本当に君らの捜してる人の関係者なら、その人の手がかりが見つかるかもしれないだろ？」

　しかし青年は、さらに都合のよい申し出をしてきた。

「願ってもない話だが、どうして……？」

　怪け訝げんそうなリリアナに、青年はひどくシリアスな表情で答えた。

「さっき塔の入場チケットを買ったら、一いち文もん無なしになったんだよね。ちょっと手持ちが足りなくて、受付のおばさんを拝おがみ倒して一ユーロまけてもらったし。そういうわけだから、僕には今後の活動を助けてくれる仲間が必要なんだ！」

　そういえば、サン・ジミニャーノの街は観光地だった。

　塔や美術館といった場所の多くが、些さ少しようとはいえ入場料を徴ちよう収しゆうするはず。

（ちなみに街によっては、公共の場であるべきドゥオモの入場まで有料なときもある）

　好都合な申し出に、エリカは悩ましい思いで頭を振り、滅多にしない行動に走った。

　リリアナの耳に唇くちびるを寄せ、相談を持ちかけたのである。

（……ねえリリィ、この人をどう思う？　さっきまで『愚おろか者もののふりをした曲くせ者もの』だと思ってたのだけど、今は『見た目も中身も首しゆ尾び一いつ貫かんして愚か者』に思えて仕方ないの）

（奇遇だな。実はわたしも、その可能性を疑いはじめていた）

　やはり滅多にないことに、リリアナもエリカの意見にすぐさま賛同した。

（まあ、怪しいところは多いけど、この好機を見逃す手はないわね）

（ああ。虎こ穴けつに入らずんば——というやつだな）

　最悪、この曲者ないし愚か者が相手なら、どうとでも切り抜けられそうな気もする。

　かくして少女たちは、虎穴の虎こ児じを狙ねらうべく意思統一した。

「わかったわ。じゃあ記憶喪失さん、ここからはいっしょに行きましょう。気になるところとやらまで案内してくださる？」

「もちろんさ！　こっちの方向だったかな？」

「ところで、ひとつだけ確認させて欲しい。あなたはさっき、わたしの『魔女の目』に気づいて、みごとに破ってくれたな。一体どうやったんだ？」

　エリカの要請にうなずいた青年へ、おもむろにリリアナが訊ねた。

　そうだ。魔術がまるでダメなはずの青年に、そんな芸当がなぜ可能なのか？　どうしても知っておきたいところだ。

「あー。誰かに観みられてるなって気がして落ち着かなかったんだけど、君たちだったのか。あれはね、どうせ何かの術だろうと思って、これを投げたんだ」

　と、青年はポケットからフォークを取り出した。

　何の変へん哲てつもない品物。色は銀だが、どうせステンレス製だろう。

「正確には、これといっしょにちょろまかしたナイフの方だけど。何かの役に立つかもって、実はさっきの食堂でいただいておいたのさ」

　言われてみれば、フォークの意い匠しように見覚えがある。

　しかし、どこで調達したものであれ、食卓用のナイフやフォークに魔術を打ち破る恩おん寵ちようがあるはずない。エリカは鋭く訊ねた。

「それは、ナイフに魔力を込めて何らかの魔術破りをしたという意味？」

「いいや。ああしたら術も斬れるんじゃないかって、なんとなく思っただけなんだ。僕はあんまり魔術とか得意じゃないはずだから、特にややこしいことはしてないよ。うん、本当にただ斬ってみただけで」

　これも青年一流の韜とう晦かいなのか。

　あるいは、ただ言葉足らずなだけなのか。エリカはため息をついた。

　これほど性格の掴つかめない男は初めてだ。人あしらいの上う手まさには絶対の自信がある。だというのに、彼の手た綱づなを握れる自信がわいてこない。

　リリアナと目配せし合い、青年への呆あきれと賛さん嘆たんを共有するエリカだった。

　記憶喪失の青年は、順調に大通りを歩いていく。

　観光客向けに商売する飲食店や販売店がひしめく界かい隈わいである。だが、ここで青年の足取りが不意に止まった。

　彼の視線は、すぐ先にあるみやげもの屋に向けられていた。

「この店が『気になるところ』なのか？」

「ちがうよ。でも、ここはここで気になるな……。ちょっと寄ってみよう！」

　リリアナに答えるなり、青年はみやげもの屋に入っていく。

　仕方なく、ふたりの少女もあとに続く。

　民芸品や絵はがきなど、定番のみやげものを扱っている店だった。こういう店の品揃えを楽しむ趣味は、エリカにはない。リリアナも同じだろう。ふたりが無感動に店内を見まわしていると、青年は「ああ、やっぱりあった！」と目を輝かせた。

彼が向かった一角では、たくさんの武器が壁にかかっていた。

長剣、短剣、楯たて、戦せん斧ぷ、弓と矢など——。

中世のいくさ場で振るわれたであろう、古典的な武器の数々だ。

もっとも、あくまでみやげ用のレプリカである。中世の街並みが売りの観光地なので、扱っているのだろう。日本刀のレプリカまであり、節操のない品揃えだった。

「これこれ。こういうのがあればいいなって思ってたんだ！」

青年が手に取ったのは、一振りの長剣だった。

もちろんレプリカなのだが、非常にしっかりとした造りだ。

本物の剣を造るときは、まず溶とけた鋼はがねを鋳い型がたに流し込み、成形する。それが冷えたら刃の部分を研とぎ、実際に切れるようにする。

この剣は、刃を研いでないだけの模造刀だった。

だから、重さといい形状といい本物にそっくり。かなり出来のいい品だ。

「……でも偽にせ物ものよ、これ？　あなたの役に立つとは思えないけど」

エリカは冷めた声で言った。リリアナも横でうなずく。

しかし、記憶喪失の青年は首を横に振り、

「そんなことはないさ。そもそも、剣に偽物も本物もないよ。あるのは上う手まいか下へ手たか——使う側の腕前が本物か否いなかってことだけだ。真の名手が振るえば、偽物の剣も天てん下か無む双そうの宝刀になる。へたくそが振るえば、最強の魔剣だって釣つり竿ざおと変わりない」

と、さっきも見せた食堂のフォークを取り出した。

「極端なことを言うなら、こいつをアーサー王のエクスカリバー並の武器として使いこなすことが、剣士の仕事だ。手にした武器が最

強の魔剣でも、樫かしの枝でも、十じつ徳とくナイフでもフォークでも、全部同じように使いこなせなくちゃダメなんだよ」

「それは理想論だわ。戦場で振るうものである以上、武具にも最高を求めるべきよ」

　技ぎ倆りようの追求という点では、青年の論にも一理あるだろう。

　そこは認めながらも、エリカは異いを唱となえた。

　たとえば非凡な達人が、槍やりを振りまわす騎士に短刀で挑み、みごと勝利する。剣を振るう荒あら武む者しやを、素す手でで巧たくみに押さえ込む——。

　そういう神技の使い手は、ごく稀まれに実在する。

　エリカの叔お父じパオロ・ブランデッリや聖ラファエロなどがそうだ。

　しかし、だからといって武具の優ゆう劣れつを軽視していいはずがない。己の手の延長となり、立ちはだかる敵を打ち砕く大切な相棒である。

　エリカが聖ラファエロの双剣を求めるのも、そこで後おくれを取りたくないからだ。

「まあ、君らのような子供はそれでいいさ。未熟なうちから難しいことをやろうとしても、上手くいかないしね……。だけど、僕のようにちがいのわかる大人になると、こんなものでもイケてると思うようになるのさ」

　と、青年は珍しく渋い声で言った。

　しかし、壁にかかった剣を眺める顔つきと視線は、まるでショーウインドーのトランペットを凝ぎよう視しする貧乏な子供だった。

　欲しいけど買えない、でも欲しい。『ちがいのわかる大人』が聞いて呆れる。

「……それであなたは、この剣を具体的にどうするつもりなんだ、大人として？」

　リリアナも呆れたのだろう。珍しく皮肉っぽい物言いだった。

　すると青年は、にやりと微笑してみせた。

「なあに、こういうときこそ大人の力が役に立つのさ。——店員さん、ちょっといい？　この店、ツケとか出世払いって大丈夫？　え、保証人？　クレジットカード？　ローン？　いやいや。僕が言いたいのは、そういうぬくもりをなくした現代社会特有のお買い物用語じゃなくて、もっと人と人のつながりが奇跡を起こす的な、心温まる何かで……」

　財布も身分証明書も持たず、前金も保証人もなし。

　こんな有様でゴネる青年に、みやげもの屋の若い店員は驚き、すげなく断る。しかし青年は駄々をこね、無理な要求を重ね——。

　結局、エリカとリリアナがお金を出し合い、剣を買うことで一件落着した。

「剣まで買ってもらっちゃって、本当にありがとう！」

　ほくほく顔で笑いながら、青年は先に立って歩いていく。

　おみやげ屋で入手したばかりの模造刀は、店でもらったボロ布をぐるぐる巻きにして、両腕で抱かかえ込んでいた。

　その後ろで、エリカとリリアナは暗い面おも持もちでささやき合った。

「まあ、あの程度は安い買い物だけど……」

「あの阿——いや、あの男、どこまで信用していいか不安だな……」

　はしたなくも『阿呆』と言いかけるリリアナの気持ちが、エリカには痛いほどわかる。

　ともあれ、三人は歩き続けた。

　城壁に囲まれた街を出る。トスカーナ地方の田園風景がのどかに

広がっていた。

　なだらかな隆りゆう起きを描えがく丘きゆう陵りよう。よく手入れされたブドウ畑やオリーブ園。

　農家が利用しているのであろう、粗末な小屋。まばらに生えた木々。小さな川。その果てはローマに至るはずの、石造りの古い街道――。

　そのなかに中世の砦とりでと、城じよう塞さいの跡地がふくまれていた。

　青年はそちらに近づいていく。もちろんエリカもリリアナも続く。

「……うん。やっぱり、この辺にも見覚えがあるな。昔、ここらでいろいろ苦労した気がするけど、どんなことをやってたのかな？」

　自称記憶喪失の青年が、ぶつぶつとつぶやいていた。

　しかし、エリカはそちらを気にしなかった。不意にリリアナが体を震わせ、焦点の合わない目で託たく宣せんをささやいたからだ。

「いにしえの騎士の技……いにしえの呪じゆ文もん、宝物……それらを秘ひ匿とくする聖せい域いき――」

　これは霊視だ。霊視による啓けい示じを、リリアナは受け取ったのだ。

　魔女の素養を持つ者は、ときどきこのような託たく宣せんをつぶやく。エリカはうなずいて、すぐ騎士にして魔女でもある旧友に歩み寄った。

「何か霊視できたようね、リリィ。わたしたちの役に立ちそうなこと？」

「あ、ああ。エリカ、ここは、いにしえの騎士たちが出入りした場所だ。彼らは城塞の近く――深い闇やみのなかに、神殿も築いたんだ。そのイメージをわたしは霊視した」

「ちょっと気になる話ね。闇に築いた神殿……素直に連想するなら地下、かしら？」

エリカは地面をつま先で蹴けり飛ばしてみた。

すこし調べてみるのもいいだろう。リリアナとふたりで探たん索さくの魔術をいくつか使ってみた。

「やはり、真下から微量ながら呪力の痕こん跡せきを感じるな……」

「ええ。何かあると疑ってなければ、見逃してしまいそうなほどわずかだけど……」

「結界で隠されているのにちがいない。おそらく地下の神殿は、秘密の聖域なのだろう」

「聖ラファエロの関係者である記憶喪失さんが出入りしていた場所——つまり、聖ラファエロもご存じである可能性は高いわよね」

「逆に、ここの守護者こそが聖ラファエロという線も……」

単なる憶測に過ぎないが、ふたりは意見を交換した。

実際のところは、下に降りて確認するしかない。うなずき合う。これこそまさに虎こ穴けつだ。あとは、どこから侵入するか。

すると、脳天気な青年の声がふたりの耳に飛び込んできた。

「記憶を失う前の僕は、ここで何をするつもりだったんだろう……？　きっと馬のしっぽの人が関係あるよなァ。呼び出したいところだけど、電話番号や住所の心当たりもない……。ここはひとつ、狼煙のろしとか伝でん書しよ鳩ばととか古典的手法を検討してみるか」

妙なことを口走っている。

エリカもリリアナも、自然と彼を無視した。

今までの経けい緯いが経緯である。自称記憶喪失のたわごとにつきあうよりも、有意義な話し合いをすべきだと考えてしまったのだ。

……だから、決定的な瞬間を見逃すことになった。

ふたりが話し込んでいたとき、すさまじい量の呪力が爆発した。

喩たとえるなら活火山の噴火だ。

これほどの呪力が一瞬にして噴き上がり、炸さく裂れつするのを感じた経験はエリカにはない。リリアナも同じだろう。

強しいていえば、数十人の上位魔術師が総がかりでかける、儀式魔術の爆発力が近いか。

だが、それだけの人数で術のイメージを共有し、膨ぼう大だいな呪じゆ力りよくをひとつにまとめあげるのには、おそろしく時間と手て間ま暇ひまがかかる。こんな一瞬で可能な芸当ではない。

——何事が起きたのかと。

エリカとリリアナは、同時に振り返った。

そして見た。天に向けて剣を突き出した格好の青年を。どうやらレプリカの剣を振りまわした直後らしい。

さらに、唐から竹たけ割わりにされ、左右に分かれて倒れていく中世の砦とりでを。

丘の上に建つ石像建築である。兵士たちのこもる一階部分と、見張りの詰める二階部分がある、そこそこ大きな歴史的建造物だ。

これがまっぷたつに斬り裂かれていた。

天空より振り下ろされた巨大な剣が、一刀両断したかのように——。

左右に倒れ、地面にずり落ちていく石材たちがズズン！　と大きな音を立てる。

「な、何が起きたというの？」

エリカは常に優ゆう雅がな貴婦人たらんとする少女だ。

しかし、このときばかりはその志こころざしも嗜たしなみも忘れて、呆ぼう然ぜんとつぶやいた。

「もしかして、あの男の仕し業わざなのか……？」

リリアナも呆然としていた。

騎士にして魔女、並の魔術師以上に神秘を知る逸いつ材ざいにあるまじき表情だった。

「ごめん、驚かせちゃった？　いやね、こうしたら狼煙のろしの代わりになって、あの砦の関係者を呼び出せるんじゃないかって思ったんだ」

脳天気に語るのは、もちろん記憶喪失の青年である。

この男、何者——!?

ふたりの少女が、初めて畏い怖ふのまなざしを彼に向けたとき。

葦あし毛げの馬がトスカーナの丘陵を駆け、こちらに向かってきた。逞たくましい悍かん馬ばである。その鞍くらにまたがるのは、黒髪の美女。

ラテンの血を感じさせる、強気そうな面おも差ざしだった。

黒髪を後ろでまとめ、ポニーテールにしている。文字どおり、馬のしっぽのようだ。

「どこの結社が攻めてきたかと思えば……。まさか、サルバトーレ・ドニだったとはね。不ふ肖しようの弟子というには短すぎるつきあいだったけど、一体どういうことだ？　事と次第によっては、おまえの頸くびを代だい償しようにさせてもらうよ」

黒髪の乗り手は、馬上から颯さつ爽そうと告げた。

ならば、彼女こそ聖ラファエロ。栄えある聖騎士パラディーノの位階——『聖なる杯の騎士』にまで至った、欧州最高の剣客なのだ！

5

かなりの年齢のはずだが、聖ラファエロはまるで二〇代の容姿

だ。

　呪じゅ力りょくが至し純じゅんの域いきに達した魔術師は、肉体年齢が著いちじるしく若返るものだ。特に女性ほど、その度合いが大きいという。

　聖ラファエロの颯さつ爽そうとした美しさは、まちがいなくその恩恵だろう。

「どうした、ドニ？　うつけが行きすぎて、あたしの顔を忘れてしまったか？　おまえなら本当にありそうな話だから、そう言われても驚きはしないけど」

「あー……まさにおっしゃるとおりで」

　師し匠しょうの詰きつ問もんに、サルバトーレ・ドニ青年は悪びれずに答えた。

　初めて聞く名だった。欧州各地の上級騎士のプロフィールを、エリカはほとんど把は握あくしている。何かの役に立つかもしれないからだ。この青年、どういう人間なのだろう——？

「どうも僕、記き憶おく喪そう失しつみたいなんだ」

「風か邪ぜでもひいたみたいに言うなッ。たわけが！」

「まあまあ、そう怒らなくても。今け朝さ目を覚ましたら、よく知らない村の道ばたで寝ていて……。で、何かしなくちゃいけないことがあったなーと思い出して」

　そういえば、初めて聞くドニ青年の身の上話だった。

「近くにあった修道院に転がり込んだら、あなたの名を聞いた。そのままなんとなく歩きまわっていたら、ここまで来られたんだけど——お会いしてみて、ようやくわかった」

　ドニ青年は完かん爾じと笑う。人なつっこい陽性の笑顔だ。

　なのに、ひとつまみの陰かげじみた何かが瞳ひとみにひらめく。彼が只ただ者ものではない、決して凡ぼん人じんではないという証あかしめいた何かが。

「僕がしなくちゃいけないのは、あなたとの立ち合いだ。あなたと戦うことができれば、僕が今抱えているモヤモヤはきっと整理できる。そんな気がして、たまらない」

　と、彼はレプリカの剣を中段に構えた。

　奇抜さに欠ける構え。おもしろみにも華か麗れいさにも欠ける、凡ぼん庸ような構え。

　しかし、エリカはその型を見て、なぜかゾッとした。もし相対するのが自分だったら、あの平凡な構えが繰りだす剣に、為なす術すべなく斬きり裂さかれるのでは？

　わけもなく、そう思ったからだ。

　隣のリリアナをちらと見る。彼女も蒼そう白はくになって、ドニ青年を見つめていた。

　あるいは、旧友兼ライバルも同じ危き惧ぐを抱いたのか。ミラノに神しん童どうありと讃たたえられる、紅と青の若き天才がふたりそろって！

「いかにもおまえらしいよ。自分勝手で理屈の通らないことを、一方的に言う……」

　聖ラファエロはつぶやいて、馬から降りた。

「理屈なら、たぶん通っているよ？　僕はどうも、剣の鍛たん錬れんで行き詰まっていたような気がするんだ。だから、僕の知る最高の剣士と刃を合わせて、何かヒントを掴つかみたいと考えた——。ほら、こう考えれば全部つじつまが合うじゃないか！」

「合うわけないだろう！　だからおまえは、大おお阿あ呆ほなんだ！　でも、ひとつ気になる」

　聖ラファエロの手に、巾はば広ひろの大剣が現れた。

　召しよう喚かんの魔術で呼び出したのだ。銀色の刀身は清せい冽れつなほど美しく、強きよう靭じんそうで、雄おす獅じ子しのごとき力強さで輝いていた。

　もしや、あれこそが『獅し子しと匠たくみの双剣』の片割れか？

「おまえを器用なだけと言う者もいるが、あたしは知っている。サルバトーレ・ドニ、おまえさんは正しよう真しん正しよう銘めいの天才で、怪物フエノメノみたいな剣の申し子だよ。……でもな、あんな芸当のできる男じゃあ絶対にない。おまえ、どんな手て妻づまを身につけた？」

　聖ラファエロは銀の大剣で、一いつ刀とう両りよう断だんされた砦とりでを指し示した。

「あれはまるで……まるで——って、おまえにまともな話を期待するだけムダか」

　美しき聖騎士は、諦あきらめたように頭を振った。

　そして、大剣の切っ先をサルバトーレ・ドニに向ける。

「思い出したよ。おまえの阿呆は死んでも治らない。剣を取って打ち合い、剣を通して語るしかないってな。来な、不ふ肖しようのバカ弟子。ひさしぶりに可愛かわいがってやる……」

　奇妙な師し弟ていのやりとり。

　おそらくこのあと、すさまじく高度な立ち合いがはじまる。

　そこに居合わせることは、若き騎士にとって最高の眼がん福ぷくとなるだろう。だが、エリカ・ブランデッリがそんなもので満足してはいけない。

　強烈すぎる師弟の自己主張にあてられて、エリカもつい見入ってしまった。

　だが、己の目的は他にある。それを果たすために動かなくては！

「お待ちください、聖ラファエロ！　お初にお目にかかります、わたしはリリアナ・クラニチャール。《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の騎士です。本日はあなたの御手より名高き双剣を継承させていただくべく、参上いたしました」

　闘志を取り戻したエリカよりも先に、リリアナが叫んだ。

　先を越された。まあいい、さすがは我がライバル。彼女も只ただの傍ぼう観かん者しやになるまいと行動を起こしたのだ。ならば、

共闘することにしよう。

　未熟なエリカたちが眼前の師弟と張り合うには、それくらいの工夫が必要だ！

「このエリカ・ブランデッリも、リリアナ卿きようと同じ目的のために参りました。わたしどもはここまでサルバトーレ卿に同道し、聖ラファエロさまのもとへ参ったのですが……。サルバトーレ卿のご記憶が定かでないため、おふたりのご関係がいまだに呑のみ込めておりません」

　優美に一礼しながら、エリカも訴えた。

　早く事情を把は握あくし、傍観者から参加者にならなくては。

「よろしければ、若じやく輩はいであるわたしどもにも——」

「どうか、ご事情をお教えくださいませ」

　そろって願い出るリリアナとエリカに、聖ラファエロはため息をついた。

「家名から察するに、クラニチャールとブランデッリの後あと継つぎたちか。この阿呆にからまれるとは災難だったな。……サルバトーレ・ドニは、シエナの騎士だ。剣はたいしたもんだが、魔術の方はてんでダメダメな落ちこぼれのな」

　シエナはフィレンツェやピサと並ぶ、トスカーナ地方の古都である。

　しかし、魔術の世界では決して中心地ではない。

　イタリアで名門とされる魔術結社は七つ。ローマの《雌め狼ろう》《蒼そう穹きゆうの鷲わし》、トリノの《老ろう貴き婦ふ人じん》、フィレンツェの《百ゆ合りの都みやこ》、パルマの《楯たて》、そしてミラノの《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》である。合わせて『七なな姉し妹まい』ともいう。

　才能ある少年少女はそれらの名門に招かれ、住まいを移すのが通例だ。

　たとえばエリカと仲の悪いジェンナーロ・ガンツが、数年前にレッジョ・カラブリアからミラノへ来たように。つまり『シエナの騎士』であるドニ青年は、エリート街道とは縁のない経歴なのだ。

「こいつは一年前、あたしのところに来て『ちょっと剣を教えてくれ』と言ったのさ。ど阿呆だが見どころもあったんで、手ほどきしてやった。たった一か月でいなくなったけどな！」

　この罵ば声せいに、ドニ青年は面倒くさそうに頭をかいた。

「うーん……よく覚えてないなー。そんな怖い目をしなくても」

「うるさい阿呆だねっ。とにかくこいつは、無礼で頭が悪いくせに、妙に器用でずるがしこい男なんだ。武ぶ芸げいに関することだけ覚えがよくて、たった一ひと月つきであたしの技の基本程度は覚えていったしね」

　基本の先は自みずからの才覚のみで研けん鑽さんし、形にするという気構えだったのか。

　それは、抜きんでた天てん賦ぷの才を持つ人間にだけ許される傲ごう慢まんだ。そして、聖ラファエロは彼を『天才』と言い切った。

「僕とあなたはそういう間柄だったのか……。ま、でも、ここでの立ち合いにはそれほど関係ない話だよね」

　エリカたちの想像を越えていた天才剣士は、にやりと笑いながら言った。

「とりあえず君たちさ、しばらく下で時間をつぶしてもらっていいかな？　ちょっとだけ、僕の用事が済むまででいいんだ。だから、ごめんよ！」

　と、お茶目にウインクまでする。

　その直後、ドニ青年の右腕が銀色に輝いた。そして、レプリカの剣を足下の地面に突き刺し、そのまま振り抜く。

　――この一ひと太た刀ちは、大地を切り裂く斬ざん撃げきとなった。

エリカとリリアナの立つ地面が、割れた。

さっき中世の砦が一刀両断されたように、まっぷたつに斬り割られた。

ふたりの少女騎士は、愕がく然ぜんとしながら下方に落ちていった。ドニ青年の『斬撃』によって地面が崩れ、彼女たちは土砂と共に地下へと落下する。

もしかしてサルバトーレ・ドニは、バカげた独ひとり語がたりをしながら、エリカたちの『地下に何かあるのでは？』という推すい論ろんを聞いていたのかもしれない。

だから彼は、邪じや魔まなふたりを地下へと追いやった。己の目的のために。

愚ぐ者しやに見えて狡こう猾かつ——。聖ラファエロの言ったドニ青年の意外な一面を、こうしてエリカとリリアナは知ることになったのである。

「やはりそうか……やはり、おまえは——」

聖ラファエロの称号を持つ聖騎士パラデイーノはつぶやいた。

サルバトーレ・ドニのすさまじき手並み。輝く銀の腕でまがい物の剣を振るい、大地を引き裂き、土中の地下聖堂まで斬り裂いた。

彼女には、これが何かわかる。

聖ラファエロの名と共に戦い続けた半生。その折々に垣かい間ま見みた、超絶の力の数々。

デヤンスタール・ヴォバン侯こう爵しやくは風ふう雨う雷らい霆ていを操り、死人の軍勢を従え、地じ獄ごくの業ごう火かで見渡す限りの焼け野原を生み出した。

麗うるわしき羅ら濠ごう教きよう主しゆは無双の剛ごう拳けんを振るい、破壊の謡うたを吟ぎんじ、超常の花々を世にばらまく。

たおやかなるアイーシャ夫人は、永遠の春と無限の冬を呼んだ。

　そしてサルバトーレ・ドニは、全てを斬り裂く『剣の王』となるか――！

「あはははは！　長生きはするもんだっ。不ふ肖しようとはいえ、まさかあたしの教え子からエピメテウスの落とし子が生まれるとはね！」

　銀の腕の剣士に向けて、聖ラファエロは叫んだ。

「おい、バカ弟子！　ただでさえ悪い頭から記憶が抜け落ちる前、何をしやがった？」

「うーん……どこかで、とんでもない誰かと戦ってた気がするけど、よく思い出せないな」

　まがい物の剣を構えながら、ドニは言う。

　頭の悪い返答に、聖ラファエロはフンと鼻を鳴らした。

「みやげ話もなしとは、使えないバカ弟子め。だったら体で払ってもらうよ……。神すら倒した男がどれほどの剣技を身につけたのか。実戦で見せてもらう」

　銀の大剣――魔剣クオレ・ディ・レオーネを振り上げる。

　これこそ双剣の一振り。その名の意味は『獅子の魂』。雄お々おしき不ふ屈くつの闘志を体現する鋼はがねであり、不滅の属性を持つ。

　獅子の魔剣を前にして、ドニの腕から銀の輝きが失せた。

「へえ。権けん能のうを使わないとは、人間のあたしに手加減するつもりか？　出世したもんだ！」

「権能ってのが何か知らないけど、この腕は剣の技じゃあないから。こいつを使ったら意味はないのさ」

　この会話をきっかけに、ふたりは同時に剣を繰りだした。

　クオレ・ディ・レオーネを大上段から振りおろす聖ラファエロ。対してドニは、稲いな妻ずまの鋭さで中段の剣を叩たたきつけてくる。

ガキッ！　真っ向からのぶつかり合い。

剣と剣が正面衝突し、そのまま鍔つば迫ぜり合あいになる。

普通の剣なら、こんな乱暴な激突をさせれば、すぐに刃が欠けてしまう。

だがクオレ・ディ・レオーネに、そんな心配は無用。この程度でどうにかなるほど、やわな造りではない。万一欠けたとしても、すぐに再生する。

そして、ドニの剣はまがい物。欠けるような刃はもともとないのだ。

鍔迫り合いのまま、両剣士はにやりと笑みを浮かべ合った。

このまま打ち合いと洒しやれ落込こむか——聖ラファエロが目で誘えば、望むところとドニもかすかにうなずく。

直後、ふたりは鍔迫り合いを解いた。



片方が剣を打ち込む。もう片方がそれを剣で防ぐ。

片方が剣をねじ込む、叩き込む。もう片方がそれを剣ではじく、凌しのぐ。

剣と剣が幾度となくぶつかり合い、はじけ飛び、火花を散らし、優位を競う。それは闘争の原点ともいうべき、原始的なぶつかり合いだった。

どちらの剣が力強いか。どちらの剣が速いか。どちらの剣が鋭いか——。

そうした部分を競う勝負。

柔じゆうと剛ごうで言えば、わかりやすい『剛』の対決。

だが、もちろんこれだけが剣術ではない。ことに聖ラファエロは、魔術をも併へい用ようして戦う騎士剣術の達人——。

「獅子の鋼よ、千の甲かつ冑ちゆうを断ち切る剣の王者たれ！」

言こと霊だまと共にクオレ・ディ・レオーネを打ち込む。

愛剣の切れ味を大幅に引き上げる錬鉄術をかけたのだ。ドニが今までのように受ければ、まがい物の剣は両断される！

これを抑おさえるべくドニが見せた技は、まさしく『柔』だった。

聖ラファエロが振りおろすクオレ・ディ・レオーネ。

その上に、まがい物の剣を覆おおいかぶせるように叩たたきつけて——いや、絡からみつけてくる。まがい物の剣は今、鋼の蛇へびに化けていた。

ドニを斬り裂くべく、獅子の剣が走ろうとする。

まがい物の剣が蛇のごとく絡みつき、獅子の剣を自由に疾しつ駆くさせない。

——一〇〇の力で攻めてくる敵に対して、我が一〇の力しか持っていなくとも、綿わたが水を吸うように力を吸収し、受け流し、防

ぎ切る。

　そのための技法だった。中華の武ぶ侠きようたちは『化か勁けい』などと呼ぶ。

　柔能よく剛を制すというが、言うは易やすし。

　サルバトーレ・ドニは、身も心も明めい敏びんに研ぎ澄ましながら踏み込んできた。聖ラファエロの剣と体に、己の剣と体をぴたりとくっつけさせる。師の剣が攻撃に移ろうとしたら、即座にまがい物の剣を蛇のように操り、師の切っ先をずらす。己を斬らせないようにする。

　敵の攻勢から、必死に逃げまわるのではない。

　あくまで能動的に防ぎ、敵の太た刀ち筋すじをずらさせて隙すきをも作り出そうとする――。

　ドニは『柔』の剣技で、クオレ・ディ・レオーネを抑おさえ込んでいた。

「さすがに小器用だがな！」

　聖ラファエロは嗤わらった。その程度で獅子を封じられるものか。

　力にはしなやかさで、剛には柔で対抗するのが武の妙味。ならば、しなやかさにはしなやかさで、柔には柔で応じれば如い何かに？

　聖ラファエロは全身を綿のようにゆるめた。

　蛇のごとく、蛭ひるのごとく、綿のごとく、五体と剣を操る。

　ドニの操るまがい物の剣よりも、獅子の魔剣はさらにやわらかく、しなやかに。さらに優雅に、ゆるやかに。

　ルネッサンスの画が聖せいラファエロが絵筆を操るがごとき、優美な剣さばき――。

　たしかにサルバトーレ・ドニは天才だ。剣の申し子だ。

しかし、聖ラファエロもそうなのだ。資質が似たようなものでも、積み重ねた修行の絶対量がちがう。不肖の弟子は、『剛』の剣技なら師の域に近づきつつあるようだが、『柔』はまだまだ不足——。

蛇と化したドニの剣から、聖ラファエロは獅子の剣をあっさり引き離す。

そのまま、ゆるゆると斬りつけた。

老いた達人がゆっくりと打ち込む一撃を、若い腕自慢たちが誰もかわせない——。武術の世界ではたまに聞く逸いつ話わだ。これが可能な達人はほとんどいない。

だが、もちろん聖ラファエロならば、できるに決まっているではないか！

どうする、不肖の弟子!?

すると、ドニの右腕が銀色に輝いた。——まさか権能？

いにしえの砦とりでと大地を斬り裂いた、あの力か!?　『あれは剣の技じゃないから』と言った舌の根が乾かぬうちに！

驚きよう愕がくが筋肉の硬直を招き、聖ラファエロの剣をわずかに遅めた。

ゆるりと振りおろした剣は、さらに遅くなる。その猶ゆう予よにつけ込んで、ドニが一気に踏み込んできた。体当たりをするつもりだ！

ドニを頭頂から両断するはずだった獅子の魔剣。

しかし、頭の皮を一枚切ったところで、ドニが体を叩たたきつけてきた。

豪快なタックル。剣術というよりもラグビーの動きだ。横にステップして、聖ラファエロはかわす。おかげで大バカの頭をかち割れなくなった。

ドニの腕はもう輝いていない。フェイント。権能は使わなかったのだ。

「こ、この野郎……おまえみたいに人間失格で社会に適応できないクズを、それでも剣士としてだけは信用したあたしの寛かん大だいさを踏みにじりやがって。何が『腕は使わない』だ！」

「使うかもしれないと見せただけで、実際は使ってないじゃないか！」

　激怒する聖ラファエロ。己の卑ひ怯きようさを認めないドニ。

　剣豪同士の戦いを子供のケンカにおとしめる、醜みにくい舌ぜつ戦せんであった。

「くそっ。おまえがその気なら、あたしも持ってる武器を全部使ってやる」

　聖ラファエロは、獅し子しの魔剣を消し去った。

　代わりに召しよう喚かんするのは、匠たくみの魔剣——イル・マエストロ！

　槍やりのごとく長い柄つかに、サーベル状の刀身をつけた武具だ。日本でいう薙なぎ刀なたに酷こく似じした、双剣の一振りだった。その名の意味は『名匠』。

　玄げん妙みようなる美の創造者、妙なる旋せん律りつの奏そう者しやに喩たとうべき鋼であり、魔曲の霊力を秘める。

　聖ラファエロは、イル・マエストロを軽やかに振りまわした。

　颯さつ、颯さつ、颯さつと、ドニに斬りつける。

　その軽やかさは、さながら高原をそよぐ涼風。

　しかも、この斬撃に合わせて、イル・マエストロは妖あやしの魔曲を奏かなでる。

　匠の鋼より、リィィィィィンという玄妙な音がしみ出る。これを聞いた敵手は、集中力を奪われたり眠気に誘われたりして、隙すきが生じる。

　そこにつけ込んで切り捨てるのは、聖ラファエロのひそかな十お八は番こだった。

　クオレ・ディ・レオーネが『剛』なら、イル・マエストロは『柔』の魔剣なのだ。

　しかし、ドニの体には魔曲が通じない。波を跳はね返す海辺の岩がん礁しようのごとく、幻げん惑わくの調べを跳ね返してしまう。さすが神を殺あやめた（はずの）男！

　やはり神殺しに魔術は通用しない。ならば、武術に集中するまで！

　長柄のイル・マエストロをさらに颯、颯と操る。

　——白はく兵へい戦せんにおいて、武器のリーチで勝まさる側が圧倒的に優位となる。何しろ、確実に先手を取れるのだから。

　もちろん、ふところに飛び込むなどリーチ差をくつがえす術はある。

　だが、それを格下のドニに許す聖ラファエロではない。

　薙刀状のイル・マエストロで容よう赦しやなく攻め立てる。薙なぐ。薙ぐ。左右の横から、斜め上、斜め下、真上、真下、ありとあらゆる角度から斬りつけ、薙ぎ払い、ときにはまっすぐに切っ先を突き出す。

　一瞬の停てい滞たいもない、間かん断だんなき連続攻撃。さながら鋼の疾しつ風ぷうである。

　ドニはリーチで劣おとる剣を必死に振るい、イル・マエストロの斬撃・刺突を全て防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ！

　だが、ここで聖ラファエロはリズムを変えた。

　繰り返すが、イル・マエストロは長い柄にサーベルの刃をつけた武具。刃とは逆側、柄の端にあたる部分で、ドニに殴なぐりつける。これが決まった。

　連続斬撃のリズムに慣れていたドニのこめかみを、木製の柄は打ち抜いた。

　テンプルに豪快なフックを喰くらったボクサーよろしく、ドニの体が揺らぐ。膝ひざが落ちる。目の焦点が合ってない。

意識を刈り取ったか。だが、とどめを刺すまでは安心できない。

聖ラファエロはイル・マエストロを振り上げた。

6

すこし時間は遡さかのぼる——。

大量の土ど砂しゃといっしょに、無明の地下へ落ちたエリカとリリアナの顛てん末まつである。

地面に叩たたきつけられたあと、エリカは痛みを堪こらえて立ち上がった。

足下を手探りで探る。この感触は陶とう製せいのタイルだ。硬い石いし畳だたみやコンクリートに比べれば、ずいぶんとやわらかいはず。

体がさほど痛まないのは、とっさの受け身とタイルのやわらかさのおかげだろう。

安あん堵どしたエリカは、パチンと指を鳴らして『鬼おに火び』の術を使った。

手のひらサイズの青く小さな焔ほのおが四つ生まれ、エリカの周囲をゆらゆらと照らす。すぐそばにはリリアナもおり、向こうもちょうど起き上がったところだった。

「……予想どおり、ここは地下神殿だった場所のようね」

「ああ。本来だったら強固な結界に阻はばまれて、容易に侵入できる場所じゃなかったろうが」

ふたりはきょろきょろと周囲を見まわした。

この神殿、だいぶ広い。フルコートのサッカーが余裕でできそうだ。

聖堂の正面奥には、祭さい壇だんがあった。

　その後ろには、十字架にかけられたイエス・キリストの像。

　キリスト像の背後にもうひとつ、巨大な顔の像がある。これは中世のテンプル騎士団が崇あがめていた魔神バフォメットをかたどったものだ。

「バフォメット像があるところを見ると、中世に造られたのだろうな」

「ええ。近世に下るにつれて、テンプル騎士団系の結社でもバフォメット信しん仰こうは失われるか薄まっていくものね」

　リリアナとエリカは、直上の方向を見上げた。

　床から天てん井じようまで、十数メートルほどの高さだ。天井の端の方には巨大な亀き裂れつが走っており、そこから流れ落ちてきた土砂で、地下聖堂の四分の一ほどが埋まっていた。

「リリィ。何メートルくらい落ちたか、見当がつく？」

「正確にはもちろん無理だな。魔女の勘かんで言うなら、ここは結構深いはずだぞ。地下四階か五階くらいに相当するかもしれない」

　魔女の資質を持つ者は、他の魔術師よりも深く大地に愛されている。

　リリアナに教えられて、エリカは肩をすくめた。

「これだけの聖堂を築くには、かなりの資産が必要だったはずよ。おそらくここは、わたしたちの大先輩である中世のテンプル騎士団そのものか、その直系の後継者が造らせたものだと考えるべきね」

　あちこち見まわしながら、エリカは推すい測そくした。

　正統なるキリストの教えから乖かい離りした教義と、経済的に強大化しすぎたことが、テンプル騎士団を滅ぼした原因である。

　テンプル騎士団が行った事業に『金融業』がある。

　預金に両替、貸付に融資。エルサレムに赴おもむく巡礼者から金を預かり、ヨーロッパから中ちゆう東とうにかけて九〇〇〇以上ともいわれる騎士団支部で引き出せるようにする。金利を取って金貸

しもする。国家への財政援助まで行った。

　現代の銀行の原点は、テンプル騎士団にあるのだ。

「かつては重要な聖せい域いきだったのでしょうね。だから聖ラファエロは、この聖堂を守りながら隠いん棲せいしていたのかも。……ところでリリィ、あれは何だと思う？」

　エリカが気づいたのは、キリスト像の足下に置かれた書物だった。

　かなり大きい。背表紙の横幅はエリカの肘ひじから指先と同じほど、縦たての高さはなんとエリカの上半身と同じほどだ。

　この巨大な書物に、エリカはゆっくりと歩み寄った。

「ま、待てエリカ。その書からは只ならぬ霊気を感じる。かなりの由ゆい緒しよを持つ霊宝かもしれないぞ⁉　みだりにさわっていい物ではない！」

「……と、魔女の勘が告げているわけね。ものすごく興味深いわ」

　小鳥のさえずりを聞き流すように、リリアナの制止を振り切る。

　神秘の書物に近づいたエリカは、まじまじと表紙を見つめた。書名は『ダヴィデによる勲の書』。古いギリシア語で書かれていた。

　ぞくりと背筋が震えるのを、エリカは自覚した。

　騎士ならば誰もがひもとくことを夢見る魔導書に、こんな形で出会うとは……。

「僭せん越えつだぞ、エリカ・ブランデッリ！　分ぶんをわきまえ――うっ」

　追いかけてきたリリアナも、すぐ隣で息を呑のんだ。

　無理もない。この書物の価値を、旧友兼ライバルが知らぬはずもない。

「前言を撤回しましょう。おそらく聖ラファエロは、この魔導書を守護しつつ隠棲されるおつもりだった。そのためにきっと、強固な

結界で守られた地下聖堂を選ばれたのね。遥はるかいにしえの聖人たちが用いた戦闘魔術を守護するために――」

　この書を隠いん匿とくしたのは、おそらく聖ラファエロ。そしてリリアナの託たく宣せん。

　それらから、エリカは眼前の魔導書が贋がん作さくである可能性をかなり低く見積もった。

　――『ダヴィデによる勲の書』！

　騎士の道を極めんと欲する魔術師にとって、これほど魅み惑わく的な書物はない。

　そこに記しるされているはずの奥おう義ぎ。

　たとえば『ダヴィデの言こと霊だま』。まつろわぬ神々にすら手傷を負わせ得る、いにしえの勇ゆう壮そうなる呪じゆ詛そだという。たとえば『聖せい絶ぜつの詩うた』。悲運の都ジェリコを壊かい滅めつさせ、ミデアンの民たみと王を地上より殲せん滅めつさせたともいう、聖なる虐ぎやく殺さつの賛歌――。

「ねえリリィ、ひとつ提案があるのだけど……」

　エリカはとっておきの猫なで声で言った。

　失敗は許されない。今までの人生で幾度となくリリアナ・クラニチャールをたぶらかしてきた彼女だが、それでも成功率一〇〇％ではないのだ。

　慎しん重ちようを期さなくては。銀髪の旧友が、まじめさと正義感を発揮しないように。

　しかし、要いらぬ心配かもしれない。

　何しろリリアナ自身が、トランペットを見つめる貧乏な子供、もしくは剣を見つめるサルバトーレ・ドニのような顔で魔導書を凝ぎよう視ししているのだから！

　聖ラファエロによって、サルバトーレ・ドニはこめかみをしたた

かに殴なぐられた。

　痛打である。脳は思いっ切り揺さぶられ、意識も飛びそうになる。膝ひざは揺ゆれ、体は平へい衡こうを失い、ダウン寸前であった。

　しかし、この痛みが逆に甦よみがえらせてくれたものもあった。

　――ああ、そういえば。

　ドニの脳内で、ここ半月ほどの記憶が大おお雑ざつ把ぱにリフレインする。

　聖ゲオルギウスの神霊に取とり憑つかれ、体を乗っ取られたのはトルコの博物館だったか。ローマの中華街で知り合った古物商に雇やとわれて、用心棒として行ったのだ。

　それからもたしか紆う余よ曲きよく折せつ。神霊に操られるままアイルランドに渡り、かの地におわす神々を誅ちゆう殺さつせんと、神様捜しの日々。ようやく見つけた妖精境の門をくぐってアストラル界に行ったら、トゥアハ・デ・ダナーン（要するにアイルランドの神様たち）の王・ヌアダ神が現れ、ゲオルギウスと一騎打ち。

　結果、ゲオルギウスの霊体のみが滅び、ようやくドニは自由の身となった。

　で、たしかそのままヌアダ相手に腕うで試だめしをしてやると思い立って、戦いを挑んで――

「アストラル界経由でイタリアに帰ってきたから、あの村にいたのか……」

　くらくらする頭を振りながら、ドニはうなずいた。

　神様との死闘を終えたあと、どこかの女性に言われた気がする。

『現世に戻ったら、しばらく記憶の混乱とかあるかもねー。いくら神殺しに生まれ変わったとはいえ、ダメダメな魔術師がこれだけ長く「生と不死の境界」にいたんだから、脳に結構な負担がかかったろうし。もしそうなったら、誰かに強く頭を叩いてもらってね☆』

　と、えらく軽いノリの忠告だったような……。

　ともかく、ドニの記憶は戻ってきた。

　聖ラファエロに殴られてから、ここまでコンマ数秒。その間にも師し匠しようはイル・マエストロを振りかぶっていた。とどめを刺す気だ――！

　防御をし、反撃もしなくては。

　そのための技を、サルバトーレ・ドニは千以上も身につけている。千せん変ぺん万ばん化か・変へん幻げん自じ在ざいの剣技を駆使して、かつての師を迎撃するのだ！

　――しかし、ドニの頭から思い浮かべた技が全て消えていった。

　――ドニの腕も、剣を構えることをやめた。

　だらりと剣を下げる。構えるべきではないのだ。攻めるべきでも防ぐべきでもない。ただ心の赴おもむくままに剣を動かせばいい。

「しまったな……。いちばん肝心なところを忘れていたのか」

　不敗の剣を操るヌアダ神との立ち合い。

　そこで掴つかんだ、剣の極意に近づくためのインスピレーション。そうだ。サルバトーレ・ドニは、これを極めるために聖ラファエロとの対決を望んだのだ。

「……おまえ、もしかして記憶が戻ったのか？」

　聖ラファエロに訊ねられた。ドニの挙動から変化を見抜いたらしい。さすがは短い間とはいえ、師と仰あおいだ聖騎士。

「頭を叩かれて記憶が回復？　つくづくいいかげんな野郎だね……」

　憎まれ口を叩く割りに、聖ラファエロから怒気が消えた。

「いきなりノリを変えやがって……。器用さばかりが先走っていた野郎も、ようやく『技を捨てる』のも『技』だと気づいたか」

「うん。まあ、そんなところかな。ここからは本当に、剣だけでや

るよ」

　答えるドニは、だらりと剣を下げたまま。

　これはいわば無の構えだ。無であるがゆえに、無限の変化を生み出せる。変幻自在ではまだ足りない。簡素にして変幻無む窮きゅう。陰いんと陽ようを極めるがごとく、矛む盾じゅんする二要素を渾こん然ぜん一いつ体たいに。

　あとはただ、無心に。

　無念無想。何も念じず何も思わず――。

　そこへ、聖ラファエロがイル・マエストロをまっすぐ突き込んでくる。

　ドニは無想のまま、擦り上げるような一ひと太た刀ちを繰りだした。これが上う手まく決まれば、下からの斬ざん撃げきを受けてイル・マエストロは高々と宙に跳ね上がるのだが――。

　ガッ！　キン！

　硬質の金属音が響く。決着はついた。

　高々と宙を舞ったのは、まがい物の剣――ドニの武器だった。

「……まあ、こんなところだろうよ。あたしの偉大さを思い知ったか？」

「まだ完成は遠いか。上う手まくいくときと、ダメなときがあるなー」

　飄ひよう然ぜんと師に告げられて、ドニは頭を振り振り言った。

「そりゃ剣術だけで勝負するなら、あたしが勝つに決まってる。積み重ねたものがちがいすぎるからね。……で、ついでに言うと、こんな立ち合いを何度したって修行の足しにはなるまいよ」

　不気味なほどの確信を込めた、聖ラファエロの教えだった。

「言いたかないけど、これが本当の命タマの奪とり合いなら、九割九分九厘りんおまえが勝つからさ。なあドニよ、今の勝負で一瞬で

も『死ぬかもしれない』とか思ったか？」

「そういえば全然なかったかな。何でだろ？」

「やっぱり阿あ呆ほうだねー。おまえがどこぞの神様から奪った、何でも斬り裂く権能——あれを使われたら、あたしに勝機はないだろう。……で、断言してやる。おまえはな、本当にヤバくなったら一瞬の躊ちゆう躇ちよもせず、あたしにあれを使うね。賭けたっていいね！」

　師匠の決めつけに、ドニは思わず口を尖とがらせた。

「うーん……僕だって騎士の端はしくれなんだから、『剣術だけ！』って約束は何としてでも守ろうとするんじゃないかなァ」

「はん！　神様まで殺そうってヤツのフェアプレイ精神なんざ、当てになるものか！」

　幾いく人にんものカンピオーネを知る聖騎士は、断言した。

「そんなヌルい勝負で無想の極意を得ようたァ、虫がよすぎる。いいかドニ、真に無想剣を会え得とくしたいのなら、てめえと同等以上の敵と腸はらわたを引っぱり合うような戦いをして、そのなかで無想の境地に至ってみな。それで初めて、己の血となり肉になるものさ」

「僕と同等以上の敵？」

「決まってる。神様か、同じカンピオーネだよ」

　のちに『剣の王』サルバトーレ・ドニの範はんとなる教えであった。

　そして、多くの人々を悩ませる奇行・凶行の遠因を作った聖ラファエロは、眉まゆをひそめてつぶやいた。

「そういえば、クラニチャールとブランデッリの小娘たちもいたんだっけね。よりにもよって、いちばんヤバイところに放り込みやがって！　あの娘どもが知恵のまわらない、この阿呆の同類でいてくれたらいいんだけどなァ！」

「終わったようね……」

「ああ。すごい立ち合いだった……」

　決闘の大部分を見届けて、エリカとリリアナはささやき合った。

　ふたりはまだ、例の地下聖堂にいた。そこからリリアナが『魔女の目』を飛ばし、ダンジョンさながらの複雑な地下通路を偵察。観みた情景は、魔術で作った水たまりに投影。

　その一部始終をエリカが見届け、道順を丸暗記。地下の構造まで推すい察さつ。

　かくして、ふたりは驚くほど短時間で脱出ルートを見み出いだした。

　地上に『魔女の目』を出すと、ドニ青年と聖ラファエロが死闘を繰り広げていた。

　これは視覚だけを飛ばす術なので、会話の内容まではわからない。

　しかし、ドニなる青年騎士のすさまじさは、エリカにもリリアナにも理解できた。

「いろいろ思うところはあるけど、まずは上に行きましょうか」

　エリカの誘いに、リリアナがうなずく。

　……二時間後、ふたりが地上に出ると、聖ラファエロが出迎えてくれた。

　聖騎士のうしろでは、ドニ青年がのほほんとした顔でまがい物の剣を抱えていた。あれを結構、気に入っているようだ。

「おひさしぶりです、聖ラファエロさま。そしてサルバトーレ卿――六人目のカンピオーネであらせられる御身へのご挨あい拶さつが遅れたこと、深くお詫わびいたします」

　エリカは淑しとやかに一礼した。決して卑ひ屈くつにはなるまい。しかし、礼は失しつしまい。

　ブランデッリ家の貴婦人として、矜きよう恃じを込めた所作だった。

「イタリアより神殺しが誕生したことをよろこばしく思います。いずれ我が《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》の総そう帥すいよりご挨拶もありましょうが、今はわたしよりの礼をお受けください」

　リリアナもきびきびと騎士の礼を行った。

　いかにも武ぶ人じんらしい、凛り々りしく涼やかな物言いだった。

『魔女の目』は音まで聞き取れない。ドニと聖ラファエロの会話は聞こえなかった。しかし、多くの状況がサルバトーレ・ドニの正体を明らかにしていた。

「……おまえに言ってるんだよ、阿呆」

「へえ？　何でまた、そんなご丁てい寧ねいに？　あ、君はエレノア・ビリンデッリで君はリラーナ・クロニクルだっけ？　僕、さっき記憶が戻ったんだ。今までありがとう！」

　師から注意を受け、若き魔王は脳天気に言った。

　彼とはすこし距離を置くべきだろう。エリカはひそかに誓った。

　彼はバカに見えるし、まちがいなく阿呆だとも思うが、とんでもない怪物だ。近づきすぎたら、きっととんでもない目に遭あう！

　さあ、あとは退散するだけ。エリカはリリアナに目配せした。

　失礼のない挨拶を残して、早々に立ち去るのだ！

「……何の説明もなしにドニの正体に気づくたァ、聡さといもんだ。やっぱり、アレに気づかないわけねえよな。おまえら、こんな短時間で出てきたってことは『写本』の術か？」

　聖ラファエロに言われて、ふたりは硬直した。

　おみごとな眼がん力りき。偉大な先せん達だつへの賞賛がこみ上げてくる。

……『写本』とは一時的に記憶力を引き上げ、見たものを丸暗記する上級魔術。エリカとリリアナはふたりで分担して、『ダヴィデによる勲の書』の前半と後半を丸ごと覚えてから地上へ向かったのである。

「せ、聖ラファエロさま、これは決して、あなたへの敬意が欠けているとかではなくて、何と言いますか、騎士としてあまりに耐えがたい誘惑だったために——！」

「ちっ、仕方ねえッ。代わりに、これをくれてやる！」

焦あせったリリアナの謝罪を最後まで聞かず、聖ラファエロは手のひらを開いた。

そこには鉄製の鍵かぎが載っていた。

「こいつはフィレンツェの小さな聖堂の鍵だ！　そこには迷路みたいな地下墓地カタコンベがあって、たくさんの罠わなで守られているッ。その奥にあたしの武器庫がある。こいつを持っていって、好きにしな！」

と、聖ラファエロは渋じゆう面めんで告げる。

へ？　銀髪の旧友は、きょとんと首をかしげた。

そしてエリカは、交換条件としては悪くないわとうなずいた。魔剣クオレ・ディ・レオーネとイル・マエストロ。その武器庫には、名高き双剣が眠っているはずなのだから！

「ど、どういうことだ、エリカ？」

「聖ラファエロさまはね、双剣をわたしたちに授けるから、『写本』を破らせろとおっしゃったのよ。あまり多くを望みすぎるのも分不相応だと思うし、いいんじゃないかしら」

「……ねえ師匠。剣をあげるなら、今渡してもいいんじゃないの？」

「フンッ。あの武器庫にはいろいろ侵入者を撃退する仕掛けが用意してあるんだ。無駄にしてたまるか！　それに、その娘っ子どもの腕なら上手いこと切り抜けるだろうよ！」

弟子の問いに、聖騎士が大人げなく答えている。

それを聞きながら、エリカは如じよオさいなく、そして抜かりなく訴えた。

「すぐれた武具を得るための試練とあらば、いくらでも望むところです。ただ、できれば聖ラファエロさまにもうひとつお願いしたき儀がございます」

「お願い、だとォ？」

「はい。わたくしとリリアナ卿きようが術でなく、自前の記憶力で盗み出したものには、どうぞお目こぼしいただきたく存じます」

この主張に、隣のリリアナが絶句した。

彼女たちが真っ先に読み、短時間でもしっかり覚えるほど熟読した部分。

いにしえの英雄が遺のこした、神をも傷つける『ダヴィデの言こと霊だま』——。これについてはお目こぼししろと、エリカは申し出たのだ。

くそッ、仕方ねえ！　聖ラファエロは伝でん法ぼうな口調で叫んだ。

「おいドニっ。魔導書を一冊、おまえに預けるからな。心して保管しろよ！　ああ、直接渡すのは不安だから、あとで信用できる知り合いを教えろ！　くそ、あたしはあの本のおもり役は、もう金こん輪りん際ざいゴメンだ！　めんどくせえ！」

「えーと、何を言いたいのか、よくわかんないよ師匠」

そして、ふたたびサン・ジョヴァンニ門。

サン・ジミニャーノの街の入り口に、エリカとリリアナはやってきた。

あのあと、いくつかの事後処理を済ませ、サルバトーレ卿と聖ラファエロに別れを告げ、ここまで戻ってきたのだ。

「待たせたな、エリカ。…………どう思う？」

「あら、聖ラファエロの真ま似ねをしたのね。悪くないわ。いいえ、かなりいいかも」

　街中のカフェで一服することに決めたふたり。

　洗面所を借りに奥へ行ったリリアナが、髪型を変えて戻ってきた。

　銀のロングヘアをポニーテールにまとめている。旧友の変化を眺めて、エリカは忌き憚たんなく意見を言った。

「そうか！　うん、正直わたしもなかなか似合っていると思う！」

　ちょっと興奮気味にリリアナがうなずく。

　例の魔導書発見でバタバタしたが、あこがれの人との出会いは彼女のテンションを上げたようだ。探たん索さくの下準備としては悪くない。

　エリカは、聖ラファエロからもらった鍵かぎを眺めた。

「さあ、これからフィレンツェに向かって、地下墓地とやらの下見をしましょう。あの二振りの魔剣を手に入れて、イタリア中にわたしたちの才気を知らしめてあげないと」

「ああ、望むところだ。……まあ、でも」

　リリアナはうなずき、それからため息をついた。

「どんな功績をあげても、カンピオーネ誕生のニュースに勝てるほどの衝撃度は出せないだろうが。まさか、あんな方が神殺しに成功されるとは……」

「それとも、あんな方だからこそ神とも戦えたのかしらね……」

　さっき別れたばかりの青年。

　彼の破は天てん荒こうさを思い返して、ふたりはつくづく感じ入った。

　……リリアナの携帯電話が着信音を奏かなでたのは、このとき

だった。

「おじいさまか。ちょっと失礼。どうしたのですか？　え？　あの御方が――侯こう爵しやく閣かつ下かがわたしたち魔女や巫み女こを必要として、呼び集めている？」

　しばらく話したあとで、リリアナは携帯をオフにした。

　無視しがたい単語を耳にしてしまった。エリカは遠慮なく訊たずねることにした。

「どうしたの？　あなたやクラニチャールのおじいさまが侯爵と呼ぶのだから……やっぱりヴォバン侯爵の関係で何か？」

「あ、ああ」

　戸惑った表情でリリアナは言う。

「あの方が近々、何十人もの巫女を必要とされるらしい。こちらの件が片づいたら、おまえも行けと祖そ父ふに言われてしまった」

「侯爵さまが巫女を？　バルカン半島の魔王さまも何をお考えか見当がつかないわね」

　サルバトーレ・ドニとデヤンスタール・ヴォバン。

　ふたりの魔王がいさかいを起こす原因となる、ジークフリート招しよう聘へいの儀式。

　そのはじまりに立ち合ったのだと知るよしもなく、ふたりの少女はフィレンツェへ向かう交通手段について討議をはじめた。

　車と運転手を調達すればいいとエリカは言い、リリアナは公共のバスを利用する方が時間的にも経済的にもメリットばかりだと主張。

　平行線をたどりつつも、何だかんだと夢中でおしゃべりするふたりであった。

第４話　黒王子、白き魔女、そして英雄の介添人

1

　クレタ島の物語は、ギリシア神話でも特に有名な部類であろう。

　王の后きさきが牛と姦かん通つうして生まれた、牛ぎゅう頭とう人じん身しんの怪物ミノタウロス。地下迷めい宮きゅうに閉じこめられた怪物のために、幼いギリシアの子供たちが生いけ贄にえとして定期的に差し出される。これを討うち果はたすべく、若き勇士テーセウスは迷宮に乗り込んでいく――。

　有名な『ミノタウロスの迷宮』の物語である。

「この神話で注目すべきは、后と姦通するのが『牛』である点だ」

　アレクサンドル・ガスコインは、コーンウォールの根ね城じろで語ったものだ。

　彼の異い名みようは黒王子ブラツクプリンスアレク。神速の貴公子といわれる。そして実は、世界各地の伝承や神話学に詳しい『王』でもあった。

　英才教育を受けた魔術師ではない。しかし、各種の術にも通つう暁ぎようしている。

　魔王カンピオーネとなったのは、一六歳のとき。

　以後の四年間、魔術界のシンクタンクともいうべき賢人議会と競い、オカルトの秘宝を求めて欧州各地に赴おもむき、神々や各地の魔術結社と戦ってきた。

その日々が、彼を一流の魔術師に育て上げたのかもしれない。

「古来、牛は大地の豊ほう穣じようを示すシンボルだ。聖せい獣じゆうであり、大地の神の化け身しんでもある。だからクレタの牛＝神と見なすことにしよう。すると、后＝巫み女こという解釈も成り立つ」

以下のような背景が、ミノタウロス伝説の原型だったのかもしれない。

ギリシアの都市国家群の黎れい明めい期き、近海のクレタ島には強力な文明が栄えていた。この島は定期的に、ギリシアから幼児を『貢みつぎ物もの』として送らせていた。この子供たちは島の豊穣神に捧ささげる『生け贄』であった。

幼児を贄に望むのは『牛』の神であり、女王ともいうべき巫女が仕つかえていた――。

「考古学的な裏付けも、皆かい無むではない。クレタの先史文明であるミノア文明の遺い跡せきから発見された大量の人骨を、生け贄に捧げられたものだとする仮説もある」

こうした知識をアレクが語るとき、たいてい魔術に詳しくない部下が相手である。

彼の結社『王おう立りつ工こう廠しよう』は、雑多な人材の寄せ集めである。

メンバーには強力な魔術師もいる。しかし、単なるオカルト研究家もいれば、悪あしき術師に身内を害されて復ふく讐しゆうにはやる素人しろうともいる。街のゴロツキ、窃せつ盗とうや詐さ欺ぎの常習犯、魔術や神の実在を知っただけの一般市民までいる。

アレクと共に、賢人議会をはじめとするエリート魔術師集団に敵対せんと望む者たち。

『王立工廠』メンバーの共通点は、ただそれだけかもしれない。

ゆえに、彼らのレベルはまちまちである。

リーダーのアレクが、魔術師にとっては常識レベルの講義をするゆえんだった。

側近——特にサー・アイスマンなどは、総そう帥すい自みずからがすることではないと、しばしば苦言を呈する。しかし、アレクはかまわず部下たちの面倒を見ていた。

（余談だが彼の宿敵である少女に、そこを『意外と豪快さに欠ける、チマチマした性格ですものね』と評されるときもある。するとアレクは憮ぶ然ぜんとし、配下の統とう率そつと教育は上に立つ者として当然の責務なのだと持論を語る）

あの講義をしたのはわずか二日前、コーンウォールの本拠地でだ。

閑かん静せいな田舎いなかにある美術館……と見せかけたアレク郎ろう党とうのアジトには、大だい英えい博物館や大英図書館が収蔵していた呪じゅ具ぐや霊れい宝ほう、魔導書などが山と陳ちん列れつされている。一年前、賢人議会との抗争が激化したとき、衝動的に強ごう奪だつしてやった品々だ。

そして、アレクが今いるのは、巨大な地下迷宮の最深層であった。

「くくくく……あと一歩で地上への再さい臨りんがかなうというときに、余よの大望は挫くじかれたか！　それもまた良し。爽そう快かいなり！」

地の底より響くがごとき、重厚な『まつろわぬ神』の声。

発するのは、横たわる牛頭の巨人。身の丈たけ三〇メートル近くはあるだろう。

筋きん骨こつ隆りゅう々りゅうたる巨体にまとうのは腰こし蓑みのと紅あかいマントのみ。しかし、この威い厳げんはどうだ。並の人間が彼を見れば、即座にひざまずき、臣しん従じゅうを叫ぶだろう。彼に死ねと命じられれば、即座に自死を選ぶだろう。

強きょう壮そうにして支配力に満ちた、猛たけ々だけしき『牛』の神。

かつてミノス王の名でギリシア神話にも登場した、クレタの豊ほう穣じょう神しんである。

あるいは、ミノタウロスと名づけるべきだろうか――。

「若き神殺しよ……雷らい光こうの燦きらめきを持つ戦士よ！　余の血と肉と力は、これより汝なんじの糧かてとならん！　余よを喰くらい、余の屍しかばねを乗り越え、さらなる強者の高みに昇るがよい！　おお天地よ、死に果つる余の黄よ泉み路じを開き、王への手た向むけとせよ！」

「……くそっ。死にかけのくせに、恥ずかしいポエムを詠よむな……ッ」

命尽つきゆく、巨大な牛頭神。

アレクはその傍かたわらでうずくまり、ぜいぜい息を荒らげていた。

限界を超えた激戦の結果、ノコギリで切られるような痛みが脳を苛さいなむ。体のダメージもすさまじく、特に心臓の痛みと動どう悸きがひどい。随ずい所しよの毛細血管、果ては一部の動どう脈みやくや静じよう脈みやくがぶちぶちと切れ、内出血を起こしている。

ついでにクハッと喀かつ血けつした。あちこち骨折もしているはずだ。

この惨さん状じように、牛頭神の大声が追い打ちをかける。正直、これだけで死にそうだ。

「では、さらば。さらばだ、神殺しよ！　汝なんじの生に呪のろいと闘争が尽きぬことを祈ろう！　無論、余の祈りがなくとも成じよう就じゆする願いであろうが！」

要するに、これからもおまえの人生は災難続きだと告げている。

これを遺ゆい言ごんに、神の肉体は煙のごとく消滅した。

代わりに一瞬だけ、アレクの背に重みが加わった。新たな権けん能のうを得たようだ。

「単なる興味半分の調査……軽い気持ちで来た結果が、これか……！」

これこそ我わが人生。改めて呪われる必要がないほど、災さい厄やくに満ちている。

アレクは舌打ちし、頭をかきむしった。

敵であれ味方であれ、近くに第三者がいれば決してしないはずの行為だ。彼は見栄っぱりなので、身だしなみや立ち居振る舞いには入念に気を遣つかうのだ。

だが、今はこの広い空間に彼しかいない。気をゆるめてもかまうまい。

……広大な地下迷宮の最深層。

そこは、直径一〇キロはありそうなドーム型の空くう洞どうだった。

むき出しの地面。巨大な空間。その中央には牛頭神を崇あがめるための祭さい壇だんと玉ぎよく座ざ。

迷宮もドーム空間も、一週間前まではクレタ島のどこにも存在しなかったものである。『まつろわぬミノス』顕けん現げんに伴ともない、神の権能が生み出した場所だった。

ボロボロの体に鞭むち打うって、アレクはどうにか地上へ出た。

（クレタ島ラシッティ高原の某ぼう所しよに誕生した大迷宮は、いずれ誰かに発見され、ミノタウロス伝説を偲しのぶ観光資源となるかもしれない。が、今のアレクにはどうでもよかった）

すこしだけ神速の権能を使った。

雷光のきらめきをまとうこと、体感時間で十数秒。

たったそれだけで、海沿いのリゾート地にあるホテルの前に着いた。

自分の部屋に置いておいた治ち癒ゆの霊れい薬やくを飲み、ベッドで眠ること六時間。目覚めると、夜になっていた。ついでに体の外傷もあらかた治っていた。

「あいかわらず無茶苦茶な体だ……」

　頭痛の方は完全に収まってはいない。しかし、だいぶマシになったか。

　吐はき気けと頭痛を堪こらえながら、身だしなみを整える。

　シャワーを浴び、ひげを剃そり、髪型を決める。シャツとスラックスを新しいものに。今はリゾート中、上着はいるまい。

　どれだけ疲ひ弊へいしていても、自みずからのスタイルを堅けん守しゅする。アレクのこだわりだった。

　ホテルのレストランでまずいシーフードをたいらげたあと、外に出た。落ち着いた雰ふん囲い気きの酒場があったので、カウンターに腰を落ち着ける。

　頼んだ酒を一口舐なめて、ようやく安あん堵どの気持ちが込み上げてきた。

　まったく、毎回毎回よく生き残るものだ。我ながら！

「ここにおいででしたか、アレク。この私を、よくも空港などに置き去りにしてくれたものです！　あなたはひどい男だ、本当に……！」

　後ろから声をかけられた。すばらしく渋い声で、かなり情けないことを言う。

　振り向くまでもない。サー・アイスマンだ。

　アレクは隣の席に側近が腰掛けるのを待ってから、つぶやいた。

「そろそろ『飛べないオランダ人アンフライング・ダッチマン』の伝説をくつがえしてもいい頃だと思うぞ。自らの弱点を克服するのは、人類にだけ許された特権なのだから」

「冗談じゃない！　あんな鉄のかたまりを克服する必要がどこにあるのです!?」

　アレクに仕える騎士ナイト、サー・アイスマン。

　本名はデニス何とかという、二〇代後半のオランダ人である。しかし、剛ごう毅きにして冷静沈着なる気性が、氷の男アイスマンの呼び名を彼にあたえた。英国で騎士叙じよ勲くんを受けた魔術師なので、卿サーも加えられた。

　そして重度の飛行機恐怖症であるため、『飛べないオランダ人』でもあった。

「百人、いえ千人の敵との戦いも受け容いれましょう。あなたと共に神と戦ったっていい。しかし、あの空飛ぶ鉄クズだけはべつです。あれは……人類の愚おろかさの象しよう徴ちようだ。人は空に挑いどむべきではなかったのだ……」

　迂う遠えんな言い回しによる、自己の正当化。

　しかし、このサー・アイスマンは勇者である。強者である。イタリア最高の英雄パオロ・ブランデッリとも互角に戦いうる、世界有数の騎士なのだ。

　人間、全すべて完かん璧ぺきとはいかないものだと、頭を振るアレクだった。

「仕方がなかったんだ。あと三〇分でドーバー海かい峡きようを渡る最後の便が出るというのに、おまえはトイレにこもりきりで……。あそこで見捨てたことを俺の過失と責める人間は、まあいるだろうが、俺を許す人間の方が多いはずだ」

「く、あやまるおつもりはないと。なんと非道な。ですが、いいでしょう、そちらは目をつぶりましょう。……それよりもアレク、戦いましたね？」

「何のことだ？」

「昨日、このクレタで『まつろわぬ神』が顕けん現げんしたと、報告があったのです」

　時間の問題だとは思っていたが、すでにバレていたか。アレクは肩をすくめた。

「神と交戦したことくらい、教えてくださってもいいでしょうに。御自身の戦いに関しては、あいかわらず意図的に情報の伝達を怠おこたりますな」

何を言っても言い訳になる。また、その理由を口にするわけにはいかない。

アレクはただグラスを持ち上げ、酒を舐なめた。

神速——賢人議会が『電光石火ブラックライトニング』と名づけた権能を切り札とする彼に、効果的に支援できる味方はすくない。彼に追いつける者がいないのだ。だから、自ら前線に出るときは、むしろひとりきりの方がやりやすかった。

「自分が役立たずだと知らされるのは、誰にとってもつらいものです。我らが王の細こまやかなお気き遣づかいには感じ入りますが、それでも私はあなたの安あん否ぴをまず知りたい。心にお留めいただければ幸いです」

アレクは黙って、酒さか壜びんをアイスマンの方へすべらせた。

詫わびを言う気はないが、酒をおごるくらいのことはできる。アイスマンも黙って酒壜を取り上げ、自分のグラスに琥こ珀はく色の液体を注ぎ込んだ。

「ところで、もうひとつ言わせていただきたいのですが」

「何だ？」

「わざわざクレタまで来て、ボウモアを頼むのはどうでしょう？　私も好きな酒です。かすかな潮しおの香りがたまらない。ですが、この時期の地ち中ちゆう海かいで、寒い国の酒を飲むべき理由もないように思われます」

スコッチウイスキーの銘めい酒しゆに、側近は文句をつけた。

先ほどアレクが奥の棚に鎮ちん座ざしているのを見つけて、ボトルで注文したのだ。この強い酒しゆ精せいには、アイリッシュの北海を想おもわせる潮しおの風味が隠されている。

「自分の好みを押し通して何が悪い？　そこがどこであろうと、己がまず何を欲するのかが最も重要なはずだ！」

「とはいえ、もうだいぶ暑い。素直に地ビールでも頼み、喉のどを潤うるおすのもいいのでは？」

　言い返したアレクに、アイスマンは冷静に意見する。

　暦こよみでいえば、五月の半ば頃である。

　しかし、地中海に浮かぶクレタ島はかなり暑くなっていた。半袖でもいいくらいだ。

　アレクは反論しようと、唇くちびるを舐なめた。たしかに旅情や季節感を感じづらいかもしれない。だが、俺はがっつくようにがぶがぶビールをあおる飲み方はきらいなのだ。やはり肝心なのはスタイルと美学を貫つらぬくことであって――

　言いかけて、やめた。

　白人の少女が近づいてきたからだ。

　幼い。一二、三歳前後。酒場に出入りする年齢でないのは明白だ。

　なのに、バーテンダーも他の客も一切とがめない。彼女の存在が目に入らないかのように、無視している。

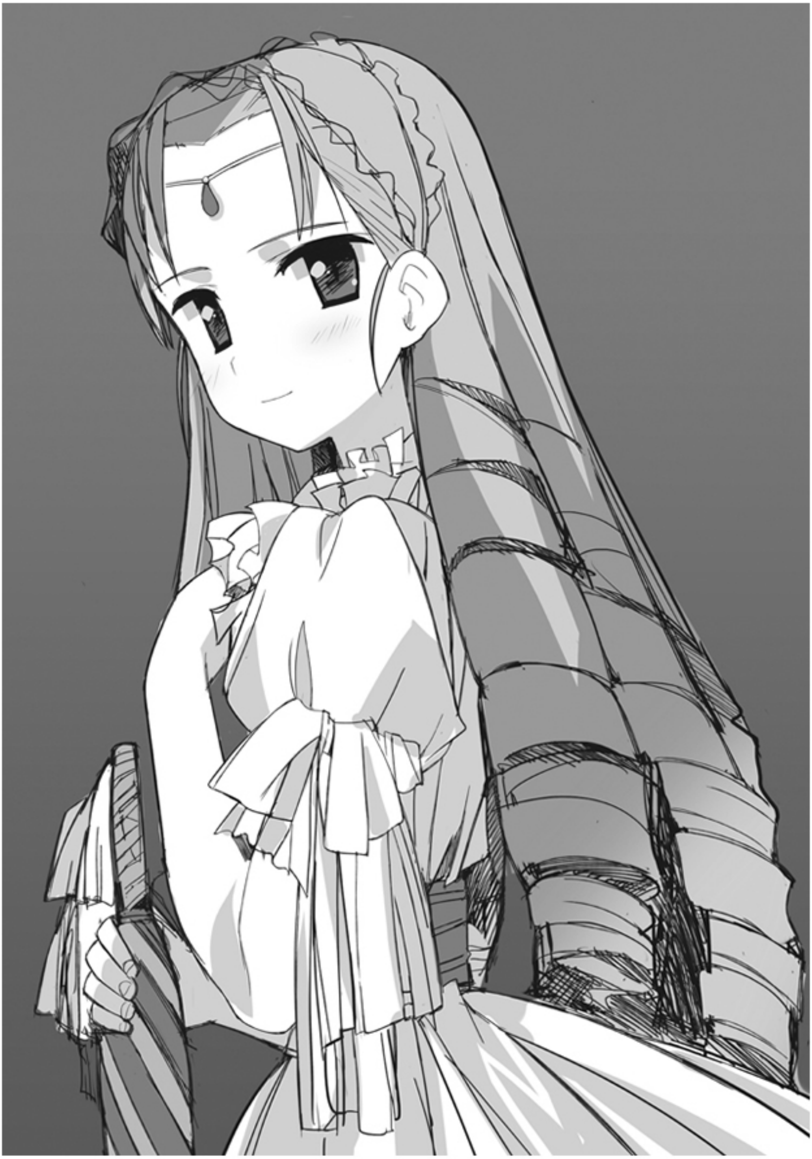
「あれは『隠れ身』の術か。俺たち以外の者からは隠れているわけだな」

「でしょうな。一部の魔女と妖精どもが得意とする術です」

　目配せを交わすアレクとサー・アイスマンの前に、少女がやってきた。

「はじめまして、王子の名で呼ばれる『王』よ。御身にひとつおうかがいしたき儀ぎが」

　白いサマードレスをまとった少女は、すばらしく美しかった。



まるで名めい匠しようの手によるアンティークドールのような——。この美少女から、アレクは超自然の者特有の非実在感をかぎ取った。

どう見ても普通の人間ではない。おそらく普通の魔術師でさえない。

只の勘かんだが、外れている気はしなかった。

「用があるなら、手短に話せ。俺は今、プライベートだ。貴様たちのように胡う散さんくさい連中の相手をする意欲はまったくない」

アレクは長身痩そう躯くの美男子である。

決して貴き種しゆではないが、天性の気品と態度の大きさゆえ『王子』の異名がついた。

サー・アイスマンもなかなかの容姿だ。彫ほりの深い、整った顔立ち。アレク以上に背が高く、横幅もがっしりとしている。薄手の背広をわずかに着き崩くずした姿には、かすかな男の色気さえ漂っていた。

ふたりで並んでいると、しばしば女性に声をかけられる。

視線を集める程度なら日常茶さ飯はん事じ。この幼女は、そういう手合いとは明らかに異なっていたのだが。——面倒くさい。アレクは簡潔に思った。

只者でなくとも、神に比べれば所しよ詮せんは小物。まったく好奇心を刺激されない。

「では、おっしゃるとおりにいたしましょう。王子、御身がこの地にいらしたのは、クレタのミノス神が《鋼はがね》であるか否いなかを確認するためでございましょうか？」

ほう？　アレクの好奇心がわずかに刺激された。

まさか通りすがりの少女に、一部とはいえ己の目的を看かん破ぱされるとは。

「中国の《鋼》である、牛ぎゆう頭とう鉄てつ身しんの軍神・蚩し

尤ゆう。あるいは、別名を牛ご頭ず親しん王のうともいう日本の素す戔さの嗚おの尊みことなどの名が、御身のご胸中にあったのではと思いまして」

　サー・アイスマンがちらりと目配せしてきた。

　自分が対応しようか、と訊きいている。しかし、アレクはかぶりを振った。

「当たってはいないが遠くもない。そうした『牛』の属性を持つ《鋼》の軍神は、ミノスのような大地の神の発展形なのか——そこを探るつもりで、ふらりと来ただけだ」

　まあ、気まぐれに選んだ旅先で神と戦うとは、予想外もいいところだったが……。

　それよりもこの少女、面白い質問をした。

「では、こちらの設問にも答えてもらおう。貴様は俺に《鋼》の話題を振ったな？　俺が『聖杯』の探求者だと知るものは多かろう。しかし、聖杯と軍神の関連性にも興味を持っていることは、ほとんど知られていないはずだ」

　黒王子アレクはカンピオーネになった翌年、『魔導の聖杯』を求めた。

　あのときは、賢人議会を中心とするイングランドの魔術師たちに宣戦布告した。

　さらに、欧州各地の上位魔術師がアレクの敵もしくは味方として英国に駆けつけてきた大抗争——魔導杯争奪戦。

　魔術の世界に身を置く者で、この一大イベントを知らぬ者はいまい。

「聖杯と軍神の共生関係への俺の興味を知るのは、ごく一部のテンプル騎士と、ごく一部の魔女だけだ。……おまえからは鉄の匂においがしない。騎士であるはずないな。だったら魔女か。それも並の者ではあるまい。——《神しん祖そ》というヤツか」

　常人離れした嗅きゆう覚かくと味覚は、アレクのひそかな特技である。

　さらにいえば、冷れい徹てつな理性と直感力が絶妙なまでに均きん衡こうした頭脳も。

　いくつかの論理的思考と、いくつかの勘かんにまかせた論理の飛躍を経へて、《神祖》という名称が浮かんできた。

　目の前の少女が、只の魔女や騎士だとは思わない。当たっているはずだ。

「……さすが、神殺しのなかでも特に聡そう明めいといわれる方。やはり、ご挨あい拶さつにうかがって正解でした。おそらく、御身とのおつきあいは長きに渡るものとなりましょう。このグィネヴィアを、どうぞよしなに――」

「挨拶だと？」

「ええ。御身が三柱目の神を屠ほふられたと聞き、是非お目通り願いたいと思いまして」

　では、おいとまいたします――。挨拶と微笑を残して、少女は消え去った。

　霧きりが晴れるようにはかなく、一瞬で。転移の術でも使ったか。

「あの者、グィネヴィアと申しておりましたね」

「ああ。ふざけた名前というか、考えさせられる名前というか、微妙なところだな」

　魔女が消え去るとサー・アイスマンがつぶやき、アレクは肩をすくめた。

「ふむ……。そうだアレク、ひとつ思いついたのですが」

　進言しようとする腹心のまじめな顔。しかし、なぜかイヤな予感がした。

「あのグィネヴィアなる者について、われわれの知る最も傑けつ出しゅつした魔女に訊ねてはいかがでしょう？　魔女たちのなかでも特に上位の者たちは、結社や国の垣かき根ねを越えた独特のネットワークで結ばれている。あの『姫』が何か知っている可能性はある

はずです」

　最も傑出した魔女！　アレクは仏ぶつ頂ちよう面づらになった。

　サー・アイスマンが勧すすめる理由はわかる。だが、そうしたいとは思わない。

「あなたがしばしば彼女と逢い引きされているのは、こういう事態に備えての下準備だと思っていたのですが……」

「バカを言うな！　あれは単に、あの女と俺が腐くされ縁えんなだけだッ。他意は全くない！」

2

　賢人議会の本部は、ロンドンのグリニッジが所在地である。

　建物はヴィクトリア朝時代に造られた、四階建ての赤あか煉れん瓦が建築。ウェストミンスターのスコットランドヤード庁ちよう舎しやに似ているかもしれない。

　ここの一階にある奥まった部屋が、賢人議会議長の執しつ務む室しつであった。

　歴代議長の執務室は、実は今も最上階にある。しかし、現議長は就しゆう任にんするなり引っ越しを宣言し、場所を改めた。

　その際、彼女はこう言ったという。

『エレベーターもない建物の最上階まで階段で登るなんて、まっぴら御ご免めんです』と。

　優美にしてたおやかな美少女。

　いずれ欧州最高の貴婦人になると目されている姫君。

　見た目と肩書きの割に、意外と歯に衣きぬ着きせぬ現議長は、秘書であり家庭教師でもある部下の話を聞き流していた。

「そもそも『魔ま導どうの聖せい杯はい』とは何でしょう？　古くは一二世紀の頃、聖地エルサレムをイスラム教徒より奪だつ還かんせんと欲する十字軍の参加者――のちにテンプル騎士団を結成する者たちが、必死に探し求めた霊れい宝ほうです。それは大地そのものが産み出すのにも等しい、巨大な呪じゅ力りょくをたくわえた容いれ物ものだといわれますね」

　語るのはパトリシア・エリクソン。

　ひっつめ髪に、細いフレームのメガネをかけている。歳としはたしか三〇過ぎだ。

「古来、聖杯は非常に稀まれではありますが、現世に顕けん現げんしたことがございます。すくなからぬ魔術師、そして聖杯探たん索さく者しゃたちが書き残したように。われわれが重視すべきは『聖なる資格者が聖杯を見み出いだしたとき、奇跡が起こる』という記録でしょう」

　女性らしいやわらかさに欠ける、ミス・エリクソンの硬い口調。

　聞いているだけで疲れてしまう。しかし賢人議会の現議長はその感想をおくびにも出さず、しっとりと微笑ほほえみながら口をはさんだ。

「ええ、知っているわ。『聖なる資格者』が具体的に何かは不明なこともね。……ねえミス・エリクソン。わたし、聖杯について改めて教わらなきゃいけないほど、出来の悪い生徒ではなかったはずよ？」

　そう。アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァールはとびきりの優等生だ。

　通称プリンセス・アリス。

　公こう爵しゃく家け令嬢でありながら、卓たく絶ぜつした霊力を誇る巫み女こ。そして、一六歳の若さで賢人議会議長に推すい薦せんされるに足る、学識の持ち主。

　もしかしたら、こと聖杯に関しては、彼女こそ世界有数の権けん威いかもしれない。

「知識の上ではたしかに。……ですが、実際の行動に活いかしてお

られません」

　メガネの位置を直しながら、ミス・エリクソンは冷たく言う。

　まさに『堅かた物ぶつで厳げん格かくな女家庭教師』を地でいく仕草。

　これでひそかに結婚相談所に会員登録しているのだから、人間は面白い（ちなみにアリスがそれを知っているのは、とある霊力を使ったときに偶然心をのぞけたからだ）。

「聖杯の奇跡について、もうひとつの伝承があるのも姫様はご存じですね？　ええ、聖杯の奇跡を引き起こす要因が『猛たける愚ぐ者しやの申し子』だとする異説も存在することを」

　アリスはおざなりに「そうだったかしら」と言った。

　もちろん、全て承知の上でとぼけている。尚なお、愚者の何たらが魔王カンピオーネを指す隠いん語ごであろうことは言うまでもない。

「長々と講義してるけど、結局何を言いたいの、ミス・エリクソン？」

「世界で最も『聖なる者』と呼ぶにふさわしいあなたと、『例の男』がしばしば軽けい率そつに接触している事実に、警けい鐘しようを鳴らしたいと思ったのです」

　やっぱりそこか。アリスはため息をついた。

「聖杯のもたらす奇跡……どう控えめに見積もっても、『まつろわぬ神』の顕現と大差ない厄やく災さいでしょう。災わざわいの申し子である『例の男』はともかく、あなたは魔術界に秩ちつ序じよをもたらすべく活動する賢人議会の長でございます。どうかご自じ重ちようくださいませ」

「……でも、すごく面白いのよねェ。ああやって外に出るの」

「姫様！」

　高貴な姫君で虚弱体質。このためアリスは、気軽な外出もままならない。

しかし、聖杯やら黒王子やらの『一いち大だい事じ出しゅつ来たい！』というときは、陣じん頭とうに立って問題解決に当たっても大目に見てもらえる。

ミス・エリクソンには悪いが、当分――いや、半永久的に控える気はない。

それに、ああして飛び回っていれば霊力がさらに強まって、虚弱な体もいっしょに強くなるかもしれないし……。

ご都合主義な期待を抱きながら、アリスは考えた。

そろそろ気むずかしい王子様が、新しい揉もめ事ごとの種を育てている頃だ。マメで仕事熱心な若者なのだ。世界をおびやかす大魔王という職務にも、精力的かつ細やかに取り組んでいる。きっと期待に応こたえてくれるはず――。

と考えていたら、執しつ務む机づくえの上に一通の書状が現れた。

これは『投とう函かん』の魔術で、遠方より送られてきたもの。子飼いの諜ちよう者じやが緊急の連絡を送ってくれたのだ。逸はやる心を抑おさえて、しとやかに書状を取り上げる。

『黒王子、クレタ島にて神を弑しいし奉たてまつる』

短い一文。しかし、アリスは胸のなかで快かい哉さいを叫んだ。

来た！　まさに待ち人来きたる。しかも、今回はひさしぶりの神殺し。これはいい具合に長期出張する口実になる！

「ごめんなさい、ミス・エリクソン。あなたのご忠告には、とても感謝しているわ。でも、ちょっと急用が入ったの。また体調不良ということでお願いね」

貴婦人の微笑と共に、要請する。

ただし、反論を受けつけるつもりはない。実質的には命令である。

「急用とはどういうことですか、姫様⁉」

「毎度おなじみ、世界の危機よ！」

　アリスは幽ゆう体たい分ぶん離りの霊力を使った。

　肉体から離脱したアストラル体が、空中に飛び出す。空からになった本体の方はふらっと倒れ込んだが、ミス・エリクソンが抱き止めてくれた。

　おみごと。さすがは我が家庭教師。

　賞賛しながら、『白き巫み女こ姫ひめ』の幽体は賢人議会の本部から飛び出していった。

3

　思い返せば四年前――。

　列車の震動に身をまかせながら、アレクは昔を思い出していた。

　ちなみに、ひとりきりである。海を渡るとき、常に船を利用したがるサー・アイスマンは、また置き去りにしてきた。

　ただし、今度は本人に断りを入れてから、だが。

　週に二度も神と戦うわけがないというアレクの主張を、向こうも認めたのだ。

　……それにしても、のんびり列車の旅など、いつ以来だろう？　カンピオーネになってからの四年間、おそろしく忙いそがしい日々を送ってきた。

　全ては四年前からはじまった。

　コーンウォールの田いなか舎街まちで育ったアレクは、ちょっとした魔術程度なら昔から知っていた。

　しかし、魔術よりもギャンブルや手品の方が得意だった。

　まあ、有力な魔術結社や賢人議会にスカウトされるようなエリー

トではない。

　魔術をアレクに教えたのは、素人しろうとのオカルト研究家だった父だ。彼が死の寸前まで探求していたテーマ――それが魔ま導どうの聖せい杯はい。

　これに没ぼつ頭とうしすぎたため母に見限られ、父は幼い自分をひとりで育てることになった。

　一六歳のとき、瀕ひん死しの父から教えられた暗号。そこからはじまる冒険。魔王カンピオーネを生み出すため、いにしえの修道士が作りかけ、そして作り損そこなった通過儀礼。あれを強運と勘かんの導みちびきでくぐり抜けて堕だ天てん使しレミエルと対たい峙じし、神速の権けん能のうを得た最初の戦い……。

　今となっては、全てがなつかしい。

　やがて聖杯を求める戦いに巻き込まれ、続いて自みずから聖杯を手に入れようと戦いを仕掛け、《王おう立りつ工こう廠しょう》を旗はた揚あげし――。

　これらのことがなければ、あの忌いまわしい少女とも出会わずに済んだのか。

　自分の敵てき愾がい心しんを妙にくすぐる四つ歳とし下したの『姫』。

　アレクは舌打ちした。あの傍はた迷めい惑わくな女の顔が、なぜかすぐ正面に見えてしまう。きっと、こんな追つい憶おくをしたせい――いや。

「どこにでもわいて出るのが貴様の特技だとは知っている。だが、もうすこし節度をわきまえるべきだろう。こういう場合、挨あい拶さつをしてから同席するのが礼儀だ」

「まあ。兇きよう悪あく無む惨ざんな大魔王さまが作法を説とくだなんて、きっと天変地異の前ぶれですね」

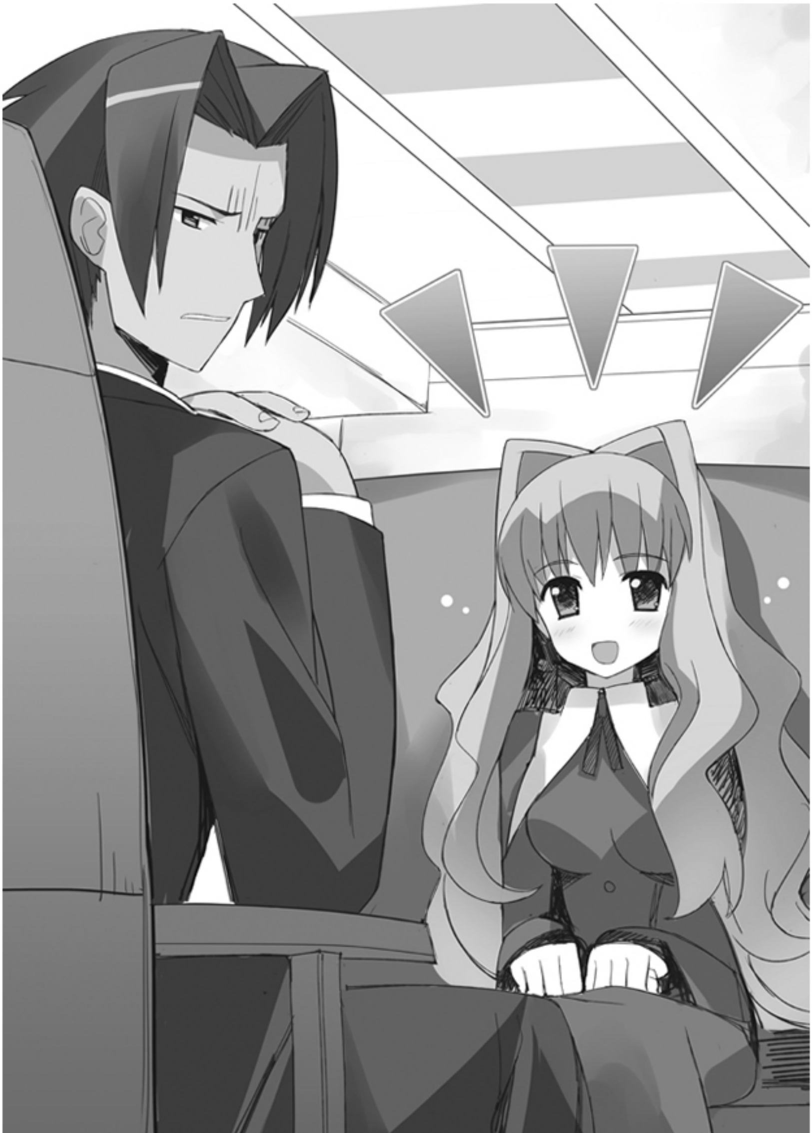
　プリンセス・アリスの幽ゆう体たいは、ぬけぬけと言った。

アレクのいたボックス席に、相席する乗客はいなかった。

だからだろう。英国最高の巫み女こにして欧州有数の魔女は、ふわふわ幽体を飛ばして向かい側の席に忍び込んできたのだ。

こちらの居場所を突き止めたのは、いつものように魔術と情報網を駆く使しした成果か。

そこまで察して、アレクは眉まゆをひそめた。……腐くされ縁えんではなかった。この女がつきまとってくるから、縁が切れないだけなのだ！



「クレタ島で第三の神殺しを成じよう就じゅされたと聞きました。あの島に眠っていた神……ということは、やはりミノスの神格を？」

「答える義理はないな。くだらない質問だ」

「図星を指されたときの、一瞬だけ右眉まゆをつり上げるお癖くせが出てますよ。やはりミノスを……今度はどのような権能になるのかしら？　きっとあなたにお似合いの、ひねくれているうえにまわりくどい力なのでしょうけど」

　いちいち突っかかってくる、うるさい女だった。

　初めて会ったのは彼女が一二歳のとき。しかし、当時からすでに可愛かわいげがなかった。

　齢よわい一二にして、魔王カンピオーネに買収と談合を持ちかけてきた病弱な姫！

　不愉快な出会いの顚てん末まつを思い出して、アレクは舌打ちした。

「……そういえば、歴代のイングランド王家が縁えん戚せき関係を捏ねつ造ぞうした、無能な王がいたな」

　やや唐とう突とつに話題を変える。

　この面倒な出会いを、すこしは生産的なものに変えなくては。

「イングランドの紅あかき竜たる英雄に、ひどいおっしゃりよう。……言わんとするところは理解できますけど。あの方、前半生はともかく、途中からひどいですものね」

　アレクの振った話題に、アリスが食いついてきた。

　おっとりした見た目のくせに毒どく舌ぜつ家かの少女は、詩を吟ぎんじるように語り出した。

「伝説の英国王アーサー。サクソン人やピクト人、スコット人の侵攻に悩まされるブリテン島を統一し、守護した聖なる王。魔剣エクスカリバーを一振りすれば一〇〇人の敵を屠ほふる不死身の英

雄……。円卓の騎士を率ひきいて、連戦連勝」

「だが妻と腹ふく心しんの不ふ倫りんに気づかず、配下の結束を致ち命めい的てきに弱める原因を自ら作った」

「気づきながら見て見ぬふりをした……と解釈すれば、メロドラマにはなるでしょうけど。戦記物語の君主さまとしては、ちょっとダメダメですものね。国を滅ほろぼぼした理由も、結局は内乱を鎮ちん圧あつできなかっただけですし」

　皮肉のスパイスを利きかせながら、アリスはにこやかに言った。

「戦場の指揮官、ひとりの戦士としてはとびきり優秀。でも政治家、君主、夫としては、どれも最低ランク……というところでしょうか」

「こんな無能の復活を望む輩やからの気が知れない。俺なら絶対に御ご免めんこうむる」

　そう言ってから、アレクは付け加えた。

「だがイングランド、ウェールズ、アイルランド、スコットランド……さらにはフランスや欧州の各地において、最も権けん威いある英雄になった。なかなか一ひと筋すじ縄なわではいかない男だ」

「ええ。さすがは『かつての、そして未来の王』」

　アリスが引いたのは、アーサー王伝説を象しよう徴ちようする名文だ。

　サー・トーマス・マロリーが『アーサー王の死』に記しるした、有名な墓ぼ碑ひ銘めい。

『HIC JATEC ARTHURS,REX QUONDAM REX QUEFUTURUS ——かつての、そして未来の王アーサー、ここに眠る』である。

　かの伝説の王は、過去の支配者であるに留とどまらない。

　未来の世でも甦よみがえり、ふたたび王として降こう臨りんする。そう、アーサーは致命傷を負ったカムランの戦いのあと、妖よう精せいの島アヴァロンで眠りながら傷を癒いやし、覚かく醒せいの時を待っているのだから！

　ゆえに彼は『かつての、そして未来の王』なのだ。

「……思い出しました。たしか一年くらい前に、ふたりでアーサー王伝説の考察をしたことがありましたね。聖杯探たん索さくの一環として。どうして、また同じことを？」

　フン。アレクは鼻で笑い、答えなかった。

　それを言うのはまだ早すぎる。この女をもうすこし乗せなくては。

「あら、何かお考えのようですね。いいでしょう、おつきあいしますわ。……アレクサンドル、あなたはあのとき、歴史と文学を超えた先にこそ、アーサー王伝説の真実があるだろうとおっしゃいました」

「ああ。歴史としては不正確。文学としては混こん沌とん。それがあの伝説の特とく徴ちようだからな」

　アリスの問いかけに、アレクはゆっくりうなずいた。

「まず歴史としてのアーサーを再確認するとしよう。言うまでもないが、ヤツは架か空くうの人物に過ぎない。しかし、モデルとなった人間は実在したかもしれない」

「ええ。もしいたのなら、五、六世紀頃のイングランドに」

　この辺りの詳細は、魔王や白き巫女姫でなくとも知る者は多い。

　英国には『アーサリアン』と呼ばれる、アーサー王マニアがあちこちにいるのだ。

　彼らに訊きけば、即答するだろう。

　六世紀後半から、ブリテン島では『アーサー』という名前が急増する。同名の著名な人物がにわかに頭とう角かくを現し、民衆の人気を集めた。彼にあやかって、アーサーと名づけられる子供が増えたのだろう……と。

「しかし、アーサーのモデルが実在したとしても、彼は英国王ではない」

「当時はブリタニア……独立国ではなく、一応はローマ帝国の属ぞく州しゆうですものね。本国から見放された辺境の領土とはいえ、『王』を僭せん称しようするなど許されないでしょう」

　だから、アーサーの原型といわれる人物はローマゆかりの武将が多い。

　特にアルトリウス（英国風にいえばアーサー！）の名を持つ人物は、有力な候補となる。

　だが、当時のイングランドについて記した歴史文ぶん献けんがない。だから候補者を特定できないのだった。

　ともあれ、五、六世紀頃のブリテン島は混こん沌とんとした政治状況にあった。

　さらにいえば、当時のイングランドに住んでいたのは今日でいうケルト人であり、彼らを外から脅おどかしていたサクソン人の子孫こそが現代の英国人であり、サクソン人に逐おわれてケルト人は現代のウェールズやアイルランドに逃れた（この歴史的経けい緯いは、民族問題の火種として今も英国圏でくすぶり続けている）。

　尚なお、アーサー王のネームバリューを最も欲したのは、歴代イングランド王家である。

　一三世紀のプランタジネット朝から、この傾向は顕けん著ちょになっていく。

　英国王家は一一世紀のノルマン大遠征コンクエスト以来、ほとんどが外国から来た征服者の一族なのだ。彼らは英国を支配する大義名分として、『かつての、そして未来の王』の末まつ裔えいであると声こわ高だかに主張し、系図をでっちあげたのだった。

「しかし、歴史に残されたアーサーの痕こん跡せきは結局のところ皆かい無むだ。ヤツを伝説の王にせしめたのは、むしろ文学の功績だろう」

　列車に揺ゆられながら、アレクは『世間話』を続ける。

　語りながら、思考を整理する。思い浮かぶのは、先日会った少女

のことだ。

「ええ。十世紀の『カンブリア年代記』の時点では、アーサーは只の将軍に過ぎません。しかし一一三五年の『ブリタニア列王記』では王として登場し、魔術師マーリンと共演するようになり、魔剣カリブルヌスの所有者となりました」

　アリスの方は、いたずらっぽく瞳ひとみを輝かせていた。

　しかし、彼女が真に面白がっているのは、むしろアレクとの駆け引きだろう。

「この『ブリタニア列王記』こそアーサー王文学の原点ですね。これが翻ほん訳やくされてフランスに輸出され、あちらの宮きゅう廷てい詩人たちがさまざまなエピソードを後付けしていったものが、またイングランドに逆輸入されて——」

「アーサー王物語の大まかな形ができあがるわけだ」

　かの王の佩はい剣けんをエクスカリバーと改名し、湖の騎士ランスロットや王妃グィネヴィアを登場人物に加えたのも、大陸の詩人たちである。

　石に突き刺さった魔剣を引き抜き、王になる逸いつ話わを書いたのもそうだ。

「このように、アーサーの物語には人じん為い的な改変が多すぎる。これではむしろ創作であり文学だ。……にもかかわらず、この男は伝説の英雄として語り継がれている。そして事実、明らかな《鋼》の属性を持つ軍神でもある。まったく不可解な存在だ！」

　ついにアレクは、本題に切り込んでいった。

「『石に突き刺さった剣』は、騎馬民族スキタイが軍神の象徴としたモチーフだ。これを得ることで若きアーサーは王となる。さらにエクスカリバーの鞘さやには、所有者を不死身にする魔力があった。『戦場における不死』——これも《鋼》の特徴だ！」

　軍神・武神・戦神・闘神。

　戦いを生なり業わいとする神々に、《鋼》と呼ばれるグループがある。存在自体が『剣』の暗喩メタフアーであり、生ける剣として

外敵をまつろわす。

　それが《鋼》の軍神たちだ。

　その発はつ祥しよう・伝でん播ぱには騎馬民族スキタイが深くかかわったと目される。

「まあ、こちらはひとまず脇わきに置こう。前回の聖杯探索のときから、俺はある英雄の正体について考えていた。きっかけをくれたのは、他ならぬ貴様だったが」

「まあ、わたしが？」

「覚えているか？　貴様は前に、湖みずうみのランスロットを《鋼》の英雄だと言った」

　ランスロット・デュ・ラック。

　ランスロ、ラーンスロットなどとも表記される。

　アーサー王の親友にして第一の騎士。円卓でも最強を誇り、人柄も高こう潔けつ。しかし、アーサーの妻・王おう妃ひグィネヴィアと不倫関係にあり、その罪ゆえに『清らかなる騎士』の前にのみ現れる聖杯を手に入れることができない――。

「初期のアーサー王伝説に登場する仲間たち……ケイ卿、ガウェイン卿、ベディヴィエール卿などは、ケルトの神話にもともとの姿を確認できる神々だ。河の神カイ、闘神グワルフマイ、隻せき腕わんのいくさ神ベドウィールなどだな。だが、一二世紀頃から登場するランスロットの出しゆつ自じは不明だ」

　なめらかに語るアレクを前にして、アリスは珍しくそっぽを向いていた。

　ひさしぶりに、彼女の急所を突くことができたようだ。

「ランスロットの原型をケルトの万能の神、長き腕のルーとする説もある。しかし、これは根拠がかなり薄弱だ。むしろランスロットは、メロドラマ好きの貴族女に媚こびるため、詩人たちが勝手に創作した女受けのいい登場人物……という説の方が、まだ説得力がある」

にもかかわらず、あるときアリスは言い切ったのだ。

ランスロット・デュ・ラックは《鋼》の軍神である、と——。

「でも、ランスロット卿の育ての親は『湖の貴婦人』。英雄アキレスを冥めい府ふの河にひたし、不死に変えた母テティスのように、水に関係する女神との共生関係は《鋼》の特徴のひとつです。生ける剣の神である《鋼》は、鍛きたえた剣を冷やす水と深い縁を持つものですし」

「逆を言えば、その程度しかランスロットには《鋼》らしき特徴がない」

にやりと嗤わらい、アレクは旧きゆう敵てきを追い詰める。

「だったら、只の軍神でもいいはずだ。わざわざ《鋼》に分類せずともな」

「…………」

「だが、実は貴様と同じように、ランスロットを《鋼》と断じたレポートにひとつだけ心当たりがある。貴様たち賢人議会が大英図書館に渡して、死蔵させていたものだ。俺がいつだったか奪い取った文書に交ざっていたぞ」

あれはたしか、グリニッジで一時期学び、のちにアジアにまでフィールドワークに赴おもむいたという研究者のレポートだった。

その人物とアリスの共通点から、アレクは一連の推論を思いついたのである。

「あいかわらず細かすぎるところに気がつく人ですね！　魔王のくせに！」

ついにアリスが逆ギレした。

「その反応から察するに、やはりランスロットは魔女——それもかなり上位の魔女たちの間でのみ、秘事として伝えられる神格だったか」

「ええ！　アレクサンドル、あなたは最低です——ッ。ついうっかりの一言をいつまでも覚えていて、こんなふうにほじくり返すだな

んて！　男の風上にも置けない卑ひ劣れつ漢かんです。非紳士的にも程があります。騎士道精神にも欠けています！」

「何とでも言え。貴様の言うとおり、俺は正しよう真しん正しよう銘めいの大魔王だからな」

　会心の勝利。アレクは溜りゆう飲いんの下がる思いで勝ち誇った。

　四つも歳とし下したの少女相手に、ちょっと大人げないかなと思いつつ……。

「ああ、もう！　それでこの島に来ていたのですね！　もしかしたらと思ったけど、でもきっと大丈夫と踏んでいたのに！」

「前にも言ったが、貴様は無駄に楽観的すぎる。最悪の状況を常に想定しておくべきだ」

「余計なお世話ですッ！」

　ふたりの乗る列車は、ほどなく停止した。

　旅行用バッグと共にアレクは下車し、不ふ機き嫌げんそうなアリスもついてくる。

「ねえアレクサンドル、ここからもっとかかるようなら、いっそ『電光石火ブラツクライトニング』の権能を使ってはいかが？　あれなら、すぐに目的地へ到着できるでしょう？　手っ取り早くていいと思いますよ。わたし、もう列車とかに乗るの、飽あきてしまって……」

「わがままな貴様の忍耐力を養う、いい訓練になるな。文句があるならついてくるな」

　冷たく応じてから、アレクはバス停を探す。

　彼はたしかに神速の使い手だが、そうそう気軽に走りまわるわけにはいかない。あの権能には、いろいろ厄やつ介かいな落とし穴が多いのだから……。

　アレクたちが立ち寄った閑かん静せいな小都市の名を、ヌオロという。

　この市があるのはイタリア、サルデーニャ島である。ギリシア領のクレタ島と同じく、地ち中ちゆう海かいに面している。

　目的の街オリエーナまでは、まだ数十分ほどバスに揺られる必要があった。

4

　サルデーニャ島内陸部の田いなか舎街まち、オリエーナ。

　観光名所はないが、風ふう光こう明めい媚びなところだ。のどかに森や畑が広がる風景には、ごちゃごちゃした大都会にはない心地よさがある。

　目当ての家がどこにあるかは、すでに把は握あく済みだ。

　アレクは迷うことなくスタスタと歩く。その後ろにアリスの霊体が歩くふりをして続く。

　やがてふたりは、小さな家の前に到着した。

　こぢんまりとした家か屋おくと庭。主にガーデニングの趣味はないらしく、庭には雑草が生い茂っている。しかし、花か壇だんにはさまざまなハーブや花々も植えられてあった。全体的に、不思議なあやしさがにじみ出る家だった。

　さすが魔女の家。うなずくアレクに、後ろのプリンセスが言った。

「アポイントメントの方は大丈夫ですか？　ここまで来てお留守だったら……」

「問題ない。すでに手配済みだ」

「あいかわらず、細かいところにも抜かりがないのですね」

　大おお雑ざつ把ぱな貴様と比べれば、誰でも几き帳ちよう面めんになる。

　憎まれ口を叩たたこうとしてやめた。ドアから家主らしき女性が登場したからだ。

「どうやら我が家のご客人と見て、まちがいないようだな。ちがっていたら申し訳ないが、私はルクレチア・ゾラという。あなたがたは――おやおや、ひとり訊きくまでもない旧きゅう知ちがいるじゃないか」

　気けだるそうな瞳ひとみが印象的な、妙齢の美女だった。

　ゆったりとしたワンピース姿。しかし、官能的な肢し体たいの持ち主だと容易に察せられる。

　彼女こそルクレチア・ゾラ。サルデーニャの魔女と呼ばれる、最上位の魔女のひとりだ。彼女は同等の魔女仲間を、面白そうに眺ながめていた。

「おひさしぶりです、おばさま。お会いするのは二年ぶりかしら」

「……ああ、それくらいになるな。あのときと変わらず失礼な子だ。やはりプリンセスというご身分は、礼を学ぶのには向かぬ立場なのだな。私のような若々しい美女を『おばさま』などと――」

「まあ。つまり『おばあさま』と呼んで、年長者への礼を示せとおっしゃるのですね」

　親しげな口を利きくアリスとルクレチア。

　やはり、上位魔女たちの間には古来のネットワークがあり、今日でも機能しているのだ。推すい測そくどおりだとうなずくアレクに、サルデーニャの魔女は目を向けた。

「もはや訊くまでもないが、礼儀としてうかがおう。あなたがアレクサンドル・ガスコイン――黒王子と呼ばれるカンピオーネ殿か？」

「そのとおりだ。あなたとお会いできて光栄だ、魔女殿」

「私の方こそ。だが王子殿、あなたにひとつ申し上げたいことがある」

　カンピオーネを前にして、ルクレチアは畏い怖ふも敵意も示さな

い。

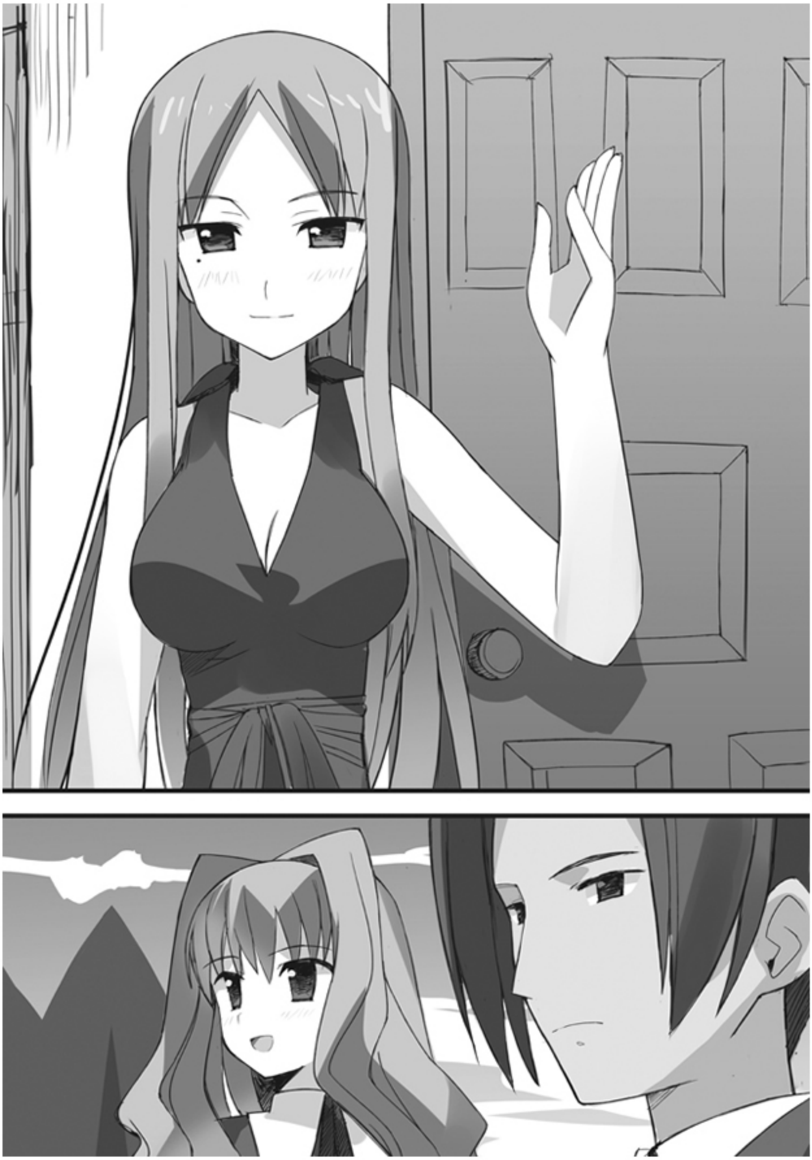
　みごとな平常心だとアレクは感心した。そして、続く魔女の発言に憮ぶ然ぜんとした。

「若くしてカンピオーネとなられた御ご仁じんが傲ごう岸がん不ふ遜そんとなるのは、致し方のないところ。しかし、あなたの名前で『明日そちらへうかがう。お会いしたい』とだけ手紙で報しらせるのは、いかがなものだろう？　少々心臓に悪いな。願わくば、次からデートの誘いはもっと紳士的にやっていただきたいと思う」

　王子の呼び名が泣くではないか――皮肉っぽく付け足された。

「仕方ありませんわ、おばさま。傲岸なのではなく、レディの扱いが下へ手たくそなのです。大目に見てあげてくださいませ」

　今度はアリスまで呆あきれた口ぶりで言い出した！



「もう……アポイントメントが聞いて呆れます。アレクサンドル、あなたって本当に見た目ほど女性に慣れてはいないのですね。世間のお話を聞いていると、中学生の男の子でもあなたより上手くやれるような気がしてきます」

　せっかくマメな性格なのに台なしだわ。そう言い添えるおまけつきで。

「余計なお世話だ！　それよりもルクレチア・ゾラ、俺はあなたと話がある！」

　気まずさをごまかすために、大声を出す。

　アレクは長老格の——しかし美しき魔女を、真っ向からにらんだ。

「あなたをこの道の権けん威いと見込んで、是ぜ非ひご教示願いたい。《鋼はがね》の神ランスロット・デュ・ラックと、あなたがた魔女がいかなる関係にあるかを」

「ほう……その用向きであれば、こちらの姫に訊たずねる選せん択たく肢しもあると思うが」

　アレクとアリスを見比べながら、ルクレチアは愉たのしげに言った。

「複雑ないきさつがあるようだな。まあ、いいさ。聖せい杯はい探たん索さく者しゃでもあるカンピオーネ殿が生まれたと聞いたときから、いつかこのような機会があるかもと思っていた。まずは粗末な我が家にあがっていただこう！」

　家のなかに戻るルクレチアにアリスも続き、最後にアレクも扉をくぐる。

　魔女の館やかたのドアは、手をふれずとも勝手に動き、バタンと勢いよく閉まるのだった。

「英雄ランスロットについて語る前に、私もおうかがいしてよろしいか？」

　居間に落ち着くと、ルクレチアは言った。

　三人分のハーブティーを載のせたテーブルの周囲に、皆で腰かけている。

「かまわない。こちらの問いに答えてもらえるのだ。俺も相応の礼を尽くす」

「……ほんと、魔王のくせにこんなところばっかり紳士ぶるのですね。今後のステップアップの目標は、ヴォバン侯こう爵しやくのようなスケール感を身につけることかしら」

　アリスのつぶやきを、アレクは渋じゆう面めんで黙殺した。

　ここで『あんな知的ぶってるだけの野や蛮ばん人じんといっしょにするな！』とわめくのは、品位がなさすぎる。無視がいちばんだ。

「ではお訊きしよう。王子殿、あなたはなぜ魔ま導どうの聖杯を求める？」

　からかうような雰ふん囲い気きから一転。ルクレチアは重々しく問いかけてきた。

「莫ばく大だいな呪じゆ力りよくのプールという以外、たいしたことの判明していない霊宝だ。しかし、これをあなたが――カンピオーネである王子殿が入手されれば、どのような争乱の火種となるか、わかったものではない。……かつて、あなたがあれの贋がん作さくを手中に収めかけたときでさえ、あれだけの抗争となった」

　アレクはこの四年間で、二回の聖杯探索を行っている。

　一度目はカンピオーネになった翌年。欠けつ地ち王おうジョンが入手し、秘ひ匿とくしたという魔導の聖杯が顕あらわれ、これが贋作であったと判明するまでの争奪戦である。

　二度目は昨年の出来事だ。

　古き異い端たんの修道士たちが発見したというアーサー王の墓所と、妖精境アヴァロンを目指す冒険。かの地にこそ魔導の聖杯は眠るといわれた。結局、修道士たちの見み出いだした場所はまったく見当ちがいであると判明して、探索は終了した。

「あなたが――カンピオーネであるあなたが聖杯の大呪力を手にすれば、天地を引き裂き、世界の改変すら行えるようになるかもしれない。あるいは『まつろわぬ神』さえ一いつ蹴しゆうする史上最強の戦士となるかもしれない。それを恐れ、もしくは期待して、魔術にかかわる多くの者たちがリアクションを起こす。……そこまでの混乱を起こしてまで、あなたが聖杯を欲する理由は何だ？　ご教示願いたい」

「調べてみたいだけだ」

「……は？」

　短い返答に、ルクレチアが首をかしげる。言葉が足らなかったか。

「単純な話だ。俺はあれがどういうものかを確認してみたい。この目で見て、実際どのような性質かを見定めてみたい。そのうえで要いるものなら手元に置き、不要なら放り捨てる。そのせいで周囲がガタガタするのはわかるが、まあ――」

　知ったことじゃないな。

　淡々と言うと、隣にいるアリスに肩をすくめられた。

「おばさま。アレクサンドルもカンピオーネなのです。妙に几帳面なせいで豪快さに欠けるように思えますけど、やっぱり究きゆう極きよく的てきには自分勝手な方なのです。自分の世界に閉じこもる気質な分、傍はた迷めい惑わくさがピンポイントといいますか……」

「本当にこだわってるところ以外でなら、まともっぽく振る舞える性格なのだな」

　ルクレチアがポンと手を打った。

「意外と話のわかる感じだから、妙な気分だったんだ。うん、しかし、これならたしかにまあ、ちょっと毛色はちがうが、やはり神殺しの系けい譜ふに――」

「俺が人格に欠陥のある輩やからであるかのように語るのは、やめてもらおうか！」

つい声を荒らげてしまった。

コホン。アレクは咳せき払ばらいして、取りつくろう。

「そちらの要望に応こたえたんだ。教えてもらおう、湖みずうみのランスロットとは何なのか」

「かまわんよ。……しかし、妙な神格に目をつけられたものだな」

からかいの色がルクレチアの瞳に戻ってきた。

アレクは生き真ま面じ目めな態度を崩くずさないまま、かぶりを振る。

「そうでもないだろう。あれはアーサー王以上に正体不明の代しろ物ものだ。アーサーという英雄の起源は、おそらく実在したであろう武将だと見当はつく。しかし、ランスロットの起源はどうにも追いかけようがない。情報がすくなすぎる」

ここで魔女ふたりの美び貌ぼうを冷ややかに見つめてやった。

「しかし、この正体不明の英雄を《鋼》の軍神だと、ふたりの魔女が断じている。ひとりはそこの姫君、もうひとりはあなただ」

「申し訳ございません、おばさま。彼はおばさまのレポートを読んでいるのです」

「レポート……？　ああ、あれか」

ルクレチアはすこし考えてからうなずいた。

「ふむ。提出期限ぎりぎりで書きなぐったのが災わざわいしたか」

「仕方ありません。あのレベルの研究報告は、ディオゲネス・クラブのおじいちゃん賢人しか読みませんもの。うっかり口く伝でんの知識を書いても、あの人たちが洩もらすはずありませんし……。ええ、つい口も軽くなっちゃいます。わかりますっ」

プリンセスは機き密みつ漏ろう洩えいの責任に背を向けたいらしい。

いずれ、これをネタに逆襲してやろう。そう思うアレクに、サル

デーニャの魔女はおもむろに告げた。

「ランスロット・デュ・ラックは最高位の魔女……わたしのように地の位くらいを極きわめるか、姫君のように天の位を極めた魔女たちの守護神だ」

　と。ほう——とアレクは感かん嘆たんした。

「といっても、たいして御ご利り益やくはない。長々と儀式を行えば、神しん託たくをひとつふたつ授けてくれる程度だろうか。われわれに降こう臨りん術じゅつの資質でもあれば、我が身に神力を降ろすほどの荒技にも応じていただけるかもしれんがね」

　背はい徳とくの英雄神と、いにしえの巫み女この末まつ裔えいたる魔女たちの共生関係。

　アレクはひそかに興奮した。好奇心を刺激されるテーマだ。実に興味深い。探ってみたい。しかし、今はあの女について聞き出さねば——。

「天地を極めるに至った魔女にのみ、心を許す女好きの英雄か……。《神しん祖そ》とやらにとっては、どういう存在なのだ？」

　ついに、この単語を口にした。

　とぼけられたら面白くない。十分に前振りをして、切り札にするつもりだったのだ。

「アレクサンドル……もしかして《神祖》のどなたかと会われたの？」

「つい先日な。俺の前に顕あらわれた者は、グィネヴィアと名乗った。知り合いか？」

　プリンセスから、いつものうわついた態度が消えた。

　真剣な声こわ音ねでの問いに答えながら、アレクはひそかに『よし！』と勝ち誇った。

「白き姫といえども、まだ《神祖》と面識はないだろうさ。特にグィネヴィアなる媛ひめは、神祖の女王となるべき御仁。人を越え

女を越えた、聖なる半神でもある娘むすめ御ごだ。滅めつ多たなことでは人前に出てこない」

　口をはさんできた老魔女のなつかしげな顔を見て、アレクは了解した。

　隠すつもりはないのだ。ならば、遠慮なく訊ける。

「ルクレチア・ゾラ。《神祖》グィネヴィアとあなたは、どういう関係だ？」

「かつての共同研究者、というところか。……昔、かの媛が転生して間もなかった頃、私に持ちかけてきたのさ」

　――《鋼》に興味があるのなら『この世の最後に顕れる王』を共に見つけ出さないか。

「そうグィネヴィアは私を誘い、私はそれに乗った」

「この世の最後に顕れる王、だと？」

「おばさま、それは一体どのような……？」

　年少者ふたりが同時に訊ねたとき。

　アレクの持つ携帯電話がぶるぶると振動した。チッ、いいところでと舌打ちする。

　しかし、この番号を知るのはわずかな側近のみ。液晶を見る。サー・アイスマンからだ。すこし考え、「失礼」と断ってからアレクは電話に出た。

『……あなたという男は、つくづく神秘と驚異に愛されているようですね。ついでに危険と冒険にも。今回は本当に思い知らされましたよ、アレク』

「どういう意味だ？　おまえは今、どこにいる？」

『私は、先ほどサルデーニャのカリアリ港に着いたところです。船ではるばるクレタ島から渡ってきてね。到着後、コーンウォールの本部に連絡を入れたら、報告を受けました』

「報告？　わざわざ総そう帥すいである俺に伝えるほどの、か？」

『ええ、極めて重大な報告です。一時間ほど前、サルデーニャ島の近海に「まつろわぬ神」が顕けん現げんし、島の東岸に向けて移動中。もうまもなく上陸する模様だと』

　そして、サー・アイスマンは陰気に付け加えた。

　もしかしたら、週に二度も神と戦うことになるかもしれませんな、と。

5

　ルクレチア・ゾラとの実り多き会話を優先したいところではあった。

　しかし『まつろわぬ神』と聞いては、看かん過かできない。

　クレタ島に続いてサルデーニャ島……カンピオーネであるアレクの行く先々に神々が顕けん現げんする。一度目は偶然で片づけてもいいだろう。だが、二度目もそうだと考えるほど、アレクサンドル・ガスコインは楽天家ではない。

　ともかく、詳細をこの目で確認しなくては。アレクは『電光石火ブラックライトニング』の権けん能のうを解き放った。

　名づけたのは賢人議会の連中だ。

　アレク自身は、特に名称を定めていない。幻げん視しと雷らい光こうの堕だ天てん使しレミエルより簒さん奪だつした。

　神速——超常の加速世界に自みずからを突入させる能力。

　また猫のごとき身軽さ、運動神経まであたえてくれる。

　だが、『神速』という代しろ物ものはさまざまに厄やっ介かいだ。まず速すぎる。慣れないうちは、普通のスピードで動く存在にさわれなかった。向こうが遅すぎ、しかもアレクが速すぎたのだ。

さらに、心身への負担。

神速の世界に五分もいると、体が激しく軋きしみをあげる。

通常速度の世界とは流れる時間が異なるため、その差異を処理する脳が悲鳴をあげる。

また二〇分も使い続けると、神速をオフにしたとき、時差ボケを一〇〇倍強烈にしたような不快感が襲ってくる。スピードがつきすぎて、なかなか通常速度に戻ってこられず、三日も神速のままでいたときもある。ちょっとしたリップ・ヴァン・ウインクルだ。

おそろしく強力なのだが、厄介事も数多い。

だが、神速の簒奪から二年後。

アレクはついに、この力の新たな用法をつかんだ。

人の体のまま神速へ至るから厄介なのだ。速きことが当たり前の姿、閃せん電でんのスピードこそが本質たるべき状態になればいい——。

カンピオーネはしばしば権能を有効活用するため、自らの姿を変える。

これを『顕けん身しん』という。アレクは神速を負担なく使いこなすため、雷に——稲いな妻ずま形態の顕身と化すようになった。

雷光となって、アレクは天あま翔かける。

人としての肉体をほどき、プラズマのかたまりに化け身しんしたのだ。

神速突入による心身への負担が皆かい無むとなり、後こう顧この憂うれいなく飛びまわれる。そう、普段とちがって二本の足で走るのではない。空まで飛べる。

——まあ、稲妻の顕身にも弱点はある。それも、かなり致ち命めい的てきな……。

　だが今はいい。長距離移動に最も適した姿だ。

　アレクはサルデーニャ島の東岸、オロセイ湾まで神速（雷速というべきかもしれないが）で一気に飛んできた。内陸部のルクレチア邸ていから、ほぼ真東に移動した海岸部である。

　目の前に美しい砂浜が広がっている。

　まだ五月。夏は海水浴客でにぎわうだろう。しかし、今ここにいるのは——

　アレクは眼前の巨大生物を眺めて、フンと鼻を鳴らした。

　海中の浅瀬から砂浜へ、ズンズン歩いてくる。もうすぐ上陸するだろう。身の丈たけは……五〇メートルというところか。

　すさまじい巨体。しかも筋きん骨こつ隆りゆう々りゆう、たくましい壮年の男の体だ。だが、首から上は『牛』だった。

　牛ぎゆう頭とう人じん身しんの『まつろわぬ神』。クレタで戦ったミノス神である。

「……なかなか面白い趣向のようだな」

　つぶやき、アレクは稲妻の体をほどいた。人の肉体に戻る。

「おお……その気配、知っておるぞ！　まちがいなく古き戦士の気配！」

　砂浜に立つと、大だい音おん声じようが上空から降ってきた。

　ミノスに呼びかけられたのだ。ほう。アレクは皮肉っぽく微笑ほほえんだ。

「我ら神々と汝なんじら神殺し——両者の間で交換されたのは、常に剣であり矛ほこであった。矢であり刃やいばだった！　しかし余は今回、汝に向けて言葉を投げかけたいと思う！」

　さて、次は何と言うだろう。

　予想しよう。そうだ……我が名はミノス。いにしえのクレタに君くん臨りんせし神である。大地の王である。こんなところか。

「我が名はミノス。いにしえのクレタに君臨せし神である！　大地の王である！」

　当たった。何という茶番だ。

　アレクの微笑は、ますます皮肉の度合いを強めた。

「神殺しよ！　この地の王として汝に宣せん戦せんしよう！　余をふくめた天地大海を治める神々と、汝ら忌いむべき魔王どもは不ふ倶ぐ戴たい天てんの仇きゆう敵てき同士なれば！　さあ、今こそいにしえよりの因いん縁ねんにならい、我らの雌し雄ゆうを決するべき時！」

　このミノスは何だ？

　数日前、アレクと対たい峙じした牛頭神が戦闘開始前に言った文句。

　それと寸すん分ぶんたがわぬ内容を叫んでいる。神の形と行動をかたどった幻まぼろし？　いいや、カンピオーネたるアレクの心身は闘とう志しと力で満たされ、すでに戦闘態勢。『まつろわぬ神』を前にしたときと同じ状態だ。

「幻などでは、ないはずなのだがな……」

　アレクは冷笑と共につぶやく。

「しかし、あの神が復活したわけでもないらしい。ヤツが甦よみがえったのなら、もっと面白い芸を見せてくれるはず。何より……」

　訳のわからない巨神を前にして、アレクの好奇心がうずく。

　このカラクリを解き明かしたいという欲求がわいてくる。この茶番を仕組んだ輩やからの鼻を明かしてやりたいと、闘争心に火がつく。神への敵てき愾がい心しんとなって燃えあがる。

　結果、アレクのなかでひとつの変化が起きた。

　掌しよう握あく――。倒したばかりのミノス神から奪った権能を今、掌握した。

　大いなる全能感がこみ上げてくる。

訳のわからない存在なら、無理矢理おとなしくさせてから、存分に調べればいい。それがいちばん手っ取り早い！

「俺のなかにあの大牛の力がある以上、ヤツの死が見せかけだったはずもない。……いいだろう、力ずくで貴様の正体を明らかにしてやる」

冷徹な嗤わらいで口元を彩いろどりながら、黒き王子は第三の権能を行使した。

「迷いを歌え、風よ。光を隠せ、夜よ。全ての旅人よ、寄る辺べなき茨いばらの旅路を――深き憂うれいと共にただ進み、希望を捨てよ！」

言こと霊だまが口をついて出る。

すかさずアレクは、革靴の踵かかとで砂浜を強く蹴けった。

「ふ、ぬおおおおおおっ⁉」

「ははははは！　前回は俺がミノスの迷めい宮きゆうに引きずり込まれた。だが今回は逆だ。俺の迷宮に招待してやろう。楽しんでくるといい！」

ミノスに酷こく似じした、しかしミノスでないはずの神が驚きょう愕がくし、咆ほう哮こうしている。

砂浜に上陸したばかりの巨大な牛頭神。

彼の巨体がどんどん沈んでいく。今まで立っていた砂浜が、急に底なし沼と化したかのように、ずぶずぶと。

膝ひざまで沈み、すぐに腰まで。逞たくましい胸板も、太い両腕も、雄お々おしい牛頭も。

全て地中に落ちた。沈みきってしまった。

それを見届けたアレクの体も、ずぶずぶと地に沈んでいく。

――のちにプリンセス・アリスが『大迷宮ザ・ラビリンス』と命名する力。

　地下や建造物の内部を造り替え、巨大な迷宮を生みだし、引きずり込む。直接に敵を脅おびやかすような力ではない。しかし、使う者のオ覚次第で、おそるべき脅きよう威いと重圧を敵対者にあたえる創造の神力。

　黒王子アレクが、大地と迷宮の神ミノスより簒奪した権能であった。

　新たな権能によって、アレクが地中に生みだした大迷宮。

　四角い石を敷きつめた通路は、かなり広い。床から天てん井じようまで高さ一〇メートル近くある。道幅も七、八メートルはあり、かなり余裕のある造りだった。

　この通路が蜘く蛛もの巣のように四方八方へ伸び、複雑な迷宮を形作っていた。

　創造主であるアレクには、その構造が全て把は握あくできていた。

　また、己が今どこにいるか、敵が今どこにいるか——内部にいる者の位置も。あたかも鳥が上空から地上を俯ふ瞰かんするかのごとく。

「この迷宮、見覚えがある……どころではないな。つい最近もぐったばかりだ」

　肩をすくめながら、アレクは地下を歩く。

　ここはまちがいなく、クレタ島でミノス神が生みだした迷宮と同じ造りだ。

　先日の戦いで強くイメージが残っていたためか。もっとべつの迷路をイメージすれば、また異なる形になる……気がする。

　次の機会に試ためしてみよう。アレクは独りごちた。

　掌握したとはいえ、新しい権能には不明点も多い。実戦で使って、初めてわかることがたくさんあるのだ。

（カンピオーネになった直後の数か月で痛感したが、権能を掌握するための『訓練』は無意味だ。どれだけ時間を費ついやそうと身にならない。おそらく一年の訓練よりも一日の実戦の方が、己の力について多くを学ばせてくれる。緊張感の有う無むが理由かもしれない）

「あの『牛』は今……あっちか。フン、やはりこう動くか」

　アレクは敵の位置を俯瞰した。自分とは異なる場所に落としたのだ。

　ここから北西二〇〇メートルほど離れた袋ふくろ小こう路じ。

　しかし、いきなり動き出した。迷宮の入り組んだ通路を無視して、一直線にアレクに向かって。しかも、猛スピード。

　前回、ミノスと戦ったときも同じだった。

　あの牛頭神はアレクの匂においをかぎ取って位置を掴つかみ、そして――

「そこにおったか、神殺しよ！　我が双角を以もつて、斬きり刻きざんでくれようぞ！」

　爆薬でも仕掛けたように、迷宮の壁が砕け、吹き飛ぶ。

　崩れ去った石材が粉となり、もうもうと砂すな埃ぼこりのごとく宙を舞う。

　この煙幕の向こうから、牛頭の巨人がやってきた。海岸で見たときほどの巨きよ躯くではない。大体さっきの一〇分の一、身の丈たけ五メートルほどだった。迷宮内部でも動きやすいよう、サイズを縮ちぢめたのだ。

　しかし、小さくなっても『牛』――大地の神の剛力はすさまじかった。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ‼」

　咆ほう哮こうと共に、牛頭神がアレクめがけて突っ込んでくる。

　速い！　時速でいえば三〇〇キロ近いだろう。しかも、このス

ピードにほんの一瞬で到達するのだ。さすが神、非常識な瞬発力だ。

　だがアレクの体は、この突撃をすり抜けた。

「――ぬ!?」

　牛頭神は不ふ審しんそうにうなる。しかし、急には止まれない。

　そのままアレクの背後の壁に激突した。

　ズガアアアアン！

　轟ごう音おん。牛頭神の体当たりで迷宮の壁はもろくも砕け、爆散した。

　雄お々おしい大地の神格である。彼のパワー、強きよう靭じんさ、突進力は神々のなかでも群を抜いているにちがいない。この程度の壁、紙も同然のはずだ。

　彼はこうやって次々と壁を突き崩し、迷宮に一本道を造って直進してきたのだ。

　そう、ミノス神がクレタ島の迷宮で同じことをやったように。

「ふむ……もしや汝は――」

　疑うような牛頭神のつぶやき。

　一度見ただけで、こちらの武器に気づいたか。やはりミノスのときと同じ！

　うなずくアレクに向けて、ふたたび牛頭の巨人が超高速のタックル。武芸の達人でも容易にはかわせまい。

　しかし黒王子にとっては、これを避けるのは児じ戯ぎにも等しい。

　さっきと同じ要領で、アレクは回避行動に移った。

　今の彼は、神速を半分だけオンにしている。

　この状態だと、アレクの周囲を流れる時間はおそろしく遅い。映

像をスロー再生するように、のったりとしか動かない。

　牛頭神の猛スピードすら、亀かめの歩みに等しかった。かんたんに見切れる。

　徐々に近づいてくる。タックルにはね飛ばされるまで、あと五センチ、一センチ、二〇ミリ、五ミリ、一ミリ……ここでアレクは、神速を完全にオンとした。

　雷の速さでサイドステップする。

　しかし、数十センチ横に跳んだだけで、また神速を半分オフ。

（傍はた目めには、当たったはずのタックルがアレクをすり抜けたように見えただろう。あるいは、アレクが数十センチだけ瞬間移動したように）

　神速を常に全開にすると、心身への負担がとてつもなく大きくなる。

　人間体では、こうして細かに使っていくのがいちばん。幾度もの実戦を経へて、アレクが学んだ智ち慧えだった。

「やはり、神の足を持つか！　疾はやきこと雷らい霆ていのごとしなのだな、神を殺あやめし武士もののふよ！」

　牛頭神が変身をはじめた。牛頭の巨人から、巨大な牛に——！

　小山のごとき、象かと見まごうほどの巨躯。

　とてつもないサイズの猛牛は、まさに神の化身。神こう々ごうしいほどの逞たくましさで、圧倒的な力感に満ちていた。

「フン。予想どおりだ。その手で——ミノスと同じ手で対抗してきたな」

　アレクは鼻で笑い、また神速を使った。

　走る。迷宮の入り組んだ通路を、超常のスピードで走り出す。

　敵が評したとおり、彼は疾きこと稲妻のごとき戦士。あっという間に大きく引き離す。ただし、確認したい点があるので全速力では

ない。

　最高速度は稲妻の速さだが、その五割というところか。

　これだって十分に速い。しかし、巨大な猛牛も異様なスピードで追いかけてきた！

　速い！　時速三〇〇……四〇〇……五〇〇……さらに猛牛は加速する。

　アレクはついに神速を全開にした。

　一気にトップスピード――完全なる神速へ。しかし、猛牛もまた神速に至った。

　ぴたりとついてくる！

　しかも、圧倒的な突進力はそのままで！

　複雑な迷宮の道を、アレクは右に曲がり、左に曲がる。ときに階段を下りる。

　だが、追跡者たる猛牛の神は、迷宮の壁を突き崩し、吹っ飛ばしながら一直線に猛追してくる。となれば、どちらが速く進めるかは自じ明めいの理りだ。

　逃げるアレクと追う猛牛。両者の距離はすこしずつ縮まっていった。

　――猛牛の頭には、太く鋭い双角がある。

　剣や槍やりにも劣おとらぬ凶器。これがアレクの痩そう躯くを抉えぐるべく、後方からぐんぐん迫る。

「雷よ、降くだれ！」

　アレクは短く言こと霊だまを唱となえた。

　人間の肉体をほどく。雷に――稲妻形態の顕身に化身する。

　実体を捨て、放電するプラズマのかたまりとなった黒王子に、猛牛神は二本の角つのを海かい賊ぞく船せんの衝ラ角ムのごとく突き込んできた。

しかし固体ならざる稲妻を抉るなど、どだい無理な話。

逆に紫し電でんを閃ひらめかせる。猛牛の巨躯に電撃を浴びせ、灼やいてやった。

「ぐぬうううっ！　みごとなり神殺しッ」

猛牛神は短くうめいた。その突進と猛追は止まらない。

引きつづき、雷と化したアレク目指して突っ込んでくる。激走をやめない。あの程度の電撃では痛打にならないのだ。

——そうだ。アレクはひそかにうなずいた。

雷の姿になっても、ミノス神をやり過ごせなかった。電撃を放っても通用しないし、敵はすぐにこの顕身の弱点を見抜いてきた。

「だが、余には見えたぞ。汝をいかにして攻め落とすべきか……難なん攻こう不ふ落らくたる雷らい電でんの城じよう塞さい、いかにすれば陥かん落らくせしめられるか！」

ああ、やはり。あのときとセリフまで寸分たがわない。

アレクの唇くちびるが自然と歪ゆがんだ。嘲ちよう笑しようの形に。

同時に猛牛神のスピードが落ちた、神速から通常の速さに戻っていく。アレクとの距離も一気に開く。だが、追跡をあきらめたのではない。その逆だ。

「ＯＯＯＯＯＯＯＬＡＡＡＡＡＡＮＮＮＮＮＮ!!」

やにわに猛牛神が吠ほえた。雷鳴を思わせる、すさまじい咆ほう哮こう。

これもまた言こと霊だま。術を破り、神殺しの権能を消し去るための聖句だった。

稲妻化は神速の負担を無にしてくれる。電撃で攻撃を行える。実体がなくなるため、物理攻撃もすり抜けられる。

しかし、この手の術破りには極端に弱い——。

神やカンピオーネに術破りをされたら、稲妻化はかんたんに解ける。アリスやルクレチア・ゾラ級の魔術師が数人がかりで試こころみれば、人間の魔術師でも破れるかもしれない。

アレクの肉体はプラズマから人間の肉体に戻った。

これが空を飛んでいるときなら、翼を溶とかされたイカロスと同じ運命が待っている。だが今回は、この展開を読んでいた。

雷と化しながらも、一〇センチ程度しか浮き上がっていなかった。

だから、着地の際にすこしよろけるだけで済んだ。転倒もせず体勢を崩したりもせずに、床に降り立つ。ミノスとの戦いでは、このとき大ピンチに陥おちいったものだが——。

「ほう、余の応おう手しゅを読んでいたと見える！　察しのよき男よ！」

「……当たり前だ。二度目の対戦だぞ」

猛牛神の賛さん辞じに、アレクはボソッとつぶやいた。

目の前にいる敵の正体は不明。今までの行動パターン、そしてパワーとスピードはクレタ島のミノス神と完全に同じ。ならば、次に確認すべきは——

「我が墓ぼ標ひょうのそばを歩む者たちよ……何なん人ぴとも我が影を踏むあたわず。しかと心得よ」

自然と心に浮かんだ言霊を、アレクは静かに唱となえた。

掌握したばかりの権能——ミノス神より奪った力で、こいつの底をたしかめるのだ。

心を研とぎ澄すます。迷宮の構造をイメージする。

上空からの俯ふ瞰かん図ずが脳のう裏りに浮かんできた。そうだ、ここは俺の領域テリトリー。わざわざ二本の足で目的地へ行くことはない。ただ念じればいい。

次の瞬間、アレクの体はズブズブと床に沈んでいった。

「悪いが、俺はこの迷路の主なのでな。少々ズルをさせてもらおう。俺と戦いたければ、また追ってくるがいい。まがい物のミノスよ！」

　と言い残して。

　この迷宮は実に九八層もの階層を持つ。広大極まりない構造だ。

　アレクたちは上から数えて一七層目にいた。最下層まで下るなら、残り八一層。さて、正体不明の猛牛神はどう追跡してくるだろう？

　直径一〇キロはありそうなドーム型の空洞。

　広大な地下迷宮の最さい深しん層そうに、アレクは立っていた。むき出しの地面。巨大な空間。中央には牛頭神を崇あがめるための祭さい壇だんと玉ぎよく座ざ。

　全て見覚えがある。ミノス神を倒したとき、最後の決戦場となった場所だ。

　グアン！　グアン！　グアン!!

　静せい謐ひつであるべき聖せい域いきに、異様な轟ごう音おんが響き渡った。

　アレクは天井を見上げた。ある一点にひび割れがいくつも走り、バラバラと岩のかたまりが落ちてくる。ついに、その部分に大穴があいた。

　穴からは牛頭人身の巨神が飛び降りてきた。ズン！　みごと着地を決める。

　身の丈も三〇メートルほどに戻していた。この強大な怪物は、巨大な拳こぶしを叩たたきつけて迷宮の床をやすやすと粉ふん砕さいし、階段を使うことなく一層ずつ飛び降りてきたのだ。

　いちいち階段を探して下りるよりも早い。そう判断したのだろう。

「よく追ってきた、まがい物」

　なつかしい敵の姿を眺めながら、アレクはつぶやいた。

「とんでもない力ちから業わざだが、少々拍ひよう子し抜ぬけしたぞ。貴様が姿を真ま似ねした神なら、もっとスマートに追ってきたはずだからな。美しくないにも程ほどがある」

「稲妻の戦士よ。力の王たる余の神しん威いに、侮ぶ辱じよくをあたえるか？」

　上方から威厳のある声が降ってくる。

　しかし、アレクは皮肉を込めて言い返した。

「手品の種が何かは知らないが、貴様は所しよ詮せん、よくできた『神』の贋がん作さくに過ぎん。オリジナルの神格をおそらく三、四割程度、再現した虚きよ像ぞうだろう」

「……余が虚像とな？　何やら胡乱うろんなことを申したな、神殺しよ？」

　不思議そうに牛頭神が言う。

　どうやら、己が偽にせ物ものだという自覚はないようだ。

「ああ、虚像だ。もうひとつ言うなら、貴様には魂たましいもない。『まつろわぬ神』を禍まがつ神たらしめる、狂える心がない。だから、呆あきれるほどに貴様は弱い」

　一歩、また一歩と牛頭神がズンズン近づいてくる。

　その偉い容ようをアレクは無感動に仰あおぎ見て、そして平板な声で告げた。

「神の強さは、自じ我がの強さに正比例する。どのような能力を持つ、どのような武器を持つかよりも、我が執しゆうや欲望の激しさの方が強さやしぶとさに影響するものだ。そういう意味では、貴様の強さはまったくたいしたことはない」

　ミノスを模した巨きよ躯くに、もはや脅きよう威いも緊張も感じない。

かの神格の『牛』としての圧倒的パワー、突進力は上う手まくコピーしたようだ。

だが、アレクにはさらに厄介に思えた『迷宮の主』としての神力は、まるで皆無。だから力ずくの手法で追いかけてきた。

遥はるか高みにある牛頭神の顔を、アレクは侮ぶ蔑べつと共に仰あおぎ見た。

「その程度の強さなら、どこぞのつまらぬ神の従じゆう属ぞく神しんにさえ劣おとる。つまらない贋作を造ったものだ。まあ、神の贋作という時点で希少価値だけはあるとも言えるが！」

カタをつけるか。決意と共に、アレクは言い切った。

すでに仕込みは終えている。あとは、偽にせ牛神の力を上手く利用するだけだ。

「ちがうというのなら、今度こそ俺の体を打ち砕いてみせろ！」

「よかろう！　汝の力作を突き崩すのは遺い憾かんだが、余の——大地の王がどれほど強壮なるかを存分に見せつけてやろうではないか！　——ＵＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＬＬＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ!!」

やにわにミノス——否いな、偽ミノスが大音声で吠ほえた。

もちろん、神力を使いこなすための言霊だ。

地下空洞に満ちていた大地の霊気が偽ミノスへと集まっていく。すごい勢いだ。空洞内だけでなく、この海岸部全域から地の力を吸い上げているのかもしれない。

そして偽ミノスは拳を握り、大きく振りまわした。

ガン！　迷宮最深層の床にあたる、むき出しの地面を殴りつける。

その直後、広大な地下迷宮の全てが大きく揺れた。

ゴゴゴゴゴゴゴゥゥゥゥウウウウウウウウウウウンンンッ!!

　殴なぐられた地面の一点から、放射線状にひび割れが走る。

　蜘く蛛もの巣すに似た絵図を地面に描いたひび割れは、ついに大空洞の端にまで達した。

　さらに壁面も占領していく。壁の下から上までも、無数のひび割れで覆おおわれていく。壁面の次は天井が蜘蛛の巣状にひび割れる番だった。

「ＵＲＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＡＬＬＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨ!!」

　偽ミノスがまた吠え、また地面を殴った。

　大空洞の天井から岩がバラバラと落ちてくる。落盤事故、どころではない。

　超ちよう弩ど級きゆうの大地震がこの地方ごと迷宮を襲っているかのような——。グラグラと迷宮中が揺れまくり、天井も床も壁も轟ごう音おんを立てながら崩れていく。

　迷宮の主たるアレクには、九八層の全てが崩壊をはじめているのがわかる。

「ふははははは！　神殺しよ、汝はこの迷宮にいる限り神しん出しゆつ鬼き没ぼつのようだからな！　汝の王城ごと突き崩してくれよう！　——ＵＲＲＲＲＲＡＡＡＡＡＡＡＬＬＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨ!!」

　また吠えて、また殴った。もちろん揺れと破壊はさらにひどくなった。

　ただ殴るだけでこうはならない。荒ぶる大地の神として、強ごう力りきと破壊の権能を振るっているにちがいなかった。

　しかし、アレクはにやりと笑った。これは好都合。

　ヤツが最深層へ下りてくるまでの間に、最も手間のかかる『召しよう喚かん』は済ませておいた。あとは報復の合図を送るだけなのだから！

「聞け、永遠の夜の娘たちよ。地と影の娘たちよ——」

この言霊は、復ふく讐しゅうの女神へ捧ささげる賛歌。

上から落ちてくる石くれや岩塊は、アレクを守護する彼女たちが阻はばむ。体に当たる寸前で、妖よう女じょたちの黒き翼が全て払いのけてくれる。

「悪には悪を、罪には罪を。鮮血には鮮血を、牙きばには牙を返し、復讐の嚆こう矢しとせよ。殺あやめられし母の血は、最も惨むごたらしき死を於おいて他、報むくうることかなわぬと知れ」

大揺れし、次々とひび割れていく地面の上でも、アレクは平へい衡こうを失わない。

背後から隠れていた三人の妖女が顕あらわれ、後ろから黒王子に抱きつき、彼を空中で持ち上げてくれるからだ。

三人の美しい妖女たちは、その髪の毛の一本一本が『蛇へび』だった。

そして、鴉からすのごとき漆しつ黒こくの『翼』を背から生やしていた。

「鬼女メガイラよ、復讐者ティシポネーよ、時を止めぬ名めい状じょうしがたきアレクトーよ！　疾とく呪じゅ詛そを返し、報復を成せ！　今こそ復讐の時！」

言霊の完成に応こたえて、アレクの背後で三妖女は凶きよう相そうを浮かべた。

ギリシア神話が伝える復讐の三女神エリュニエス——。

彼女たちを倒して得た、アレク第二の権能が発動する。

『復讐の女神ジヤツジ・オブ・フユーリーズ』。

そう賢人議会が名づけた権能は、三妖女の前で行われた破壊・攻撃・打ちよう擲ちやく・呪詛の全てを加害者に叩たたき返す。

今回でいえば、偽ミノスが迷宮に加えた大破壊の全てがヤツに返される！

「く——ＧＡＡＡＡＡＡＬＨＡＡＡＡＡＡＡＧＧＧＧＧＧＧＡＡＡ

ＡＡＡＡＡッ！」

　巨大な牛頭神は唐とう突とつに動きを止め、苦痛を訴えた。

　殴られている。雄々しい牛頭を、ぶあつい胸板を、たくましい腹筋を、広く硬い背中を、全身のいたるところを殴られている。乱打されている！

　そのたびに偽ミノスの巨体は大きく揺らぎ、吹っ飛んでいった。

　殴っているのは、見えざる巨大な拳だ。

　これはつまるところ、偽ミノス自身が繰りだした拳——大地のエネルギーを破壊力に変え、この迷宮を崩壊させている攻撃そのものだった。

「こんなところか……」

　くずおれていく偽ミノスを見て、アレクはつぶやいた。

　戦士カンピオーネの直感が、敵の命数は尽きたと告げている。もう用はない。

　ふたたび実体のない雷に化け身しん。

　崩壊する大迷宮から脱出すべく、地上へ向けて飛び翔しようをはじめた。

6

　稲いな妻ずまの姿でアレクは空中に飛び出した。

　サルデーニャ島オルセイ湾の砂浜に、巨大な陥かん没ぼつ部ぶが生まれつつある。さながらクレーターの出現だ。

　地下迷宮もろとも偽にせミノスが滅び、その結果生じた地形の変化であった。

　己おのれの勝利にうなずいたあと、アレクは眼がん下かを見渡し

た。

　この状況で、彼女がおとなしくしているはずはない。絶対に来ているはず——いた！

　捜していた少女の姿を見つけて、アレクは雷の速さで飛んだ。小高い丘の上に降り立ち、顕けん身しんを解く。

　人間体に戻ると、すぐプリンセス・アリスに駆け寄った。

　幽ゆう体たいである彼女も、アレクにはだいぶ劣おとるがかなりの高速で飛べるのだ。

「やはり来ていたか。まさか、ただ怠たい惰だに時を過ごしていたわけではないだろうな？」

「もちろん、そんなはずありませんでしょう？　あなたのお知りになりたいことくらい、とっくに調べはついています」

　急な問いかけにも、プリンセスはツンと顔を背そむけて言う。

　さっき追い詰められたことを根に持っているようだ。フン。アレクはささやかな勝利に満足し、微笑した。

「アレクサンドル、あなたはお口の悪さとひねくれた性根を、もうすこしどうにかすべきだと思います。レディに対して、本当に失礼千せん万ばんなんですから！」

　憤ふん然ぜんと文句をつけながら、アリスは白い繊せん手しゅを軽く振る。

　その動きに合わせて光の粉が現れ、またたきながら空に舞い上がった。上空のとある一点まで来ると、そのまま上昇を止める。

　——そこか。アレクの微笑に獰どう猛もうさが加わった。

　白き巫み女こ姫ひめプリンセス・アリスは、いくつか特殊な霊力を使いこなせる。

　その代表格が幽体分離。そして精神感応だ。

　後者の力で、プリンセスは人の心を漠ばく然ぜんと読む。感かん

応のうの触しよく手しゅを広げれば、近くにいる全員の心を読めるはずだ。もちろん、無条件にではない。ルクレチア・ゾラのように同格以上の魔術師やアレクのようなカンピオーネの心はのぞけない。

　しかし、それでも心を読めない相手がいることは把は握あくできるのだ。

「万物の栄光よ、力の顕示と成れ！　女の身に過ぎし智ちの鍵かぎを奪え！」

　プリンセスが光で示した位置に、アレクは対抗魔術をかけた。

　これは、特定分野の術を破るために特化した魔術である。たとえば火系統の術を破る対抗魔術、水系統の術を破る対抗魔術というように。

　今回アレクが使ったのは、対魔女術の対抗魔術だった。

「ふふふふふ……さすがでございます、王子。すっかりお見通しでしたか」

　突とつ如じよ、空中に金髪の美少女が顕れた。

　白いサマードレスをまとっている。その笑顔は極上の砂糖菓子のごとく甘い。以前、グィネヴィアと名乗った《神しん祖そ》であった。

『隠れ身』の魔女術を使い、姿を見えなくしていたのだ。

「フン。まがい物の神を呼び出すなど、デタラメにも程がある。物好きな『まつろわぬ神』かカンピオーネか、それとも最近出会ったばかりの胡う散さんくさい貴様か、どれかの仕し業わざに決まっているだろう？」

　ふわふわと宙に浮かぶ魔女を見上げながら、アレクは皮肉っぽく言った。

「ただし、偽いつわりの神をどのような手て管くだで造り出したかの見当はつけられないがな。神か神殺しの権能に近い芸ができるとは、《神祖》とやらもたいしたものだ。どうやら、貴様たちのことを過小評価していたようだ」

「いいえ。魔女の頂点に立つグィネヴィアといえども、自みずからの魔力でなし得る業わざではございません」

　微笑みをたやさぬまま、幼女の姿をした魔女は地上に降りてきた。

「どのように施ほどこした業かは、あとでお教えいたしましょう」

「ほう？　ずいぶんと気前がいいな」

「いいえ。王子……御おん身みの御ご助じょ力りょくを賜たまわりたいと願う以上、この程度の申し出はむしろ当然でしょう。それにそちらの巫み女こも――フフフ、なかなか見どころのある娘ですね。よかったら、あなたもグィネヴィアのもとへいらっしゃい」

　純白のドレスをまとったグィネヴィアは、ちらりとアリスにも視線を向けた。

「王子。このグィネヴィアと共に『この世の最後に顕れる王』を捜し出していただきたく存じます。眠れる最後の王こそ、最も神秘なる鋼はがねの神。かの王を求める探たん索さくこそ、最も困難にして危険極きわまりない旅。謎なぞを求めてやまない御身に最もふさわしい冒険となるでしょう。是非、我らと共にお越しくださいませ！」

「……ルクレチア・ゾラはいいのか？　以前、彼女といっしょに捜していたのだろう？」

　この世の最後に顕れる王。

　好奇心をくすぐる呼び名だ。しかし、アレクは冷静に指摘した。

「あの子はいけません。あの方の手がかりを求めて放浪するうちに、あの子はグィネヴィアと志こころざしをたがえてしまったのです」

「……志、だと？」

「ええ。最後の――最強の《鋼》たるあの方をよみがえらせるべきではない、と。それはむしろ、この世に終末をもたらす引き金となるにちがいないのだからと」

　この世の最後。終末。物騒な言葉ばかりが羅ら列れつされる。

　話半分と思えないのは、まつろわぬ神々と深くかかわってきた身の悲しさか。

　アレクは肩をすくめて、いちばん気になるところへ突っ込んだ。

「この世の最後に顕れる王……それはアーサー王のことか」

　かの王の墓ぼ碑ひ銘めいは『かつての、そして未来の王』。

　永えい劫ごうの眠りについた英雄はふたたび目覚め、世界を救うのか。それとも滅ぼすのか。

「ふふふ。さすがは王子。ご聡そう明めいでいらっしゃる」

「……この数年、聖杯の探索を続けるうちに思いついたことがある」

　アレクは初めて、ずっと心の裡うらにあった仮説を口にした。

「一一世紀から一四世紀にかけての中世ヨーロッパには、アーサー王という『神』の神話を広めるため暗あん躍やくした者たちがいたのではないかとな……。その中心となったのは、貴様たちの先祖である中世の魔女——古き世には地じ母ぼ神しんの巫女であった女たちだ」

　グィネヴィアと、そしてアリスを鋭く見つめながら語る。

「彼女たちに利用されたか自発的に協力したかは知らないが、テンプル騎士団と、その母体であったシオン派修道会、シトー派修道会も『神話』の形成に大きく関与したはずだ。……どうだ、俺の思いつきはどの程度当たっている？」

「さあ、どうでしょう？」

　しかし、グィネヴィアは無む邪じや気きに微笑ほほえみ、軽やかに答えた。

「なにぶん、このグィネヴィアも転生を果たしてから一〇〇年も経へていないのです。生まれる前のことまではなかなかに把は握あくできかねます」

可か憐れんな笑顔。謡うたうように華はなやかな声こわ音ね。

フン。アレクは鼻を鳴らした。肚はらの読めないヤツだ。その点、隣のプリンセスなどは腐くされ縁えんのおかげで心底も読みやすいのだが！

「わたくしの望みは『最後の王』をよみがえらせること。そのためには努力も財も惜しみはいたしませぬ。そう、たとえば魔導の聖杯でも」

「何？」

「王子がご覧になった偽りのミノス神……あれは、グィネヴィアが聖杯の恩おん寵ちようを得て生み出した幻まぼろしでございます。先だっての戦いの折りにかいま見た御姿を参考にして！」

グィネヴィアの背後に、光が差した。

いつのまにか、一二、三歳の乙女おとめをやや上まわるほど背の高い容いれ物が顕れていた。

容れ物の形状は『杯さかずき』よりも『甕かめ』に近く、まぶしい後光を放っていた。そして、驚くほどの呪力を宿していた。

容れ物の口から、滾こん々こんとわき出る呪力の膨ぼう大だいさはどうだ？

アレクたちカンピオーネは、人間の魔術師を凌りよう駕がする呪力を持つ。しかし、この容れ物からはカンピオーネ数十人分に相当しそうな呪力がわき出ている。こぼれ落ちる分だけで、この量。はたして、どれほどの呪力をその内側に秘めているのか――。

「アレクサンドル！　あれこそ魔導の聖杯……名高きグラアルそのものです！」

「言われるまでもない！　あんなすさまじい代しろ物もの、他にあってたまるか！」

霊視の託たく宣せんを得たのかアリスが興奮と共に叫び、アレクも乱暴に応じた。

ふたりの前へ唐とう突とつに顕現した聖せい遺い物ぶつは、しか

し、顕れたときと同じほどの唐突さで姿を消した。後光も失うせ、残ったのは幼き《神祖》のみ。

「ふふふふっ。王子――アレクさま、もし御身がグィネヴィアに御助力いただけるのなら、今の霊宝もあなたさまの物でございます」

　何!?　アレクは驚きよう愕がくに目を瞠みはった。

「申しましたでしょう？　グィネヴィアは財を惜しまぬ女なのです。名高き聖杯といえども、最後の王を見み出いだすためであれば、喜んで差し出しましょう。――我らの遠い裔すえたる巫女よ、あなたからもアレクさまに申し上げて頂ちよう戴だい！　魔女の女王からの願い、どうかお受けあそばしませと！」

　聖杯が消え、《神祖》に声高に命じられ――。

　さすがに興奮も失せたのだろう。プリンセス・アリスはふぅとため息をついた。

「わたしよりもお若く見えるご先輩に、この呼び方が適切か迷うのですが……おばさま、あなたはアレクサンドルの人となりをご存じでないのですね？」

　冷めた声で言う、おまけつきで。

　フッ。アレクは微笑した。さすがは腐れ縁の好敵手、よくわかっている。

「このへそ曲がりな天あまの邪鬼じやくさんが、どんなに丁てい寧ねいでも『欲しい物をプレゼントする代わりに言いなりになれ』と上から目線で言われて、うなずくはずありません。むしろ、無駄に反発させるだけです。こういう場合に彼が言いそうなことは――」

「『持ち主がわかったのなら、なぜそいつの要望を聞かねばならんのだ？』だな」

　アリスが言うよりも先に、アレクは解答を口にした。

「この俺が、頭を低くして恵みを請こうとでも思ったか？　ふざけるな。俺は己が欲する宝を奪うのに、一瞬たりとも躊ちゆう躇ちよしない。元の持ち主から奪い取ればいいだけのことだ！」

　挑発的に嗤わらいながら、言い放つ。

　隣でアリスが「まあ、よく言いますこと」とつぶやいている。

　そういうときの所有者が力も罪もない一般人ならば、実はアレクもいろいろ躊躇して結局やめたりするのだが、そんなレアケースを思い出したのだろう。フン。ああいうのはあくまで例外だから、とっとと忘れればいいものを！

　ひそかに毒づきながら、アレクは《神祖》へ近づいていった。

「まさか、秘宝の持ち主がのこのこ出てきてくれるとはな……。先に礼を言っておこう。貴様のおかげで、ついに長年の宿願を果たせそうだ」

　神速のスイッチを半分入れる。

　バチバチと火花が体中に走った。これでいつでも加速可能だ。

「……交こう渉しようの余地もない、とおっしゃるのですね。残念ですわ。智ち慧えにすぐれるのみならず、野性の本能よりも理性が勝まさる、ひどく珍しい神殺しの君と聞いて、グィネヴィアは期待していたのです……。あるいは、我が探索に新たな局面が訪れるやもと」

　ハァ。グィネヴィアが嘆息を吐き出した。

「猛たけき愚ぐ者しやの落とし子たるカンピオーネの君は、やはり飼かい馴ならせぬ毒竜の類たぐい。例外はいないということですのね」

「他の連中は知らん。だが、すくなくとも俺は無理だろうな」

　さあ、ぐちぐちとうるさい《神祖》を拘こう束そくするとしよう。

　幼女の姿は明らかに上うわ辺べだけ。何の遠慮もいらない。持てる権能を駆使して拉ら致ちし、聖杯と有益な情報を奪い取るのだ。まあ、あまり手荒な真ま似ねはしたくないが……。

　と、アレクが考えたときだった。

「お聞きのとおりです、おじさま。どうぞグィネヴィアをお守りくださいませ」

　不意にグィネヴィアがつぶやいた。

　すると彼女の背後から、今度は霧がわき出てきた。

　まるで早朝の湖こ畔はんに立ちこめる、一〇メートル先もよく見えないほどの濃のう霧むだった。

　そしてアレクは見た。

　霧の奥より、白き甲かつ冑ちゆうに身を包んだ騎士が駆けてくるのを！

　騎士がまたがるのは美しい白馬。兜かぶとの面めん頬ぽおをきっちり下ろしており、顔は見えない。

　手に構えるのは、逆さか棘とげ状じようの馬ラ上ン槍スであった。

　白馬の騎士だと――？　アレクが眉まゆをひそめた瞬間、いつのまにか騎士は眼前まで到来していた。なんというスピード！

　アレクは神速を完全にオンとした。

　周囲の全てが減速していくなか、己の速さのみが加速する。

　この加速世界でまともに動けるのは、いつもならアレクのみである。

　しかし、白馬の上から騎士が馬ラ上ン槍スを放ってきた。これがみごとに追いかけてくる。やたらとカクカクした――ＤＶＤのコマ送り再生じみた動きで、アレクを串くし刺ざしにしようと槍の穂ほ先さきがのびる。これは神速を破る武芸の奥おう義ぎ！

　パオロ・ブランデッリやサー・アイスマンも不完全ながら見せる、騎士の秘芸。

　心しん眼がんで神速を見切り、最短最小の軌道で神速を捉とらえんとする技。

——かわせ！

大きく後方に跳躍し、アレクは鋼の凶器から逃れた。

その隙すきにあちらは、グィネヴィアの幼い体を引っぱり上げ、鞍くらの前に乗せる。しかし、アレクを追撃する気配は見せない。

グィネヴィアを守るのが最優先ということか。

アレクは騎士の意図を悟り、神速をオフにした。カンピオーネの心は闘志でたぎり、体には戦うための力がみなぎっている。——まちがいない、ヤツは神だ。

「アイスマンには秘密にしておくべきか？　まさか、週に三度も神と対決するとはな！」

低く吐き捨てるアレクの耳に、グィネヴィアの声が届く。

「助かりましたわ、おじさま。これからもグィネヴィアのそばにいてくださいませね？」

白き甲冑の胸に幼い肢し体たいを寄りそわせ、甘えながら訴えていた。

そして、その様子を見つめるプリンセス・アリスが、無視し得ない単語を口にした。

「そんな……湖のランスロット——ランスロット・デュ・ラック！」

ささやかれた神の名。霊視による託たく宣せん。

戦せん慄りつするアレクに向けて、グィネヴィアはかわいらしく微笑みかける。

「本日はこれにて失礼させていただきます、黒王子さま。御身を味方とできなったのは残念ですが、きっと敵としてのおつきあいも長きに渡るものとなりましょう！」

「……それは願望か？　それとも霊視でもしたのか？」

「さあ？　なんとなしにそう思っただけです。でも、グィネヴィア

は最も正統なる神祖。よく予感が当たるのです。——では、ごきげんよう！」

　白き騎士ランスロットとグィネヴィアを乗せて、白馬は空へ飛び上がる。

　あたかも草原を駆け抜けるように。

　空中を蹄ひづめで蹴けり、白馬はみごとに疾しつ駆くする。天あま翔かける。

　ランスロット・デュ・ラックは、ついに一言も口を利きかないままだった。

　彼らの後ろ姿を見つめながら、アレクは雷となって追いかけようかと迷い、あきらめた。空中で雷の顕身を解除させられたら、今度こそ命取りになるのだから——。

「わたしがグィネヴィアと袂たもとを分かった理由？　かんたんだ。ある日、『この世の最後に顕れる王』が顕現したとき、何が起こるかを考えてみたのさ」

　あのあと、ルクレチア・ゾラの家に戻ったアレクとアリス。

　後輩のプリンセスがふと口にした疑問へ、サルデーニャの魔女はあっさりと答えた。

「……やっぱり、世界に終末がやってくる、とか」

「ああ。否定できる材料が意外とすくない。決してバカげた妄もう想そうではないと思うぞ」

　アリスのつぶやきに、ルクレチアは重々しくうなずいた。

　なるほど、たしかに。アレクも思わず納得した。

　焔ほのおの神が到来すれば、その地域一帯は火の海に呑のまれる。闇やみの神が降こう臨りんすれば、その一帯は永遠の闇夜に包まれる。『まつろわぬ神』の顕現とはそういうものだ。

　ならば、この世の最後に顕れる神が世に出たら――

　世界の滅亡がはじまるかもしれない。デタラメもいいところだが、説得力はある。

「そういう事情ゆえ、長年の探索もあきらめた。さすがにこの世を滅ぼしかけて平然としていられるほど、私も鈍どん感かんではない。……あなたたちカンピオーネとちがってな」

「――どういう意味だ!?」

　憤ふん然ぜんとするアレクに対し、ルクレチアはにやりと笑い、アリスも肩をすくめる。

　しかし、冗談めかした一言のあとに、こうも付け加えられた。

「実は、あとひとつ引っかかった点がある。『この世の最後に顕れる王』が、はたして本当にアーサーなのだろうかとな。研究を続けるうちに、もっと古く、もっと大陸の東西にまたがる存在であるような気がしてきたのさ」

　かつて《神祖》の共同研究者であった女性は、ここでため息をついた。

「私はこれでもアーサリアンの端はしくれなんだ。苦労して見つけた心の王様がまったくの別人だった――なんて万一は、考えたくもない。それが探索をやめた最大の理由だよ」

「でも、あのグィネヴィアとおっしゃる《神祖》は、信じてらっしゃるのですよね？」

「ああ。ランスロット卿との不倫でアーサー王を裏切った王妃……彼女と同じ名前を名乗っているくせにな！　ま、最後の王の正体はいまだ定かならずだ。そいつがアーサーでなかったとき、あのグィネヴィアがどうなるかは皆かい目もく見当もつかないがね！」

　黒王子アレク、プリンセス・アリス、そして《神祖》グィネヴィア。

　三者が初めて一堂に会した一幕は、このようなあらましだった。

　この時点ではまだ、八年の歳月を経ても縁の切れない間柄になるとは、すくなくともアレクとアリスは考えてはいなかった。

第５話　World is not enough――草薙護堂の日常

1

　草くさ薙なぎ護ご堂どうはプライベートにおいて、秘密らしい秘密を持たない男である。

　友人たちに隠れて交際する恋人がいるわけでもない。社会的に公おおやけにできない性せい癖へきがあるわけでもない。出生の秘密があるわけでもない。

　だから、万ま里り谷やひかりに質問されたときも、すぐに答えた。

「あの、お兄さま。ときどきバイトで予定が埋まっているとおっしゃいますけど、どんなお仕事をされているんですか？」

「いくつかやってるけど、どれも普通のバイトばかりだなー」

　心地よい秋晴れの土曜日。

　護堂が昼前に七なな雄お神じん社じやに立ち寄ったのは、バイトのついでだった。

　仕事場がたまたま虎とらノ門もんだったのだ。そちらに行くまで、まだ時間の余裕がある。というわけで顔を出してみたら、神社の境けい内だいで万里谷姉妹しまいと会うことができた。

「力仕事だったり、接客だったり、裏方だったり、単純労働だったり」

　自分がこなしている仕事の数々を、護堂は思い返してみた。

　なかには、ちょっと特殊なものもある。しかし実際にやってみると、どれも地味で普通で、当たり前のことばかりのバイト内容だ。

　その辺りを細かく語るのは、説明する方もされる方もめんどくさいだけだろう。

「今日はこの近くでお仕事をされるのですよね？　一体、どのような？」

　と訊たずねたのは、祐理の方だ。

　おっとり小首をかしげる仕草が、いかにも上品なお嬢さまらしい。

「うちの死んだばあちゃんやじいちゃんと知り合いの古本屋が、この近くにあるんだよ。いつも軽トラックで本を買い付けに行くんだけど、腰を悪くしたそうでさ。それで俺に手伝いを頼むって話になったんだ」

　実のところ、バイト代は些さ少しようといっても差し支つかえのない額だ。

　だが祖父母の古なじみが困っていると聞き、金銭にこだわることなく護堂は快かい諾だくした。

　それに、収入は些少でも知り合いはできる。

　こうして縁のできた友人知人から、べつのバイトを紹介してもらえることもある。あるいは、困ったときに助けてもらえる人脈にもなる。たとえば今年の夏、サルデーニャ島に行く前に繰りかえした日ひ雇やといバイトの数々は、そうやって紹介してもらったものばかりだ。

　それにカンピオーネとしての草薙護堂を何度も助けてくれたのは、エリカや祐理、リリアナ、恵え那なをはじめとする、頼りになる仲間や友人たちとの絆きずなであり、縁だ。そう考えると、やっぱり仲間は大切だよなァと身にしみて感じる。

「実は私、アルバイトというものをしたことがないのです」

　すこし照れくささそうに祐理が言った。

「でも、この神社で働いてるだろ？」

「これは媛ひめ巫み女ことしての職務ですから……。なので、すこしあこがれてしまいます」

　と、麗うるわしい媛巫女は告白した。

　深しん窓そうの令嬢である大やまと和撫子なでしこに似つかわしい、ささやかな想おもいかもしれない。

　なるほどと護堂は微笑ましく思い、実際に笑いかけると、祐理もしっとりと微笑みかえしてくれた。ふたりして笑顔を交わし合う。

「あ。じゃあ今度、お兄さまのバイト先でお姉ちゃんも働いてみるってのはどうかな？」

　姉へ唐とう突とつに提案したのは、もちろんひかりだった。

「初めてのアルバイトだし、お兄さまといっしょの時間も増えるしで、いいこと尽づくしじゃない？　ファミレスとかの食べ物屋さんとか、いい感じだと思う。で、わたしもそこへお邪じや魔まして、お兄さまにお相手してもらうの！」

「ひかり！　勝手なことを言ってはいけませんっ」

　妹をたしなめる姉。しかし、彼女はどこかそわそわと護堂を見つめてきた。

「あー……そうか。万里谷といっしょにバイトか……」

「す、すいません護堂さん。ひかりが適当なことを申し上げてしまいまして。――で、でも」

　恥ずかしそうに口ごもる祐理は、凶悪なまでに可か憐れんだった。

「もし、できればの話ですが、そういう機会をいただけるのであれば、私も新しい経験に挑戦してみたい気持ちはもちろんあるのですが……。い、いかがでしょう？」

　このお嬢さまといっしょにアルバイト。

なかなか——いや、かなりうれしいイベントになるかもしれない。

護堂は『じゃあ今度、機会があったら』と言いたくなって、そこで気づいた。

「そういえば、俺のしてるバイトって、どれも女の子じゃ無理そうなのばかりだな」

「ああ、男の人だけで働いてるところなんですね？」

「いや、男所帯だけってわけじゃないんだけど、いつのまにか女の子には向かない仕事ばかりになったんだよな」

ひかりに答えながら、護堂は頭をかいた。

業務内容としては普通のバイトばかりなのだが、同じ仕事を祐理にお願いするのは気が引けてしまう。やっぱり、この案はなしだなと思い直した。

「あんたの言う『普通』はね、基本的に信用できないのよ」

夜の一〇時過ぎ。

バイトを終えて、護堂は自宅のある根ね津づ三丁目商店街に帰ってきたら。

バッタリ出会った寿す司し屋やの娘にして幼なじみ・徳とく永なが明あ日す香かに言われてしまった。

「……いきなりだな。俺のことを常識のないヤツみたいに言うなよ」

護堂は憮ぶ然ぜんとして反論した。

道で会って世間話をはじめたら、この言われよう。さすがに腹も立つ。

「あのね、『今まで何してたの？』って訊きいたら『古本屋のバイト』って言われて、『どんな仕事？　ふうん。その内容でバイト代

いくら？』で『大量の古本を半日運びまくって日給三〇〇〇円』。『安すぎない!?』には『そんなこともないだろ。普通だよ』なわけよ」

　ポンポンと、威勢よく明日香はまくしたてる。

　きつめの顔立ちだが、なかなか愛らしい少女だ。ロングヘアを頭の左右で結び、ツインテールにしている。昔から変わらない髪型だった。

　幼なじみが息いき継つぎしたところで、護堂は口をはさんだ。

「俺、べつに変なこと言ってないだろ？」

「変よ」

　一刀両断された。

2

　そのような出来事のあった翌日、日曜日。

　草くさ薙なぎ家の団らんは、ほとんど護ご堂どうと妹の静しず花か＋プラス祖父の三人だけが参加者である。仕事もプライベートも忙いそがしい母はまずいないし、父は離婚して家を出ている。

　しかし、今日の昼食はいつもよりにぎやかだった。

　珍しく父母がいる——のではなく、飛び入りの参加者が三人もいたおかげだ。

「うわー、このハム美お味いしいねー！」

　分厚く切って焼いただけのハムステーキをほおばり、香こう月づきさくらが絶賛する。

　食材のハムが絶品なので、それだけの調理でも抜群なのだ。

「これは真ま世よに贈ってきたものでね。あの子がたまにつまみに

するだけでは、もったいないくらいのうまさだろう？　今日、さくらちゃんたちに味わってもらえてよかったよ」

　温厚な口調で語ったのは、調理した祖父・草薙一いち朗ろうである。

　お節せつ介かいなほどの世話好きではない。しかし、さりげなく人の世話を焼き、もてなすのが大得意な人でもある。

　そうした人柄が、おだやかな顔つきにも声にも表れていた。

「ところでさくらちゃん。今日はうちの護堂に、何か用でも？」

「ううん。ちょうど暇ひまだったから、ふらっと来てみたの。最近はお友達の冬ふゆ姫ひめちゃんも困ったことはないっていうし、あたしもさびしくなったらゴドーくんや静花ちゃん、おじいちゃんにも会えるしで、全然ヤなことないし」

「そうか。それはよかった。ああ、よかったら美味しいチーズもあるんだが」

「え、本当!?　うふふ、何だかお父さんがワインで晩ばん酌しやくするときのメニューみたい！」

　祖父とさくらがなごやかに話している。

　九月のはじめに現れて以来、はとこのさくらは頻ひん繁ぱんに草薙家にやってくるのだ。

　護堂と静花の兄妹はもちろんだが、祖父もさりげなく遠縁の少女を見守り、何くれと世話を焼いているのだ。

「……あれでもうすこしだけ、常識的な生き方をする人だったらなあ」

　ぼそりと、口のなかで護堂はつぶやいた。

　だが、聞きとがめた人間がいた。すぐ隣となりにすわる静花だった。

「……よく思うけど、お兄ちゃんの心にある棚たなって、ものすごく大きくて収納しやすそうだよね。いろんなものをすぐに出したり

引っ込めたりして」

「……何が言いたいんだよ？　あんまり兄貴を妙なヤツみたいに言うなよな」

「……フンだ。お兄ちゃんは十分、変な人ですよーだ」

　兄妹して、ひそひそささやき合う。

　何かと口うるさい妹だし、面倒見のいい兄でもないが、仲はいいのだ。

　ちなみに、先ほどさくらが『晩酌みたい～』とコメントしていたが、大正解である。

　今日の昼食を彩いろどっているハムやソーセージなどの燻くん製せい類るい、海外みやげのチーズなどは、どれも母・草薙真世への『貢みつぎ物もの』として草薙家に来たものだ。銘めい品ひんというに足るワインやブランデーといっしょに……。

　贈り主が全て男である点は、『魔性の女』の真しん骨こつ頂ちょうというべきか。

　尚なお、父・弦げん蔵ぞうからも兄妹宛あてに絵はがきが来ていた。

　何をしているのか知らないが、南半球のケープタウンから送ってきたものだ。『どこまでも迷い、さまよえ。おれがいるぞ。友よ』と記しるされていた。意味がわからない。

「お父上は、一体どのような方なのですか……？」

　テーブルに載のっていた絵はがきを見て、リリアナ・クラニチャールがつぶやいた。

「何かを訴うつたえようとするメッセージ性はたしかに感じるのですが……。未熟なわたしには、その詳細が今ひとつ呑のみ込めません」

「大丈夫だ。俺たちにもわからないから」

「とりあえずカッコつけとこうって、考える人なの。気にしなくて

いいよ」

　兄妹から即答されて、リリアナは「はあ……」と首をかしげた。

　銀髪をポニーテールにまとめた、妖よう精せいめいた東とう欧おうの美少女。

　改築したとはいえ純和風建築の草薙家に似合うとはいえない容姿である。しかし、頻繁に出入りしているおかげか、最近はすっかり違和感がない。

「でもさ、お兄ちゃんもずいぶんレベルアップしたものだよね」

　草薙家の居間。食卓を囲む面々。右の妹、左のリリアナにはさまれた護堂――。

　兄の配置をシニカルに眺ながめながら、静花はつぶやいた。

「彼女のひとりを堂々と家に連れ込んで、家族同伴でランチまで食べちゃうんだから。かつてのおじいちゃんも、ここまではしなかったらしいじゃない？」

「バカ。おまえはいつも、変な誤解をしてるよな？」

「草薙護堂。血を分けた肉親にそのような罵ば倒とう、感心できませんね。とはいえ、静花さんが不適切な印象をお持ちなのは事実ですが」

　静花の皮肉に、護堂とリリアナはコンビネーションで反撃した。

　そもそも、祖父がたくさんいた親しい女性を家にあげなかったのは、心にやましいところがあったからである。いっしょにしないで欲しい。

「……弁明するつもりなら、聞く耳くらいはあるけど」

「弁明？　そんなことはしないよ。リリアナと俺は、この先もずっとつきあっていく仲間で、相棒みたいなものだと思えばいい。そんな関係なんだから、家に来るのも家族に会わせるのも普通のことだろう？」

「ええ。鳥の両りよう翼よくがいつも共にあるように、わたしたち

も分かたれることはないのです」

　抜群の連れん携けい。ぴったりと合う呼吸。

　こちらの目指す方向にぴたりと追つい随ずいし、問題点があれば忠告し、助言もくれる。もちろん適切なフォローも行い、最前線に躍り出て決定力も発揮できる。

　チームの司令塔、王様の立場からすれば、リリアナは理想的な副官かもしれない。

　最近、そう思うようになってきた護堂だった。

「共にあることが当たり前なのであり、そこに一点のやましさもありません。ふたりの想おもいは純粋なのです。ゆえに、わたしたちが不道徳な関係であるようにおっしゃる静花さんのご認識は不適切でしょう。どうかご理解を。……ああ、そうだ」

　リリアナが唐突に、護堂にだけささやいてきた。

「週明けの月曜日には、いただいた食材を使って昼食を作りましょう。万ま里り谷や祐ゆ理りにはわたしから、エリカ――の食事を用意するアリアンナには、カレンを通して昼の準備は必要ない旨むねを伝えておきます。ひさしぶりにわたしの手料理だけをご堪たん能のうください」

　ちょっと頬ほおを赤らめ、秘め事のように訴えられた。

　その初うい々ういしさと甲か斐い甲が斐いしさが、ひどく可愛かわいらしかった。

　一時間ほど前、いつものようにやってきたリリアナに祖父は『おみやげだよ』と言って、母への貢ぎ物を分けたばかりなのだ。

　銀髪の騎士は以前とちがい、もう草薙家の厨ちゆう房ぼうでまで主導権を振るおうとはしない。

　より柔じゆう軟なんに、いい感じに女性らしさも増してきたというか――。彼女はきっと良き妻、良き母になるのだろうと、漠ばく然ぜんと思う護堂だった。

「ふうん。わかった、楽しみにしておくよ」

「ええ。是非ご期待ください」

「う、く――っ。しかも家族の前で堂々と、彼女の集団を切り盛りする相談まで！」

「ふふふふっ。ゴドーくんのところはみんな仲がよくて、楽しそうだねー」

　静花がなぜか絶句する横で、さくらが朗ほがらかに笑っている。

　尚、はとこに『リリアナは実家の都合でミラノへ帰ったんだ！』と説明したのは、一か月ほど前の出来事である。

　なので、急な再会に護堂もリリアナも焦あせり、さくらもポカンとしたのだが。

『わたし、いろいろ事態が急変して、また日本に戻ってきたのです！』

『あ、そうなんだー。またよろしくお願いねーっ』

　ずさんなアドリブに、心の美しすぎるはとこはニコニコと応じたのだった。

　リリアナもさくらの扱い方を呑のみ込んだらしい。この調子なら、また『魔法を教えて欲しいの～』と騒がれても、上う手まくさばけるだろう。

「……いつものことだけど、この家はにぎやかだよね……」

　幼なじみの徳とく永なが明あ日す香かがぼそりとつぶやいた。

　そう、今日のゲストは三人。その三人目こそが明日香だった。

「特にうるさい人間がいるわけでもないのに、家にあがったら毎回毎回いい感じで盛り上がっててさ……。ほんと、感心するっていうか呆あきれちゃうっていうか」

　徳永家が営む寿す司し屋や『すし徳とく』。

　ここのおかみさん（明日香の母）が、草薙家への差し入れを娘に持たせたのである。

　一流の寿司職人が手ずからヅケにしたマグロの赤身をもらうだけでは、申し訳ない。よって居間にあがってもらい、明日香にもおみやげを渡すことになったのだが。

「まー、あたしなんかはやっぱり凡ぼん人じんだからさ……。護堂やおじいちゃんとも一対一なら結構渡り合えるけど、草薙一族とか、その仲間まで出てこられたら、だいぶ旗色が悪いよね。何だかんだで、静花ちゃんもこの個性のなかで埋まい没ぼつしないし」

　居間での団らんを静観して、明日香はしみじみ言う。



　いつも威勢がいいくせに、この娘は草薙家の面々がそろう場では不思議としおらしい。前に理由を訊きいたら、『疲れる』と即答された。

「な!?　あたしを他の草薙家メンバーと同列に語らないで！」

「うーん。どうかなー、真世おばさんの血は結構濃そうだけどなー」

　静花にコメントを返しながら、明日香はまぶしそうにリリアナを眺め、それから草薙兄妹のはとこ——さくらに視線を転じた。

「もしかしたら、最後に護堂のそばにいるのはこういう人なのかもね……」

　ボソッと、謎なぞの評価を口にしながら。

　当のさくらは無む邪じゃ気きな笑顔で、護堂に声をかけていた。

「ねー、ゴドーくん。来週は暇ひまだったりするかな!?　冬姫ちゃんもひさしぶりに会って、今度こそお手紙を渡したいんだって。あたしもゴドーくんといっしょにお出かけしたいし。あ、よかったらリリアナさんや、学校のお友達とかもいっしょにどうかな？　みんないっしょだと、きっと楽しいと思うよっ」

3

　日曜日の夜も、護ご堂どうはバイトだった。

　場所は上うえ野ののアメ横よこに近い界かい隈わい。飲食店や飲み屋、パチンコ屋、カプセルホテルやサウナなどが集まった、にぎやかな辺り。

　独特のいかがわしさと活気で満ちた繁はん華か街がいだ。

　今日は『ちょっと特殊な』部類のバイトだった。夕暮れ時に護堂が入っていったのは、あまりきれいでない雑居ビル五階のバー

『three backs』だ。

　べつに会員制ではない。

　しかし、常連客ばかりが通いつめ、一いち見げんの客はまず来ない店だった。

　店主兼バーテンダーは『ささやかな商売だけど、何とかやっていけるから』と、ひっそりした営業スタイルを変えるつもりはないと言う。

　護堂はそんな隠かくれ家が的バーへ開店前に入り、着替える。

　事務室やバックヤードなどない店だ。オープン前の店内で、そそくさとワイシャツを着てネクタイを締め、ベストをはおる。バーテンダーのスタイルである。

「じゃあ俺、掃除をはじめます」

「うん、お願い。あ、終わったら仕込みの方も手伝ってもらえるかな」

　護堂が声をかけると、店主兼バーテンダーのヤナギさんは言った。

　年齢は三〇代半ば。線の細いイケメン。

　バーテンダーとしての腕も抜群だが、趣味で覚えたという料理の腕も一流——。そして、草くさ薙なぎ護堂の雇やとい主ぬし。それがヤナギさんのプロフィールだ。

「はい。……珍しいですね。今日は予約でも入っているんですか？」

　いつもはヤナギさんが料理の仕込みをする間に、護堂は掃除を済ます。

　そのまま開店に——という流れなのだが。

「あれを予約というのかな？　さっき携帯にタカさんからメールが入って『今日はパエリアを食べたい。海かい鮮せんのピザも。よろしく』だって。他にも何人かの常連さんから、メニューにない注文

が入っていてね」

　苦笑しながら、ヤナギさんはスーパーの袋から食材を取り出す。

　普通、この手の店ではガッツリした料理は供さない。バーはあくまで酒を愉たのしむところ……というスタンスからだ。

　しかし、ヤナギさんの腕を知る常連客は、よくメニューにない料理を注文する。

　おかげで洋風居酒屋よろしく、ワインなどに合いそうな洋食メニューを作る羽目になるらしい。さすがに和食や中華はリクエストされても断るそうだが。

「そういうわけで、いつもより仕事が多い。頼りにしてるよ」

　ヤナギさんは決して声を荒らげることのない、やさしい雇い主だ。

　実は母の友人でもある。夏休み前、バイトを探していた護堂が『何かいいのないか？』と母に訊たずねたら、『若い、できれば未成年のお手伝いを、不定期でもいいからって探してる知り合いがいる』と紹介されたのだ。

　さすがに高校生は無理だろうと思いながら、面接を受けたら——。

「ところでヤナギさん、どうして俺みたいなのを雇ってくれたんですか？」

「基本的に、僕だけで何とかする店だしね。本気でバーテンダーになりたいって子を、弟で子しや見習いとして常勤させる余裕もない。というわけで、忙しそうなときだけ手伝ってくれる子が欲しかったのさ。それに——」

　ヤナギさんはたぶん、やさしいだけの人ではない。

　護堂が持ってきた履り歴れき書しよの生年月日を自みずから書き換え、一八歳以上にして『君、採用』と宣言したときにそれはわかっている。

「ちょっといいなって思う、スレてない素直な男の子をそばに置い

て働くのはね……。たぶん、君が想像する以上に僕の疲れを忘れさせてくれるのさ。ふふふ、よくわからないままの君でいてくれよ。そこが護堂くんのよさだからね」

　と、たまに変なことをつぶやく人でもあった。

　もしかしたら常連のヒデコさんがいつか言ったように、

『店長って、絶対そっち方面の人だよね☆　仕草がとっても色っぽいもん！』

　なのかもしれない。だが護堂は、深く気にしていなかった。

　このバイトの雇用形態や時給はこちらにも都合がよく、基本的にヤナギさんも好きだし、店も常連の人々も好きだった。ならば、それで十分ではないか。

　清せい濁だくあわせ呑のむ。

　多少のルール違反もケースバイケースでＯＫ。

　それらの気質を無意識に発揮しながら、今日もバイトをこなす護堂だった。

　また、ここで働くことは、べつの仕事や出会いをもたらしてくれる。やはり、わずかな罪悪感のせいでやめるのは惜おしかった。

「ゴドーちゃん今度さ、草野球の助すけっ人とを頼んでもいい？」「御おん嶽たけ山さんの奥深くに分け入ってね、山菜採りをするんだよ。バイト代出すから手伝ってくれないか？」「来月、この近くでワインの試飲会やんだって。みんなで行こうよ。店長とゴドーちゃんもいっしょに！」「ら、来週の棚たな卸おろしに人手がたくさん欲しいんだっ。バイト探してるって言ってたよね⁉」「利と根ね川がわの最源流を目指す、過か酷こくな計画があってね……。体力に自信のある男を探している」「現物支給しかできないけど、今度のイベント――即売会、売り子やってちょうだいっ」

　等々。バーのカウンターでのやりとりだった。

　ヤナギさんを手伝ってグラスを磨みがいたり、酒のボトルを準備したり、食器を洗ったりしていると、さまざまに声をかけられる。

　前に『いいバイトがあったら誘ってください』と、常連の誰かに言ったのだ。

　その後、いつのまにか『若くて体力があって怠なまけたりせず、順応性のやたら高いバイト募集中男子』の存在が常連さんたちに知れ渡っていた。

　今では、護堂のこなすバイトの半分以上がここで紹介されたものだ。

　まあ、バイト以外のお誘いもあったが、面白そうなものにはときどき顔を出した。

　草薙護堂はタフな方だと思うが、たまには学校も魔王カンピオーネのことも忘れて、羽をのばしたくなるのだ。

　そして、この日のバイトは終わった。

　営業終了後、バーの掃除と片づけを済ませる。

　時刻は一二時近く。もうすぐカレンダー上では月曜日になる。

　いつもなら閉店したあとで、まかないをご馳ち走そうになったりする。しかし、今日は料理がよく出たので、食材が余っていなかった。

　というわけで、レジの精算をするヤナギさんに挨あい拶さつして、先に店を出る。

　ラーメンでも食べてから帰ろうか——。

　そういえば、野球仲間の瑠る偉いから『よかったらバイトのあととか、面白い屋台があるから行ってみない？　三み浦うらくんとか中なか山やまくんも誘って。どうせぼくたちみんな、この辺に住んでるんだし』と誘われていた。

　今日はともかく、来週辺り声をかけるのもいいな——。

　そんなことを考えながら、護堂はマウンテンバイクにまたがって春かすが日通どおりを目指す。

上うえ野の御お徒かち町まちを経へて湯ゆ島しまに向かい、不しのばず忍通どおりに沿って根ね津づ三丁目への帰き路ろにつく。おきまりのルート。通い慣れた通勤路だ。

——しかし。

今日は見知らぬ連中が、行く手に立ちはだかった。

三人もいる。皆、異様な風ふう体ていだ。

黄色いツナギの上下——トラックスーツというヤツか。

ずっと昔に見た、偉大なカンフースターの映画を思い出した。あと、日本刀を振りまわす金髪美女が復ふく讐しゅうに挑いどむアクション映画も。

三人の顔は見えない。京きよう劇げきを思わせる、異様なメイクで顔を塗ぬりたくっている。

ホアアアァァァァァ……。

不気味な息吹いぶきが、三人の口から洩もれる。

そしてこの連中は、怪あやしい拳法めいた構えを取った。

真っ向から草薙護堂をにらんでいる。その瞳ひとみに宿る敵意と殺気。そうか——これは敵襲、しかも闇やみ討うちなのだ。

状況を理解して、護堂はマウンテンバイクを止めた。

4

「俺に言いたいことがあるなら、一応聞くぞ」

護ご堂どうはマウンテンバイクにまたがったまま、怪しい三人組に呼びかけた。

数で負けているのだ。機動力の優位は捨てたくない。……冷静にこんな計算をする自分が、ちょっとイヤになったが。

「恨うらみを買う覚えは……まあ、あるようなないような微妙なところだけど、恨み言でも脅きよう迫はくでも苦情でも、言いたいことがあるヤツから逃げる気はないんだ」

　さすがにあれだけの騒ぎを起こしてきたのだ。

　恨まれているかは微妙だけれども、苦情を言いたい人間はヤマといるだろう……。身に覚えがありすぎる護堂だった。

　だから、まずはおだやかに訴えてみた。

　——しかし、三人組の返答は無。

　シアアアァァァァァッ！　フオォォォオッ！　ヘアアッ！

　ふたたび不ぶ気き味みな息吹いぶき、そしてかけ声。さながら怪け鳥ちようの叫びだ。

　問答無用ということか。彼らの手には物ぶつ騒そうな道具が握られている。麻あさ縄なわ、手て錠じよう、そして液体の入った注射器——！

　まさか、草薙護堂を捕とらえるつもりなのか。

　気づいた瞬間には、もうマウンテンバイクのペダルを踏み込んでいた。

　一気に加速。突っ込むのは、三人組のまんなかにいる男！

　怪しい三人は、いきなりの突撃にたじろぎ、パッと左右に散開した。

　できたスペースにマウンテンバイクを突進させる。さらに加速。三人組による通せんぼを、あっさりと突破した。

　護堂は予想以上のあっけなさに、拍ひよう子し抜ぬけした。

　しかし、すぐに思い直した。

　連中が後ろから猛スピードで追走してくる。三人とも街乗り用のママチャリにまたがって、全力でペダルをこいで！

　護堂が乗るのはマウンテンバイクである。

　軽さではロードバイクに劣おとるが、ママチャリよりも圧倒的に軽量のはず。ギアの段数も桁けたちがい。加速性能ではこちらが上のはずだった。

　にもかかわらず、三人組のママチャリはじりじり護堂との差を詰めてくる。

　これは脚力の差——ではない。きっと気迫の差だ。

　後方から迫ってくるのは、三人組だけではなかった。彼らが全身から発している『何としてでも絶対に捕らえてやる！』というオーラもだった。

　追われる者のプレッシャーを感じながら、護堂は不しの忍ばずの池いけのほとりを走る。

　——このとき、三人組のひとりが咆ほう哮こうした。

「フォアアアァァァァァッ!!」

　魂たましいの叫び。それはおそらく、肉体の力を全て振りしぼるための気合い声。

　ママチャリの一台が爆発的に加速した。

　ついに護堂のマウンテンバイクに追いつき、隣を併へい走そうする。そして、この怪人はママチャリの上からジャンプした。

　そう、横にいる草薙護堂めがけて！

　さながらフライングボディプレス。空中殺法を得意とするメキシカンプロレス風にいえばプランチャ。華麗で、しかも自みずからをも滅ぼす攻撃だった。

「うわあああああああっ!?」

　決死の自爆攻撃を受けて、護堂はマウンテンバイクごと横転した。

「あ痛いててて……」

うめきながら、護堂は立ち上がる。

あちこちに打だ撲ぼくと擦すり傷きずを負っている。この程度、今までの死闘で受けた傷に比べれば文字どおりのかすり傷ではあったが……。

隣では、空中殺法を仕掛けてきた怪人も立ち上がっている。

こちらも似たりよったりの負傷状況。骨折等の重傷ではなさそうだ。

しかも、仲間のふたりがママチャリで追いついてきた。今度は通せんぼではない。まわりを包囲されて、退路を断たれた。

いよいよマズそうだ。しかし、護堂は首をかしげてもいた。

いつまで経たっても、ウルスラグナの権けん能のうが使える確信はわいてこない。つまり、相手は常人の域を出てないことになる。そして、今の追跡劇。

相手がエリカたちや陸りく鷹よう化かなら、自前の走力で追いつき、追い越せるはず。

この連中は一体、何者だ!?

——疑問に思った瞬間、騎兵隊が駆けつけてきた。

「王様、大丈夫!?　こいつらはすぐに片づけるから、待ってて！」

「護堂、あなたの騎士がどれほどの武ぶ勇ゆうと美を戦場で示せるか、とくとご覧なさい！」

闇やみのなかから飛び出してきたのは、よく知るふたりだった。

太た刀ちの媛ひめ巫み女こ・清せい秋しゆう院いん恵え那な。

もうひとりはもちろん、エリカ・ブランデッリ！

……そこからの立ち回りは、まあ特筆すべきものは何もなかった。

たとえば恵那の掌しよう底ていが怪人Ａのあごを打ち抜きＫＯしたとか。

エリカのあざやかな裏うら拳けんが怪人Ｂの頬ほおげたを抉えぐって悶もん絶ぜつさせたとか。

最後の怪人Ｃには、恵那が派手な回し蹴りなどより地味だが殺さつ傷しよう力りよくは遥はるかに高そうな前まえ蹴げりでみぞおちを容よう赦しやなく突き上げたとか。その直後、エリカが動きばかり大きくて実用的ではない跳び蹴りのなかで、唯ゆい一いつ実戦での有効性を多くのストリートファイターが証言するジャンピングニーでこめかみを強襲したとか、くだくだ詳しよう述じゆつするのはきっと蛇だ足そくであろう。

そんなわけで、気絶した三怪人。

彼らを尻しり目めに護堂、エリカ、恵那の三人は向き合っていた。

「ありがとう、助かった。……でもおまえら、何で都合よくここに？」

「事の起こりはたいしたことじゃないのだけど、たまたま恵那さんが東京に来ていると教えてくれた人がいたのよ」

まず、エリカがしれっと言った。たまたまか。

護堂は思った。きっと、いくつかの必然が絡からまり合った『たまたま』なのだろう。たとえば、誰かに情報提供を依頼するとか。

「東京の浅あさ草くさにある、何とかいう人の道場にいたのよね」

「青せい龍りゆう先生の道場だよ。恵那や甘あま粕かすさん……つまり、正せい史し編へん纂さん委員会の関係者が習う剣術の先生でね。浅草に青龍先生、世せ田た谷がやに白びやつ虎こ先生、麻あざ布ぶに朱雀すざく先生、王おう子じに玄げん武ぶ先生の四人がいるんだ。この人たちが師し範はん代だいで、恵那たちにいろんな武芸を教えてくれるの」

「……あだな、みたいなものか」

恵那が列れつ挙きよしたのは、いずれも奇妙な名前ばかりだった。

「うん、そう。武術に関しては、恵那よりすごい人たちだよ。帝都の四し天てん王のうみたいな感じ。で、王様や祐理のところに顔を出す前にフラッと道場に寄ったら、いろいろ訊かれちゃった」

「いろいろ？」

「師範代の青龍先生とか、お弟で子しの人たちにさ。その、恵那もとうとう嫁に行くのかって」

　天てん衣い無む縫ほうにして晴せい朗ろう、快活が身上の清秋院恵那。

　そんな彼女が頬を赤らめ、もじもじしながら言った。らしくない振る舞いが普段との落差を生み、ひどく可か憐れんだったのだが。

「よ、よめ？」

「うん……みんな、王様とのことを聞いてたみたいで。『もう赤ん坊はいるのか』とか『花嫁修業は大丈夫なのか』とか、うるさく訊かれちゃった……」

「えええええっ!?」

　ちょっと目を伏せながら報告する恵那。その姿は新鮮で、ドキッとさせられる。

　彼女が着ているのは、いつもの――所在不明の高校の制服である。

　日曜日にする格好ではない。自らを飾ることのない少女なのだ。しかし、そんな少女が草薙護堂への思し慕ぼを初うい々ういしく表している。親密な関係にあることを幸福に感じているとストレートに伝えてくれる。

　それはもちろんうれしいのだが……。護堂はクラクラした。

　どう彼女に応こたえたらいいか、わからなくて困る。それに『赤ん坊』や『花嫁修業』という言葉が出るのはどうだろう？

　恵那ともいろいろあったのは厳げん然ぜんたる事実。

　しかし、そこを云うん々ぬんするのは時期尚しよう早そうではな

いか——。

　たじろぐ護堂の横で、エリカがちょっと怒り気味の口調で言った。

「ええ。そういうやりとりが道場でされているのを、わたしはたまたま知ってしまったの。だから、あの人たちの誤ご謬びゅうを正さなくちゃいけないと思って、ちょっと道場に入ることにして……」

　また『たまたま』か。まあ、そこは突っ込むまい。

　むしろ気になるのはシチュエーションの方だ。それではまるで——

「あんな派手な道場破り、初めて見た。あのときのエリカさん、本当に目立ってたよ」

　恵那の言に、護堂は深くうなずいた。やっぱり、そう取られるよなーと。

「そこからもいろいろあったけど、まあ恵那さんとわたしのどちらが愛人として高みにあるのかをあそこの人たちの前で示すという話になって、おたがいの思うところを語り合ったり演説したり、剣や料理の腕を比べ合ったり——」

「料理？　清秋院は料理できたのか？」

　紅あかき美少女と家事。両者に接点が生まれることは、未来永えい劫ごうありえまい。

　なので護堂は無駄を省はぶき、恵那にだけ訊ねたのだが。

「あー……うん。釣つった魚を塩焼きにするのは上う手まいよ。あと鶏にわとりとかウサギをシメて、毛をむしったり血抜きしたりして、肉にするのもいい線いってると思う。その先は丸焼きか煮込みくらいしかできないけど」

　さすが自然児らしい、ワイルドな回答だった。

　この連中はどう腕を比べたのだ？　詳しく訊くべきか護堂は悩んだ。

「結局、ふたりの間に決定的な優ゆう劣れつはいまだないということで結論が出たのだけど、今度は恵那さんとの間で新しい論争が起きてしまったの」

「……論争？」

「うん。ねえ王様、今度の冬休みさ、温泉とスキーどっち行きたい!?」

「わたしはね、スイスにでも出かけてスキーに興きようじるべきだって主張したの。わたしの家では毎年、冬はそうしているの。ブランデッリ家の山荘にはパオロ叔お父じさまも来るし、なかなかいいと思わない？」

「恵那は温泉がいいなー。秩ちち父ぶの清秋院本家が持ってる山にはね、恵那以外は誰も知らない本物の秘ひ湯とうがあるんだ。雪山に登るのは大変だけど、結構楽しいよ？」

「で、どちらがいいか護堂の意見も聞こうと思って」

「エリカさんに人捜しの術を使ってもらって、居場所を調べたんだ。そうしたら王様が襲われてて、助けに入ったんだよ」

「さあ護堂。どちらの計画に惹ひかれるか、忌き憚たんのない意見を聞かせて頂ちよう戴だい」

「うん、正直どっちでもいい。それより今はあっちだろ」

　気絶した三怪人の方を、護堂はちらりと見た。

　エリカと恵那、破は天てん荒こうでマイペースという点では似たもの同士だと思いつつ。

「あー、この連中かあ。背後関係とか、素直に教えてくれるかなー？」

「素直じゃなかったら、素直になってもらうしかないわね。……でもわたし、実はそういう優美さに欠ける交渉とか苦手なのよね」

「へー意外。エリカさんのことだから、その手のことにも詳しいと思ってた。イタリアって昔、毒や拷ごう問もんが流は行やってたんでしょ？」

「ええ、ルネッサンスの昔からね。チェーザレ・ボルジアの故事を引くまでもなく、それも戦国の慣ならいだもの。ただ、エリカ・ブランデッリの流儀とはすこし異なるものよ」

「そっか。恵那も苦手。荒あら行ぎようとかは大丈夫なんだけど、拷問はちょっとねー」

「やっぱり、正々堂々の決闘こそが騎士道の華ですもの。でも、刺し客かくとしてカンピオーネのもとへ来たのよ。きっと護身の魔術で脳を保護して、捕まって読どく心しん系けいの術をかけられても大丈夫なよう、細さい工くしているわ」

「だよね、きっと……。仕方ない、とりあえず水につけてみようか」

「ええ。幸いというのも何だけど、そこに池もあることですし」

　おまえら、最初に拷問方法の心配か……。

　ふたりは想像以上に思考のベクトルが似ているらしい。性格はあれだけちがうのに。意外に思いつつ、護堂はエリカと恵那を止めようとした。

　だが、ちょっと遅かった。

　ボン、ボン、ボン。重い物が三つ、水に放り込まれる音。

　しかし、この処置で三怪人の正体が明らかになった。不忍池に落とされたことで、彼らの顔をペイントしていた染料が洗い落とされたのだ。

　……名な波なみ、反そり町まち、高たか木ぎ。

　護堂のクラスメイトである、通称三バカの顔が出てきたのであった。

「事の起こりはそう、先月のホームルームだ……」

　不しの忍ばずの池いけからサルベージされた三バカの一、名な波なみが語る。

　全員、ブルブル寒そうに震ふるえている。一〇月の夜にずぶ濡ぬれになったのだ。夜風にさらされて、体の芯しんまで冷え切っているだろう。

「あのとき、オレたちは満を持して、学園祭のクラス企画として『スク水＋猫耳メイド喫茶』を提案した……！　三か月間、練ねりに練った渾こん身しんのアイデアだった！」

　反そり町まちが熱い口調で叫ぶ。

　あー、あれかと護ご堂どうは思い出した。クラス中の女子から反対された企画だ。

　クラス投票にさえ回されず、即ボツになった。

「しかし、オレたちにはまだ腹案があった。クラスの企画ではなく、生徒有志として学園祭に参加すればいいとッ。『スク水＋猫耳メイド喫茶』を実現しようと仲間集めに奔ほん走そうした。過去のしがらみも忘れて草薙、おまえにさえ声をかけた！」

　と、今度は高木が言った。

　しかし護堂は、その主張に首をかしげた。

「俺、そんなのに誘われたか？　大体、おまえたちと何かで揉もめたっけ？」

「んぐっ！　これだからリア充じゅうは……」

「余裕見せやがって……」

「く、草くさ薙なぎ……揉めた云々はひとまず置くとしてだな。オレたちの誘いを忘れたとは言わさないぞ!?　オレたちは断だん腸ちようの思いでこう頼んだのだ！　『どうか「スク水＋猫耳メイド喫茶」のメインキャストとして、エリカさま、万ま里り谷やさん、リリアナさん、そしてできれば草薙妹を抜ばつ擢てきしたい。説得に力を貸してくれ』と！」

「そういえば、頼まれたな……」

　だが、それでは草薙護堂を誘ったとは言わないような。

「いや、俺ひとりのことだったら、時間が空あいてる限り手伝ってもいいんだけどさ。さすがにエリカたちはちょっとなあ……。そりゃ断るだろ」

　頭をかきながら護堂は言う。すると、不思議そうな恵え那なに訊たずねられた。

「王様、どうして断ったの？　説得くらいしてもよかったんじゃない？」

「なあエリカ。もし俺が頼んだら、承しよう諾だくするか？」

「検討にも値あたいしないオファーね。聞くまでもないことでしょう？」

　エリカに一いつ蹴しゆうされて、心からうなずく。

　ま、そうなるよなーと。護堂たちのやりとりに、三バカは涙を流した。

「そうこうするうちに、学園祭の日がどんどん近づいてくる……！　残された時間は着実にすくなくなっていく……！　そこでオレたちは最後の賭かけに出た。草薙を捕ほ虜りよとし、その身み柄がらとひきかえにメイドをやってくれと、エリカさまたちに迫る！　そういう計画だったのに！」

「いやー。もっとマシな計画を立てるべきだろ」

　しみじみと護堂は言った。ヤケになるにも程がある。

「それで護堂、この子たちをどうするつもり？　仮にも誘ゆう拐かい未み遂すいだったわけだし、相応の仕返しをしてもいいと思うわよ」

「だよねー。目には目をじゃないけど、ビシッとやってもいいんじゃない？」

　エリカと恵那から問いかけられた。

しかし、護堂はかぶりを振った。多少の擦すり傷きずは負ったが大事ではない。

それにこの三バカ、ときどき妙に敵対的になる。

連中がエキセントリックなのはまちがいないが、たぶん護堂の方にも敵意を刺激する何かがあるのだろう。それが何か、今ひとつわからないが……。

まあ、いろいろあるが、こいつらは結構愛すべきバカだとも思う。『スク水＋猫耳メイド喫茶』の是非はともかく、その実現に向ける情熱は本物だとも感じるし——。

そこまでつらつらと考えて、護堂はふと思いついた。

「もしおまえらが望むならだけど、紹介してやってもいい知り合いがいるんだ。とりあえず、そいつと話だけでもしてみるか？」

かいつまんでアイデアを語ってみる。

すると三バカの瞳ひとみは、すこしずつ輝きを取り戻していった。

「く、草薙。お、オレたちはおまえのことをすこし誤解していたようだ……」

「心の友よ！」

「おまえも我らが同志——メイド道を往ゆく者だったか!?」

「いや、べつにまだどうともなっていないし」

熱っぽく口走る三バカに対して、あっさりと言う護堂であった。

それから数日後の秋あき葉は原ばら。

かの香ホン港コン陸りく家けが根城とする雑居ビル。そのなかのメイド飲ヤム茶チヤ房ぼう『國こく士し無む双そう』。

一般客は決して立ち入れないＶＩＰルームが、ここの奥にはあった。メイドたちも飲み物と点心をときどき運んでくるだけで、滅め

つ多たに近づかない。

「あの三人、精力的に準備を続けていますよ」

　トランプの手札をにらみながら、陸りく鷹よう化かは言った。

　沙さ耶やの宮みや馨かおると甘あま粕かす冬とう馬ま、そして護堂がいる。皆で正方形のテーブルを囲んでいる。カードを楽しむための専用卓である。

　他にもビリヤードの台やダーツなど、遊び道具には事欠かない。

「叔お父じ上うえのところの学園祭ですか？　それに間に合わせるんだってメイドの人選、制服の発注、食材やら資材の調達に励んでいます。行き届かないところはうちの舎しゃ弟ていにフォローさせますので、ご安心ください」

「悪いなあ、鷹化。いろいろ無理を言って……」

　手札を捨てながら、護堂はあやまった。

　例の夜のあと、三バカを陸鷹化に紹介したのである。香港陸家については伏せ、家業でメイドを扱っている専門家の友人だと言って。

　この『甥おい』をあそこで思い出したのには、理由がある。

「ま、本音を言うと、やっぱり叔父上ご自身のプロデュースするメイド御ご殿てんがいいんですけどね。今のところはご学友のお遊びにつきあって、学園祭でメイド喫茶というのでもかまいませんよ。こうしてるうちに、叔父上のモチベーションが上がるかもしれませんし」

「陸さん、そんな話を草薙さんに持ちかけてたんですか？」

「メイド御殿か。陸くん、よかったら僕も一枚噛かむよ」

　やはり手札を眺めながら、甘粕が口をはさむ。

　馨もフフッと微笑する。いつのにまにか、陸鷹化の呼び方が変わっていた。中性的な媛ひめ巫み女こは、さりげなく人と距離を埋めるのが上う手まいようだ。

「叔父上が『女』を扱う名人でいらっしゃることは、天下万ばん民みんの知るところ。そんな英えい傑けつが非凡なる見識を注ぎ込んだメイド御殿――絶対にウケるし儲もうかると思うんだけどさ。叔父上ご自身がどうにも乗り気でないから、困っているんだよ」

「いや鷹化……俺のことを変なふうに誉ほめるのはやめてくれ。事実誤認だし」

「ご冗談を。我が師し父ふの手た綱づなを取る、卓越した女さばき――その技の冴さえには心底から感服しております。さらに、じゃじゃ馬のエリカ姐ねえさんまであのとおりに……。ふふふ、それでこそ鷹化が叔父上と慕したう御方です」

　いつだったか、このビルで再会したあと。

　陸鷹化から要請されたのが、メイド御殿とやらのプロデュースであった。護堂は迷うことなく、即答で断ったのだが。

「ま、はいそうですかとなるのも芸がない。叔父上に『メイドに関することで陸家の力が必要なときは、何なりとお声を』と申し上げておいたのさ。お役に立つ機会がこんなに早く来るとは思わなかったけどな」

　陸鷹化が甘粕、馨らに語っている。

　そう。そのような事情だったので、護堂は三バカの件を頼んだのである。メイド御殿はともかく、いつか何かの形で借りを返すとしよう。

「でも、いろいろゴタゴタしてたのが丸く収まって、そこはよかったかな」

　カードの山から一枚引きながら、護堂はつぶやいた。

　すると、甘粕が肩をすくめた。非常識人の筆頭であろう馨にまで苦笑された。

「普通はこんな収め方、思いついたりしないんですけどねェ……」

「護堂さんって、清せい濁だくあわせ呑のむにも程ほどがある人ですよねー」

「ええと……そんなこともないと思います。すこしは変わっているでしょうけど、俺は基本的に、かなり普通の人間のはずですし」

　心からの訴えだった。

　しかし、周囲の反応は鈍にぶかった。

「はー……なるほど。叔父上的には、数々の戦いも大冒険も『普通』でしかないと。まさに不動の平常心。勉強になります」

「ていうか、普通の高校生はこんな部屋でポーカーやブリッジなんてやりません」

「すくなくともぼくは、自分以外の人間があれだけの綺き麗れいどころに囲まれて青春を謳おう歌かしているの、見たことないなあ。護堂さん、そのご発言に説得力は皆かい無むですよ」

　口々に言われて、護堂は思わず憮ぶ然ぜんとした。

　秋も一日一日と深まっていき、いずれ冬の足音が聞こえてくる――。

　そんな季節の一幕だった。

おまけ編　邯かん鄲たんの夢。もしくは Maid in Heaven

　夜。目を覚ました護ご堂どうは、なぜか教室にいた。

　寝床＆布ふ団とんにしていたのは段ボール。新聞紙と並ぶ、即席寝具の代表格だ。

　護堂は枕まくら元もとの携帯電話を取り上げた。午前三時ちょっと過ぎ。

　喉のどのかわきを感じつつ、寝ぼけ眼まなこで周りを見る。

　金をかけてない割りに上う手まく飾り立てた教室内。自分と同じように、段ボールを寝具に眠る男子生徒が三人。近くの机には小さな陶とう製せいのビン。

　ビンには何が入っているのだったか？　たしか飲料だったはず。

　寝ぼけながら護堂は、ビンの中身をグイとあおった。そのままバタンと眠り込む。

　チュンチュン。小鳥のさえずりが聞こえる。

　やわらかなシーツ。窓から差し込む、穏やかな朝の日差し。完全なる覚かく醒せいに向かう途中の、朦もう朧ろうとしたまどろみ――。

　全すべての心地よさを満まん喫きつしながら、護堂はその音を聞いた。

　キュルキュルという、複数の小さな車輪が回り、床をこする音だった。

「おはようございます、護堂さん。今け朝さはずいぶんとごゆっく

りなんですね？」

　さわやかな朝に似つかわしい、小鳥のように軽やかな声。

　護堂はシーツを払いのけ、身を起こす。

　ベッドの上から声の主——メイドの衣装に身を包んだアリアンナと向き合う。

「まだお着替えも済ませてらっしゃらないなんて……。いつもあんなに早起きですのに」

　護堂はパジャマ代わりとおぼしきタンクトップ姿だった。

　そう指摘したアリアンナは、小さなワゴンを押しながら部屋に入ってきたところだ。

　焼きたてのパン特有の、たまらなくよい匂においのするクロワッサン。珈コー琲ヒーの芳ほう香こうと湯気をくゆらせる、エスプレッソのカップ。

　それらがワゴンに載のっていた。二人分の朝食らしい。

　護堂はどぎまぎした。エリカのメイドである彼女が、なぜ自分の寝床に？　そもそもここはどこだ？　俺は今まで何をしていたのだ？

　そんな疑問を気にしたふうもなく、アリアンナはベッドサイドにワゴンを止めた。

　そのまま一礼し、静かに部屋を去っていく。

　ハンドルを握らせなければ、厨ちゆう房ぼうで鍋なべと対面させなければ、彼女は清せい楚そさと控えめな有能さを最高レベルで兼けん備びするメイドの鑑かがみなのだ。

「う……ん……」

　悩ましげな声が聞こえた。すぐそばの布団から。

　うすい布団に少女がくるまっている。赤みがかった金髪。大輪の椿つばきを思わせる、あでやかな美び貌ぼう。しどけなく寝乱れる

美少女は、もちろんエリカ・ブランデッリであった。

　あれ？　護堂は首をかしげた。

　寝るときはいつも、厚着を好まないエリカである。

　パジャマの類たぐいは絶対に着ない。タンクトップに下着、時には何も身につけぬまま（！）ベッドに入る。しかし、今朝は寝ね間ま着きを着ているようだ。はだけた布団から、彼女がまとう黒と白の衣装をかいま見ることができた。

　……が、それよりも今は、他の問題を追及すべきだった。

「エエエエエエエエリカ、何でこんなところに？　い、いや、むしろ俺の方がどうしてこんなところにいるんだ!?」

「……あら護堂、あいかわらず早いのね…………」

　寝ぼけた声で言われた。

　覇は気きと鋭気と華か麗れいさの全てを持つのが、エリカという少女だ。

　しかし、朝だけはそれらが陰かげってしまう。代わりに庇ひ護ご欲よくを刺激する可か憐れんさ、そしてあどけなさを手に入れる。まったく、何てヤツだ。

「ふふっ。起きていたのなら、もっと早く起こしてくれてもよかったのに……。早起きは大きらいだけれども、愛いとしいあなたが枕元で甘いささやきをくれるのなら話はべつよ……」

　いつもとちがうエリカの魅み力りよくに、護堂は困惑した。

　正直、彼女のこういう面を見せられると参まいる。ただでさえ抗こうしがたい魅力で満ちあふれているのだ。さらに強化するなど反則だ。白しろ旗はたをあげて降参したくなる。

「ねえ護堂……おねだりをしていいかしら」

　エリカが横おう着ちやくして布団をかぶったまま、身を寄せてきた。

「おねだり!?」

「ええ。ひさしぶりに、あなたと共に迎えた朝なのですもの。然しかるべき儀礼セレモニーを経へてから、行動を開始すべきだわ。愛し合う恋人同士には不可欠な、朝の儀式を」

　蜜みつのように甘いささやき。まるで睦むつ言ごとだ。

「そ、そんなことを言われても、俺には何のことかさっぱり……」

「ふふっ。あいかわらず鈍にぶい人ね。わざわざ説明しなくてはわからないの？」

　すぐそばにあるエリカの顔が、やわらかく微笑む。

　人を陥おとしいれる悪魔の笑顔ではない。狩かりと闘争に明け暮れる、雌め獅じ子しの顔でもない。女性的で包容力に富み、ほのかな母性すら感じさせる、初めて見る表情だ。

　まずい。どきどきする。

　いつまでもエリカとの時間を愉たのしんでいたい。

　護堂は強い衝しよう動どうに揺さぶられ、そして、ある事実に気づいて愕がく然ぜんとした。

　自分と彼女の距離はどうだ？　いつのまにかエリカと密着している。豪ごう奢しやとしか言いようのない量感を誇る、彼女のやわらかな胸。その感触が腕に押しつけられている！　手まで重ねられて、耳元でささやき声を聞いている！

　エリカとの必要以上の接触を、かつてあれだけ警戒していた護堂である。

　しかし今は、本当に無警戒のまま密着を許してしまった。きっと、エリカにまったく殺気がなかったせいだ。彼女はおそらく、護堂に避けられるなどまったく想定せずに体を寄せてきた。それゆえに自然と受けいれてしまったのか――。

「この程度の報ほう償しよう、あたえて然るべきだと思うわよ？　何といっても、昨夜はあなたの命令どおりに、あんな衣装まで身につけてあげたのだし。……ああ、そういえば着たまま眠ってしまっ

たのよね。――ふふっ、また見てみる？」

　エリカがかぶっていた布団を振り払った。

　彼女のまとう黒と白の衣装を直視して、護堂は仰ぎよう天てんした。これはいわゆるエプロンドレス、アリアンナも愛用するメイドさんの制服ではないか！

「あなたってば、ときどき本当に抗あらがいがたいほどの威厳と強引さを発揮するのですもの。昨夜もやられてしまったわ。……命じた人間が草薙護堂でなかったら、わたし、その相手を必ず剣の錆さびにしていたはずよ」

　とろんとした目つきのまま、エリカが甘えかかってくる。

　エプロンドレスの胸元がはだけており、豊かな胸の谷間をのぞくことができる。護堂はあわてて目を逸そらした。

「もう……今度はじらして弄もてあそぶつもり？　わたしの王様は、本当にひどい人なんだから」

　甘い言葉を吐はき出しながら、エリカの方からキスしてきた。

　護堂はその心地よさに慄りつ然ぜんとした。

　最初は朝のさわやかさにふさわしく、静かな接触。やがて唾だ液えきで唇くちびるが湿しめり、粘ねん膜まく同士が貼はりつきあう。くちゅくちゅとエリカの唇が蠕ぜん動どうし、護堂のそれをやさしく包み込む。次に来るのは、もちろん彼女の舌した――。

　ダメだ。とっさに護堂は、エリカを振りほどいた。

　このままでは耐えられない。彼女に懇こん願がんされるにまかせて、どこまで突っ走ってしまうか自分でもわからない。逃走あるのみだ！

　ベッドから飛び降りた護堂は、ドアへと走る。

　寝室の外へ出るなり、意識が暗転した。何なんだ、これは――

　チュンチュン。小鳥のさえずりが聞こえる。

　やわらかなシーツ。窓から差し込む、穏やかな朝の日差し。完全なる覚かく醒せいに向かう途中の、朦もう朧ろうとしたまどろみ——。

　全ての心地よさを満まん喫きつしながら、護堂はその声を聞いた。

「……朝食の準備が整いました。お目覚めください」

　リリアナ・クラニチャールの声だった。

　さっきはエリカで、今度はリリアナ……。不安を覚えながら、護堂は身を起こす。

　洋風の寝室。ここはベッドの上。ちょっと向こうにあるテーブルには、コーヒーとオレンジジュース、オニオンサラダにベーコンエッグ、焼きたてであろうトーストのひと揃い。アメリカンスタイルの朝食のようだ。

　その辺はいい。問題は、ベッドサイドに立つ女騎士だ。

　美しい銀髪をポニーテールにまとめたリリアナは、なぜかメイドの衣装を着ていた。妖よう精せいのごとき細い肢し体たいを、黒と白のエプロンドレスが装飾している。

　似合うか否いなかでいえば、よく似合う。

　まことに結構な装いだろう。しかし、彼女はなぜこんな格好を？

「……そのコスプレの意味を教えてくれないか？」

「コスプレ？　心外なおっしゃりようですね」

　護堂の問いかけに、凛り々りしき女騎士（今はメイドか）が眉まゆをひそめる。

「そもそも、サイズちがいで届けられたカレン用の服を見て、着てみないかとわたしに提案したのは草薙護堂……あなたです。しかも、この間エリカに気まぐれで着させてみたら、なかなかの趣おもむきだった——などと、卑ひ怯きような論法を以もつて」

ちょっと待て。何だ、その不ふ謹きん慎しんな思いつきは。

憤ふん然ぜんと訴えるリリアナと対たい峙じしながら、護堂はめまいに似た感覚を味わった。

「このような衣装をまとったと知られては、騎士の面めん目ぼくにかかわります。わたしとしては、受けいれがたいご命令でした。ですが、第一の騎士であり王の執しつ事じたる者としてエリカに後おくれを取るわけにもいかず、仕方なく袖そでを通し——」

雪のごとく白い肌が、うなじまで真っ赤に染まる。羞しゆう恥ちのせいだ。

ひどく可か憐れんで、そしてけなげなリリアナの姿だった。

「この姿を鑑かん賞しようできるのは、草薙護堂だけの特権……そう思ってわたしは恥ち辱じよくに耐え、この責め苦が早く終われと念じていました！　なのにあなたは『よく似合うじゃないか』などと涼すずしい顔で批評して……！」

まさしく暴ぼう君くんの悪あく行ぎようを責める口調であった。

だというのに、リリアナは真っ赤な顔のまま目をちょっとだけ潤うるませ、護堂の反応をうかがうようにしている。

凛々しい女騎士の顔ではない。まさしく『女』というべき可愛かわいさであった。

「そ、そんなことを言われてしまっては、また身につけるしかありませんっ。草薙護堂……あなたはときどき、驚くほど狡こう猾かつで冷れい酷こくな人間になりますね！」

……身に覚えがないことで責められても。

護堂は頭を抱えたくなった。本当に俺はそんなことを言ったのか？

「さ、さあ、あたたかいうちに朝食をお食べください。その間に、今日のスケジュールをご説明いたします。……今日はまず正午に、トリノのホテルで会食の予定です」

女騎士にして執事、今はメイドでもある少女。

　話題を変えにかかった彼女の報告に、護堂は首をかしげた。ホテルで会食？

「それって誰とだ？　ずいぶん大げさだな」

「カンピオーネである草薙護堂が、聖ピントリッキオと面会されるのです。然しかるべき場を設けるのは当たり前でしょう」

「聖ピントリッキオ？」

「かのサルバトーレ卿きようの師でもある聖ラファエロの正統なる弟子にして、トリノの結社《老貴婦人》の新たな総そう帥すいです。わたしやエリカよりも一世代上……若手の大騎士のなかでは、ローマのフランチェスコ卿と並ぶ随ずい一いちの実力者でしょう」

　丁てい寧ねいに教えるリリアナは、しかし、改めて眉まゆをひそめた。

「昨夜もお教えしたことですよ？　もうお忘れなのですか？　……それともまさか」

　ハッとした表情で見つめられて、護堂はどぎまぎした。

　見慣れぬ衣装のせいか、彼女の美び貌ぼうがいつもと異なる魅力にあふれていて困る。

「昨夜のように、また悪ふざけをされるおつもりですか？　まじめな話の途中で、いきなりわたしに理り不ふ尽じんな命令をされたように」

　記憶にまったくないが、そんなことをしたのか自分よ。

　数時間前の己に、護堂は文句を言いたくなった。リリアナもそのはず……あれ？

「あなたという方は、本当にどうしようもない面を隠し持ってらっしゃいますね。でも、草薙護堂は神殺しの魔王。——だとすれば、それもまたむべなるかな……家か臣しんとしては、そのように受け止めるべきかもしれません」

　リリアナの双そう眸ぼうが熱っぽい。そのまま身を寄せてくる。

　この流れ、おかしくないか？　手厳しく文句を言い立てられる場面では？

「……そして、あなたの女である身としては、そういうわがままさが不思議とかわいらしくも感じられます。ええ、あなたが望むのであれば、またちがう衣装に身を包むのも悪くないように思えてきました……」

　リリアナが唇を寄せてきた。

　控えめなキス……かと思いきや、いきなり舌を絡からめてきた。

　まるで、今まで抑おさえていた想おもいを一気に解き放ったかのような激しさ。

　こ、これはいろいろ問題があるだろう！

　護堂はあわててリリアナを振りほどいた。ベッドからドアへ飛ぶように走る。早く逃げねば！　外に出た瞬間、意識が暗転した――

　チュンチュン。小鳥のさえずりが聞こえる。

　護堂は頭から布ふ団とんをかぶり、警戒心を高めた。今までと同じパターンか？

　まず状況確認……布団の隙すき間まから外の模様を観察する。畳たたみが見えるから、和室のようだ。この布団もベッドではなく、畳に直接しかれていた。

「……起きてるみたいだね、王様」

　来た！　清せい秋しゆう院いん恵え那なの声が、頭上から降ってきた。

「実はさ、王様が最近ハマってるらしい服を特別に仕立ててもらったんだ。だから、ちょっと見てもらおうと思って……来ちゃった」

　服。警戒心を刺激させられる単語だ。

　それに『来ちゃった』？　つまりノンアポ、会う予定はなかった

のか？

「もう……息づかいが聞こえるから、起きてるのはわかってるんだからねっ。王様、こっちをちゃんと見てよ！」

　いきなり布団をはぎ取られた。犯人はもちろん恵那だ。

　そこは庭付き一軒家――しかも純和風建築の一ひと間まとおぼしき、和室のなかだった。

　田舎いなかの親しん戚せき宅や温泉宿に泊まったときを思い出す。しかし、その室内に似合わないことおびただしい、容よう姿し端たん麗れいなメイドさんがいた。

　フリルをあしらい、可愛らしく仕上げたエプロンドレス。

　それをまとうのは黒髪の媛ひめ巫み女こ――清秋院恵那。

　大やまと和撫子なでしこにして自然児という複雑なプロフィールの持ち主は、今メイドさんでもあった。

「……おまえ、どうしてそんな格好を？」

「ヤだな、王様。最近ハマってるんでしょ？　ヨーロッパに行ってる間、ときどきこれで楽しんでたって情報が入っているよ」

　ポッと頬ほおを紅あかく染そめながら、恵那は言った。

「だから恵那もさ、みんなと差がつくのもイヤだし、用意してみたんだ。……でも、着るだけなら全然いいんだけど、王様のところに見せに来るのがすごく恥ずかしかった――」

「は、恥ずかしいなら、わざわざ着なくてもいいだろうにっ」

「そんなの、もっとヤだよ！　せっかく王様の好きなものを教わったのに、それを無む駄だにするだなんて……。恵那だって王様のためにいろいろしてあげたいんだから、冷たいこと言わないで！」

　健けな気げなことを言う恵那だった。

　我が道のみを往ゆく自由人のくせに、ときどき驚くほどしおらしいのだ。

まあ、男と女としてふれあうとき限定という、日常生活ではほとんど見られないレアな精神的側面ではあったが。

「――恵那さん!?　どうして恵那さんがここに!?」

唐突にふすまが開き、よく知る少女が入ってきた。

万まり谷や祐ゆ理りだった。茶色味の強い髪ながら、誰よりも『和』を感じさせる美少女。彼女もまた筋すじ金がね入りの大和撫子である。

祐理の装いを見て、護堂はちょっとびっくりした。

見慣れた制服でも巫み女こ装しよう束ぞくでもない。簡素な和服の上に、割かつ烹ぽう着ぎを重ねている。お嬢さまではあるが誰より家庭的な彼女に、よく似合っていた。

しかし、メイド姿の恵那と並んだためか、どこか仮装っぽく見える……。

「こちらでは、わたしと護堂さんのふたりだけだとうかがっていたのですが、わざわざお呼びになったのですか？」

怜れい悧りな媛巫女の瞳が、悲しみでわずかに揺れている。

護堂はぎくりとした。自己申告によれば、恵那は勝手に来たらしい。まったく身に覚えはないし、やましいところは皆かい無む。

だが、不思議と罪悪感を喚かん起きさせられた。祐理の美び貌ぼうと可か憐れんさのせいか――。

それでも黙っているわけにはいかない。身の潔けつ白ぱくをアピールしなくては！

「い、いや。そういうわけじゃない。清秋院のヤツがここまで勝手に来ただけで」

「わざわざ恵那さんの方から？　では、その格好は一体……？」

「ごめん、どうしても新しく仕立ててもらった服を王様に見せたくてさ。あのね、王様はこれが最近のお気に入りなんだって」

怪け訝げんそうなまなざしに、恵那はあっけらかんと言った。

護堂に対して示すしおらしさは、媛巫女仲間には発揮されないようだ。その説明に祐理は愕がく然ぜんとし、表情を凍こおらせた。

「そんな——そのようなメイドの方の衣装が、ですか!?」

「うん。エリカさんやリリアナさんにも着せて喜んでたって、ヨーロッパ方面から清秋院の家に情報提供があったんだ。ほら、リリアナさんとこのメイドさんから」

「で、でしたら、その衣装も彼女から!?」

「ううん、こっちは陸りく家けの若様に用意してもらった。あそこが日本で展開しているメイド御殿、実は王様の肝きも煎いりらしいよ。頼んだときに若様、『叔父上も興味がないふりをして、意外とお好きでいらっしゃるから』ってニヤッとしてた」

媛巫女たちの会話を聞きながら、護堂はガックリした。

カレンはそんなバイト（彼女のことだ、無む償しようではあるまい）をしてたのかと。それに鷹よう化かのヤツ、また誤解を生むような発言をして……とも。

護堂の失意など知らぬ祐理は、きりっと凛り々りしくにらみつけてきた。

「どういうおつもりなのですか、護堂さん!?」

「ど、どういうって？」

「仮にも『王』と呼ばれる方が、女性にいつもと異なる衣装を着せて愉たのしむ……そのような倒とう錯さくしたご趣味に傾けい倒とうされるなど、あってはならないことです。それで傷つくのはあなた御自身の威い厳げんと名声なのですよ？　もっと節度を保つべきでしょう！」

ひさしぶりに一いつ喝かつされた。

気け高だかくも凛々しい、媛からの叱しつ責せき。護堂は首をすくめた。

「そ、それに、そのようなお気に入りがあるのでしたら、もっと早くおっしゃってくださればよかったではありませんかっ」

へ？　いきなり叱責の方向性が変わった。

驚く護堂の前で、祐理はもじもじと恥ずかしげにしながら言う。

「わ、わたしだって、あなたの御目を喜ばせるための努力は惜おしみません。それはその、すこし倒錯した、あまり声高に吹ふい聴ちょうするようなご趣味ではないと思いますが、あなたのそういう面を受けいれる度量がわたしにないと思われては……困ります」

いやいや。困るのはこちらの方だ。心のなかでつっこむ護堂。

その間に、媛巫女たちは勝手に事を進めはじめた。

「じゃあさ、実は予備も何着か作ってもらったんだ。祐理もそっちを着て、王様に目の保養をしてもらおうよ」

「そんな!?　急におっしゃらないでくださいっ。まだ心の準備が――」

「何言ってんの。王様の趣味を受けいれる器うつわがあるって言ったばかりでしょ？　祐理もいっしょなら、恵那の方も心強いしね。ほら、こうやって早く脱いでさ……」

「む、無理矢理脱がさないでください!?　そ、その、ひとりで脱げますから……」

奔ほん放ぽうな自然児がたおやかな友人の割烹着を引っぱり、着物の帯をほどいている。

すると、美貌の媛巫女はお節せつ介かいな助力を断り、悄しょう然ぜんとした顔で自みずからの着物の襟えりをゆるめ、帯に手をかけ――きぬずれの音。

こ、こら、俺がいる前で着替えるんじゃない。苦情が喉のどもとにせり上がってくる。

だが、それを口にできないまま護堂はゴクリと生なま唾つばを飲み込んだ。祐理のか細く、しかし十分に肉づきのよい肢し体たいが今、目の前にある。象ぞう牙げ色いろの肌、なまめかしい背中を目

撃して、いやが応にもテンションが上がってしまう。



ダメだ！　ここからも逃げ出さなくては！

かろうじて理性の警告を聞きいれて、護堂はさっきの布団を頭からかぶった。

視覚と聴覚からの情報を全て遮しや断だんする！　眼前の楽園を無視せんと決意した途端、またも意識が暗転していった。恵那の声も祐理の声も聞こえなくなる。

代わりに、ひとりの男の後ろ姿が見えた。

秀しゅう麗れいなはずの顔立ちを、歴戦の精せい悍かんさが錆さびのごとく彩る。

彼はきっと長き戦いに倦うみ、疲れ果てている。しかし、ひとたび戦場に立てば、必ず鬼神のごとく活躍するはずだ。

厳しくも哀しい男の背中であり、横顔だった。

それはまさしく、戦い疲れた英雄の姿そのものであった――。

「……うなされていましたが、大丈夫ですか、叔父上？」

陸鷹化の呼びかけで、護堂は目を覚ました。

まだ早朝のようだ。この教室は名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎの『スク水＋メイド喫茶』改め『メイド喫茶チャイナアレンジ館』の出店予定地だった（陸家より派は遣けんされるメイド部隊の要望により、スク水も猫耳も却きやつ下かされたのだ）。

学園祭の前日、盛りあがる前夜祭を尻しり目めに三人は開店準備に励んでいた。

そこで護堂も彼らを手伝い、四人で泊まり込みを敢かん行こう。夜の一時近くに準備は終わり、草薙護堂＋三バカはそのまま眠ることに――。

見れば、名波たち三人はすぐそばで眠りこけていた。まだ起きそうにない。

「俺はどうして、あんな夢を見たんだ……？」

　意識のはっきりしてきた護堂は、一連の悪夢（？）を思い出した。

　すると陸鷹化は訳知り顔で、机の小ビンを見た。昨夜、寝ぼけて飲んだヤツだ。

「妙な夢でしたら、まちがいなく邯かん鄲たん夢むの霊薬を飲んだせいでしょう。そいつを服用した人間は、将来についての夢を見てしまうんですよ」

「将来、だって？」

「ええ。数年後あるいは数十年後に何をしてる、みたいな」

「そうか……それで妙な夢を見たのか」

　護堂はうなずいた。カンピオーネに魔術は効かない。しかし、経けい口こう摂せつ取しゅはべつだ。

　リリアナに飲まされた麻ま痺ひの秘薬もみごとに効いた。

「あの三人がうちの倉庫から持ち出した資材にまぎれ込んでいたと聞かされて、朝早くだってのに回収に来たんですがね。まさか叔父上の口に入るとは」

「悪い。酒かと思って机によけといたんだけど、寝ぼけて飲んじまった」

　深夜の一幕を思い出して、護堂はあやまった。

「でも安心したよ。バカげた夢にびっくりしてたんだ。あやしい薬のせいだったんだな」

「まあ、薬が原因なのはたしかでしょうが……」

　夢の元げん凶きようが己の潜在的な願望ではないと知って、護堂は安あん堵どしたのだが。

　陸鷹化から冷静に言われてしまった。

「服用者がすぐれた霊視の素養を持つ場合、あの薬はそこそこの確

率で『来きたるべき未来』を見せるらしいですよ。カンピオーネの方々はそうした面でも傑けつ出しゆつしていますよね？　ただの夢と割り切るのも早計でしょう。どんな夢だったんですか？」

「い、いや。たいした内容じゃないんだ！　気にしないでくれ！」

　護堂はあわててごまかした。

　確率を伴ともなう話なら信しん憑ぴよう性せいは低いはず。早く忘れようと己に言い聞かせながら。

　草薙護堂が見た夢は、かくして彼の記憶から抹まつ消しようされることとなった。

　学園祭がはじまるまで、あと数時間という朝の出来事だった。

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

VIII　受難の魔王たち

著者　丈月　城

２０１２年５月24日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！
VIII　受難の魔王たち」

２０１１年７月17日発行の第３刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０９５（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　有限会社ワイズネット